R E H K

第 6 号

目　次

《講　演》

積極哲学としてのウナムーノ哲学
—シェリング積極哲学との比較—……角　田　哲　康（ 1）

《論　文》

スペイン語の疑似分裂文と分裂文……伊　藤　亜　矢（15）

"Cantares de Ise", vistos desde la literatura hispánica……木　下　まりあ（31）

バルデロマールと追憶のピスコ生活情景……高　林　則　明（43）

メシカの俗信にみる呪術的思考
—『フィレンツェ文書』第五書の解読—……山　本　匡　史（61）

スペイン語繋辞動詞と状態動詞に関する一考察
—"甲ハ、乙ダ" の表現について—……米　田　富　彦（79）

《書　評》

ハイメ・エイサギルレ著『チリの歴史』
—世界最長の国を歩んだ人びと—
山本雅俊訳 新評論 1998年……梅　田　美代子（95）

ホセ・マリア・アルゲダス著『ヤワル・フィエタ』（血の祭り）
杉山晃訳 現代企画室 1998年……片　倉　充　造（99）

《翻　訳》

ジョン M. リプスキ著「ペルーのスペイン語」……岡　本　信　照(訳)（103）

《資　料》

スペイン関係文献目録……坂　東　省　次（117）

1998

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

積極哲学としてのウナムーノ哲学
- シェリング積極哲学との比較 -

角田哲康

0. はじめに

近年のウナムーノ研究は、書簡をはじめとする未発表の草稿分析等が中心になりつつある。ここ数年の間に出版された書簡研究書の多さにもこの傾向は反映されている。確かにウナムーノの思想を理解するためには、1897年の宗教危機などウナムーノの個人的な体験における心理的うねりを捉えていくことが必要ではある。しかしこうした研究は前期ウナムーノとしてのあるいは後期ウナムーノとしての主要な個々の作品分析の中で展開され、これらの研究の中で哲学辞典に記されている所謂実存主義の先駆者としての哲学者ウナムーノ像を捉えることは容易ではない。

ウナムーノ研究には不可欠の書の一つである *Cuadernos de la Cátedra Miguel de Unamuno* においても同様な傾向がうかがえる。本年 6 月にスペイン・サラマンカ大学に於いて開催された国際ウナムーノ学会のプログラムを見てもまた同様である。今年が1898年からちょうど 100 年という記念すべき年であるがゆえ、1898 年の世代に関連した発表が多いのは致し方ないが、その他の多くはウナムーノの詩についてや宗教的危機をめぐる心理分析などの発表が中心である。そしてその多くがウナムーノの主要な文学作品の分析を通して行われている。

ウナムーノは、自身がそうなることを望んでいたわけであるが、所謂体系化された枠組みの中で思想を展開させることはなかった。多岐多作にわたるウナムーノの著作群がこのことを物語っている。これらの著作の中に、狭義においての純哲学的作品をウナムーノが残さなかった以上、主たる文学作品の分析を通して彼の思想を考察することが、ウナムーノの思想に近づく合理的な手法ではあることは否めない。

先ほどから思想という用語を用いているように、一般にこうした分析によって研究がなされるのはウナムーノ思想であって、それがウナムーノ哲学と称されることは少ない。日本においては哲学と思想の区別がともすれば曖昧になりがちではあるが、思想がマテリアルに

基づく実証的な意味合いを持つものであり、哲学が形相的な事物に関しての考察であるとするならば、ウナムーノが展開したそれは思想と呼ばれうるものであり、またそれが思想的に不滅の意義を持ち合わせているのかが問われてきたのかもしれない。しかしながら本稿では、哲学者ウナムーノとしての位置づけを行うことによって、ウナムーノ解釈に別の角度から光を与えてみたい。この際、現実存在や神をめぐる問題に特に焦点を当て、カント、フィヒテ、ヘーゲルと並ぶドイツ観念論の担い手とされるシェリング Fiedrich Wilhelm Joseph von Schelling (1775-1854)の哲学との関連性に着目してゆくことにしたい。

1. シェリング哲学

シェリングは 1775 年ドイツ・ヴェルテンベルク州レオンブルクに生まれた。幼少の頃から天才の誉れ高く、九歳でニュルティンゲンのラテン語学校に入学し、十一歳までにはテュービンゲン神学院で学ぶための試験に合格していた。やがて十五歳でテュービンゲン神学院に入学することになるが、この時のコミトリーネであり寮における同室者でもあったのは、五歳年上のヘーゲルとヘルダーリンであった。はじめの二年間はテュービンゲン大学哲学部に在籍し、1792年に哲学修士となる。そして1795年には神学の学位を取得する。この頃からフィヒテと親交を持つようになり、フィヒテやゲーテの推薦によって 1798 年には二十三歳の若さでイェーナ大学の員外教授となる。人生の早い段階で学問的に名をなしたシュリングであるが、その後師と仰いでいたフィヒテや年上でありながら弟子のような関係を結んでいたヘーゲルとの決裂、友人シュレーゲルの妻カロリーネとの結婚問題など波風の多い人生を歩むことになる。こうして中期から後期にかけて不遇ともいえる研究生活を送ったシェリングが再び脚光を浴びたのは、1840年、実に六十五歳の時であった。ヘーゲル没後左派・右派に分かれ混乱するヘーゲル学派に対するいわば重石として、ヘーゲルの牙城であったベルリン大学に招聘されたのである。ヘーゲルの没後十年目のことであった。この後六年間に亘ってベルリン大学で講義を行うが、講義録の出版をめぐる訴訟問題のトラブルから1846年に職を辞すことになる。その後は科学アカデミーでたびたび講演を行うのみで、1854年静養先のスイスのラガツにて七十九歳の生涯を終えた。

振幅の大きかったシェリングの人生同様に、彼の哲学的変遷も多彩であった。シェリング哲学は、一般的に、以下の様に大別される。

1)自然哲学期 la filosofía de la naturaleza

2)超越論的観念論期 el idealismo trascendental

3)同一哲学期 la filosofía de la identidad

4)自由論期 la filosofía de la libertad

5)積極哲学期 la filosofía positiva

これらの哲学的変遷の中で、前期から中期にかけて、すなわち自然哲学から同一哲学まであたりの段階が一般にシュリング哲学として評価を受けてきた。この評価は直接的な評価というよりも、フィヒテ哲学とヘーゲル哲学を結びつけるもの、あるいはヘーゲル哲学のさきがけとしてのものであった。ことに日本においては、カント哲学とヘーゲル哲学の間に埋没している感さえあった。しかしながら、1954年にシェリング没100周年記念としてラガツで開かれたシェリング国際学会において、ヤスパースやシュルツが後期シェリング哲学に対する新しい解釈を発表してから、後期の積極哲学に対する再評価が世界的に行われはじめている。この点に関しては後に触れることにしたい。

2. シェリング積極哲学とキルケゴール実存哲学

― ヘーゲル哲学批判のさきがけ ―

ウナムーノの著作が難解であるとされる理由のひとつに、引用の多さが挙げられる。引用の典拠が明記されている箇所以外にも、ウナムーノ的な文体に置き換えられている隠された引用が多く存在する。このことはウナムーノの博学ぶりを証明するものではあるが、読む者に対して相応の学識を暗に要求するものでもある。

引用先が明記されている作品の著者の代表として、キルケゴールの名を挙げることができる。イプセンやブランデスの作品の原語版を、1891年の大学教員採用試験で知遇を得たガニベーにわざわざ用立てもらい、かつて読んでいたキルケゴールへの関心が1901年ごろからウナムーノに再びよみがえる。ウナムーノの代表作『生の悲劇的感情』(1913)などに見られるように、その後のキルケゴールへの傾倒振りは周知のとおりである。[1] こうしてキルケゴールのキリスト教的実存主義はウナムーノに大きな影響を与え、ウナムーノ哲学のさきがけであると一般にいわれる。その一方で、ヘーゲルの強い影響

も指摘されている。[2] この点に関してはウナムーノ自身もヘーゲル主義者であったことを認めており、まだ二十四歳であった1868年に、ヘーゲルの『論理学』(1812-1816)に倣い『論理哲学』(1886)の草稿を起こしていたことからもそれは明らかである。[3] こうしてヘーゲルの名はキルケゴール同様にウナムーノの著作に顕在する。しかしながらヘーゲルとともにドイツ観念論の流れを構築したカント、フィヒテ、シェリングの中で、シェリングの名をウナムーノの作品の中にに見出すことは難しい。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのスペインでは、フリアン・サンス・デル・リオによってクラウゼ主義が、本国ドイツはもとより、ヨーロッパのどこよりも深く浸透した。クラウゼが展開した万有内在神論は、汎神論と有神論を融合させ、一切の対立を超越する本質として神を理解する。このクラウゼ主義はシェリングの同一哲学の影響を強く受けたものであり、クラウゼ主義の影響を青年期に深く受けたことを肯定していうるウナムーノが、シェリング哲学について言及しないことに奇異な感を覚えるのは否めない。

ところがウナムーノとシェリングは、キルケゴールを接点に結びついてくる。先にも述べたように、シェリングは晩年ベルリン大学の教壇に立つ。1841年秋から始まったシェリングの講義を聴くために、キルケゴールはコペンハーゲンからベルリンまでやって来たのである。当時二十八歳のキルケゴールが最初の講義にいたく感激したことを日記に認めたことは広く知られているが、キルケゴールをこの時感激させた最大の理由は、シェリングが哲学と現実との関係について講義を展開した点にある。ヘーゲル哲学批判としての現実性の解釈において、両者が一致を見る可能性があったわけである。

シェリングはベルリン大学の講義において、積極哲学と消極哲学 la filosofía negativa との違いを強く打出そうと試みた。これは後期シェリング哲学とヘーゲル哲学との違いでもある。ヘーゲルがかつて『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』(1801)を出版することで本格的に哲学の世界に足を踏み入れたことを思うに、何とも皮肉な回り逢わせである。シェリングによれば、消極哲学は事物に内存する普遍的本質を思惟によって理解しようとする。したがって消極哲学とは、存在の本質すなわち「何であるのか」(Was)を問題とするのみの純理性的な哲学である。それに対して積極哲学は「なぜ存在するのか」(Daß)、すなわち現実存在を把握しようとする。この際、積極哲学は消極哲学とは異なり、理性ではなく経験によって現実存在を捉えようとする。なぜなら、例えばカント的に理性を理解するならば、理性とは行為を自ら定めた道徳の法則に一致するように導く意

欲だからである。理性は、それゆえに、経験なくして現実存在の問題に答えることができないのである。

しかしながらヘーゲルは弁証法による、つまり理性的思惟による主観と客観の統合によって存在の根拠の問題を解決しようとした。本来的に消極哲学であるヘーゲル哲学が、理性的思惟によって積極哲学的に現実存在を捉えようとしたことについて、シェリングはさらに強く批判を加えたのである。このヘーゲル批判にキルケゴールは感激したわけである。ここにおいてウナムーノ哲学に影響を与えたヘーゲル批判のさきがけとして、シェリングとキルケゴール両者の哲学が浮かび上がり、三人の接点が具現化してくるのである。

3. シェリング積極哲学とキルケゴール実存哲学の決裂

先に触れた1954年に開催されたシェリング没後百周年の記念学会でのヤスパースやシュルツあるいはティリッヒによる新しいシェリング解釈の眼目は、まさに前節の最後に述べた点にあったのである。つまり本質を問うものではなく、現実存在を問う哲学として後期シェリング哲学が評価されたのである。この意味において、実存哲学の先駆者としてのシェリング像が浮かび上がってくる。確かに1950年代初頭は、まだサルトルの実存主義が勢いを失っていく前で実存主義研究が盛んな時期であり、文字通り積極的に実存主義として後期シェリング哲学を評価しようとする流れがあったことも事実である。いずれにせよ、この当時から百年ほど前に、シェリングの講義にキルケゴールは大変な熱意をもって臨んでいたのである。

だがキルケゴールのシェリングに対する評価はほどなく大きく変わることになる。一年半ほどのベルリン滞在を予定していたにもかかわらず、キルケゴールは四ヶ月あまりでコペンハーゲンに戻ってしまう。あれほど感激していた講義についても「消極哲学のもとに彼が論理学を理解していたことは充分に明らかである。しかし積極哲学のもとに彼が一体なにを理解していたかという点になると、彼が自分で提供しようとしていたものは疑いもなく積極哲学に相違あるまいということ以外には、どうも私にははっきりしない」[4]と酷評することになるのである。

シェリングによるヘーゲル批判の中心は「理性的思惟は可能性に過ぎない」という点にある。したがって現実存在についても、シェリングのヘーゲル批判によれば、理性による可能性としての存在として提起されるに過ぎない。ヘーゲルは現実的なもの(Wirkliches)

は、本質と現象との、内面と外面との統一としての具体的なものであるとともに、真なるものとして理性的なものであるとしている。[5] さらに現実的なものは、所与として前提されているものではなく、自らを理性的に形成していく活動的なものとして、可能性の現実性への転化の過程を必然性(Notwendigkeit)として捉える。[6] しかしいくら現実的なものが活動的であったとしても、その現実的なものが理性的思惟の中で取り上げられる限り、可能性から現実性への転化はあり得ない、とシェリングは反論する。「ヘーゲルは現実性に到達しなければならい」というシェリングの言葉が端的にこのことを示している。 おそらくキルケゴールもこの現実存在の解釈までは、シェリング哲学を受け入れていたのではなかろうか。例えば、「「本質」とは「あった」ところのもである、「あった」ということは「ある」ということの過去である、それ故に本質とは止揚せられたる存在、あったところの存在である、のたぐいである。これが論理的運動だというのだ！もしも誰かがヘーゲル論理学[…]のなかで論理的運動を前進させるためにせわしげに立ちまわっている奇異な妖魔と怪物の数々のすべてを捕らえて集めてみるという労をあえてせられるならば、後世の人たちはいかに陳腐な洒落がほかならぬ論理学のなかで重大な役割を演じさせれているかを知って唖然とすることであろう」[7]というキルケゴールの言葉からは、むしろヘーゲル批判のさきがけとして積極的にシェリング積極哲学を受け入れていた姿勢が見うけられるのである。

では、いかなる点においてキルケゴールはシェリングの積極哲学を批判するに及んだのであろうか。すでに述べたようにデカルトからヘーゲルに至る理性的思惟中心の消極哲学は「何であるのか」(Was)を問題とするものであった。一方シェリングの積極哲学は「なぜ存在するのか」(Daß)を問うものであった。確かにヘーゲルは本質と実存の直接的な統一によって現実性を捉えようとしてはいたが、実存の根拠はあくまでも本質であった。そこでシェリングはこの実存を本質から、いうならば解放し、可能性としての実存ではなく、プリウスとしての実存を確立しようとしたのである。

シェリングは、ところで、実存の根拠を何に求めたのであろう。ここに至り、先の「なぜ存在するのか」は「なぜ存在するものがあるのか」という問いへとさらに突き進められることになる。哲学は、概して、この根拠を神か人に求める。シェリングはこれを神に求めた。「神は自己のうちに自己の実存の内面的根底を含み、この根底はその限りにおいて実存するものとしての神に先行する。が、同様にまた、神は根底の先者(Prius)である。というのは、神が現勢的に実存しなかったならば、根底は根底としても有り得ないだろうからである」[8]として、シェリングは神の存在を把握しようとする。このシェリングの言葉は、実は1809年

の『人間的自由の本質』の一節であり、神の実存の問題が積極哲学以前よりすでにシェリング哲学の根幹を成していたことがわかる。このシェリングの言葉や積極哲学の展開は、ある意味では、形而上学的である。現実存在を問うことが、当の現実存在の実存の根拠でなければならなくなってくるからである。

キルケゴールは、ヘーゲル哲学には生きている自分の魂が欠落していると批判を行った。そして先に述べたヘーゲルの必然性を受けて、キルケゴールは「哲学者達が説明しているように、必然性が可能性と現実性との統一であるというようなものではない、－いな、現実性が可能性と必然性との統一なのである。…自分の自己のうちに存する必然的なるもの、… この自己の必然性がこの自己を更に正確に規定するか」[9]が問題であるとしている。これらの批判は、シェリング批判の言葉でもある。「なぜ存在するのか」(Daß)を問うなかで、シェリングは存在の一般的な把握から神の存在の把握へと展開してしまい、存在の根拠である意欲を悟性によって媒介し統一するところに精神の成立を見、神はこのような精神である[10]としたからである。ヘーゲル哲学の中に見出せなかった生的自己を、キルケゴールはシェリング積極哲学の中にもつまるところ見出せなかったわけである。なぜならばキルケゴールは Daß の中での生的自己の存在根拠を求めていたからである。

しかしながらキルケゴールとシェリングのそれぞれの哲学的姿勢こそが、ウナムーノ哲学にとって重要な意味合いをもってくるのである。

4. ウナムーノ哲学における積極哲学と消極哲学

フィヒテやヘーゲルの間に埋もれていた感さえあるシェリングが再び評価されはじめたのは、シェリングの積極哲学が実存主義のさきがけとして理解されるようになったからである、ということはすでに述べた。このさきがけ的なところにキルケゴールが関心をもったことについても同様に触れてきた。そもそもキルケゴールがベルリン大学にまで足を運んだのは、恋人レギーネとの婚約解消問題も絡んではいたが、ヘーゲル哲学に対する疑問を解き明かすためであった。他の多くの哲学者と同じくキルケゴールもヘーゲル哲学の影響を受けていたからである。ある意味ではこの影響の大きさこそが、キルケゴールをヘーゲル批判としての実存主義へと導いたともいえるのである。ウナムーノもヘーゲル哲学の強い影響を受け、後にヘーゲル批判へと転ずるとされる。この転換に、所謂 1897 年の宗教的危機が関っていることに加え、キルケゴールの実存哲学が強く影響していることは詳説す

るまでもないであろう。

ところでウナムーノにおけるシェリングの影響は、直接的な言及の箇所はほとんど見当たらないものの、現実存在をめぐる解釈において浮き彫りにされてくる。例えば、ウナムーノは存在を実感するということは、自分が存在者であることを知るということとは全く別であるとして、本質との違いを常々指摘していたが、これはシェリングが存在者が何であるかを知ることと、存在者があるということを知ることとはまったく異なった事柄であると主張していたことを想起させる。消極哲学という言葉こそ用いてはいないが、ウナムーノがシェリングと同様な立場からヘーゲル批判を行っていることは明らかである。

シェリングの同一哲学の影響を受けているされるクラウゼ主義についても、「カント哲学はプロテスタントであるが、われわれスペイン人は根本的にカトリックなのだ。もしクラウゼがわが国でいくらかの根を張ったとするなら －これは一般に考えられている以上に広範囲で根が深いが－ それはクラウゼ哲学が敬虔主義(ピエティズム)にその根を有していたからである。そして敬虔主義は、リッチェルがその歴史に関して述べているように、とりわけカトリック的な根を有しており、かなりの割合で、プロテスタント的合理主義の内部へのカトリック神秘思想の侵入というより居すわりを意味しているのである。こう考えるなら、わが国の少なからずのカトリック思想家がクラウゼ哲学の信奉者になったのも納得がいく」[11]として宗教的感情からの説明を試みており、あえて汎神論的なシェリングの影響に触れないでいるかのようである。

一方で初期シェリングに強い影響を与えたフィヒテについては、「私が自我という場合は、具体的・個人的な自我を意味しているのであり、フィヒテのいう自我ではなく、フィヒテ自身、人間フィヒテが問題なのである。〔…〕 フィヒテが哲学に持ち込んだ抽象的な自我と混同されたくない」[12]と、ヘーゲル批判同様、キルケゴール的に批判を加え、具体的に言及している。

フィヒテ、ヘーゲルそしてキルケゴールに触れながらも、これら三人の哲学者に極めて現実的に関りをもつシェリングにウナムーノが筆を向けないのはなぜであろうか。ここでキルケゴールが行ったシェリング批判を今一度思い起こしてみたい。その論点は、本質ではなく現実存在を問いながら形而上学的な矛盾に陥っていること。そして究極的に現実存在の存在根拠を、いわば超越的な神に求めたことにあった。これが例の生きている自分の魂が欠落という言葉につながるわけであり、ウナムーノがキルケゴール哲学を高く評価する点でもある。だがウナムーノ自身が、われわれの生を統一し、それに実践的な存在理由

を与えるものこそ、まさに内的矛盾であると予てより語っているように、ウナムーノの哲学は内的矛盾を抱えるものであった。「魂の不滅性を救いうるのは二元論のみ」[13]とする一方で、「私は、私の以前の存在のどれをも、たとえそれらを思い出すことが[論理的には]可能だとしても、[現実には]思い出せないのである。なぜならば、絶対的にしかも完全に同じ二つのものは、単一にほかならないからである」[14]とウナムーノは述べるのである。

ウナムーノは、生の有限性を認めること、すなわち死を発見することは不滅性への渇望を発見することに他ならないと考えていた。これは後期ウナムーノ哲学の実存主義的根幹を成すものであるが、同時に自己矛盾を孕むものでもある。生の有限性を意識することは、同時に死、虚無を認識することでもあり、生の現実存在の根拠を求めることがその一方で死の根拠に転じているからである。この理性的な展開を必要とするウナムーノ哲学は、まさにキルケゴールが積極哲学をして、形而上学的矛盾を起こしているとした批判につながるものである。この点についてウナムーノは「兄弟のキルケゴールが、完全に正しいとも考えていない。なぜならば、抽象的思想家というか抽象の思想家自身も、存在するために考え、存在を止めないために考え、あるいはたぶん、いつか存在を止めねばならないということを忘れるために考えているからである。これが抽象的思考への情熱の根源なのである。ヘーゲルもキルケゴールと同じように、自分自身の具体的で単一な存在に無限の興味を持っていながら、国家お抱えの哲学者として職業的対面を守るためにその興味を抑え隠していたのかも知れないのだ。［…］不滅性への信仰は非合理的である。［…］不滅性を求める生的な熱望は、本来的な意味で問題ではない。［…］非合理的なものは合理化されることを願い、理性は、非合理的なものの上にのみ作用しうる」[15]とする。これはいうまでもなくヘーゲル擁護である。キルケゴールを再読し始めた時期に、ヘーゲルを高く評価するウナムーノの発言も指摘されており[16]、ウナムーノ哲学の根底には一貫してヘーゲル哲学、すなわち消極哲学の影響が強く残っているといわざるを得ない。

このウナムーノの哲学的変遷は、カントやフィヒテの消極哲学の自他ともに認める完璧なる理解者であったシェリングが、彼らの批判に転じ積極哲学を論ずるに至りながらも、消極哲学の色彩を根底に残しつづけていた過程に類似性をみるものである。またシェリングは思弁的哲学ディスクールに侵入してくるものを、ヘーゲルのように排除するのではなく、消化吸収しようとする。このような態度は、ヘーゲルにはおそらく概念の厳しさを維持できない軟弱な態度に見えたかもしれないが、シェリングは存在形式の多様性を認めても、多様な形式において存在する実存を、絶対者の具現として把握しようとする形而上学的

な態度そのものは放棄しない。出発点はヘーゲル同様に絶対的なものであり、これが思惟の前提だったのである。[17] こうしてシェリングは絶対者たるものとして神を把握しようとするのであるが、この神の理解もウナムーノが最終的に求めていたものである。

繰り返すことになるが、ウナムーノ哲学はヘーゲル哲学に始まり、ヘーゲル批判へと展開する。この展開に大きく関り、影響を与えたのがキルケゴール実存哲学であった。しかしながら、先に指摘したウナムーノ哲学の理性的思惟による展開にはヘーゲル哲学が大きく影響している。この段階において、ウナムーノはキルケゴールのシェリング批判を通して、逆にシェリング積極哲学を、その矛盾も含めて、消化しようとしたのではないだろうか。シェリングがその哲学的ディスクールに排除ではなく消化吸収を導入しようとしたように、ウナムーノもシェリング積極哲学を消化吸収したわけである。こうしたシェリング的な消化吸収の観点に立脚すれば、直接的な言及がなくとも、極めてシェリングに近いウナムーノの哲学的姿勢について理解し得る。このウナムーノのシェリング的な哲学的姿勢は、ウナムーノの絶対者たる神の形而上学的解釈に集約されよう。「私は神があることを、神が存在することを欲した。神は存在するのではなく、むしろ超－存在する(sobre-existe)のであり、われわれを存在せしめる(existiéndonos)ことによってわれわれの存在を支えているのである。」[18]

ウナムーノ哲学形成には、ヘーゲル哲学、すなわち消極哲学、キルケゴール実存哲学に加え、シェリング積極哲学の影響があったことは以上明らかとなった。ことにキルケゴール、シェリングはともに生の哲学を展開してゆこうとしたわけであるが、シェリング的な生、つまり非理性の解釈、理性が存在するのではなく非理性が存在するという考え方が、ウナムーノの生の哲学に新しい解釈を与えてくれるのではないだろうか。

また別に考察を要するものであるが、シェリングの哲学がドイツ・ロマン主義との中で論ぜられることが多いことや家庭問題がシェリングの研究生活に大きな影響を及ぼしていたことが、ウナムーノの哲学的変遷に影響を及ぼしていた宗教的危機などの個人的問題を想起させることも附言しておきたい。

5. ウナムーノ研究の今日性　－結びにかえて－

ここまでウナムーノ哲学を、キルケゴール実存哲学、消極哲学そして積極哲学との関連性から考察してきたわけであるが、各々の哲学の究極的な論点は神の問題に関ってくる

ものであったといえる。「自分は何処から来て、何処にゆくのか」という命題とともにウナムーノが腐心した魂の不滅性の問題は、悲劇的な感情に立脚する自己の実存規定と神との関係を問うものであった。こうして神と人との関係を問うことは、今日の社会においても重要な意義をもっている。物質文明の中における理性的な自己規定が有限性とともに無を導くことを理性的に人は理解しているが、有限としての生のみならず無限の生をも求めることについては本能的に行っている。それはウナムーノが指摘しているように、現実存在に継続的な過程がない限りそれが無意味となることを知っているからである。[19] こうして人は絶対者としての神を前にして、自己の現実存在の根拠を求めようとするのである。ウナムーノ、シェリング、ヘーゲル、キルケゴールを始め、少なくとも西欧キリスト教社会の哲学者や人々にとって、人格神としての神は事実であり、合理的解釈や科学が否定しきれるものではないのである。

キルケゴールは「神とは一切が可能であるという意味であり、或いはまた一切が可能であるということが神を意味している[…]。自己が精神となるまでに自己の本質が根底から動揺せしめられて、一切が可能であるということを理解するに至ったような人間のみが、神との交わりにはいったのである。神の意志は可能的なるものであるというこのことによって、私は祈りうるに至るのである」[20]と述べている。プロテスタントとカトリックの教義上の違いはあれ、聖書の神を事実としてそのまま受け入れようとするキリスト教徒たちの姿勢は、日本人にとっては理解しにくいことなのかもしれない。たとえニーチェが無神論について語ったとしても、その意図は「もし神がいないとしたら」ということに他ならないのである。

こうしてキルケゴールは、人の現実存在を神との関りに求めるのであるが、それはある意味では哲学を展開しながらも本質を問う神学的な姿勢であるといえよう。一方「あるとはどういうことであるか」を問う積極哲学においては、神は極めて哲学的な存在であったといえる。ここにシェリング、ウナムーノそしてキルケゴールの違いが浮き彫りになってくる。この違いはキリスト教徒と日本人の神に対する理解の違いに通ずるものであるといえるかもしれない。「神とは何であるのか」、そして「神があるとはどういうことであるか」へとさらに進む日本人的な問い方は、まさに積極哲学的である。こうして日本人的な神とは、神学的な神であるよりも哲学的な神となる。ウナムーノ哲学を理解することは、ヨーロッパ・キリスト教社会における神の在り方を理解することでもある。そしてヨーロッパ人にとっての具体的な神の在り方を学ぶことになるわけである。ここにウナムーノが構築してきたものを哲学として理解する意義の一端がある。そして同時に思想家としてではなく哲学者としてのウナムーノ

を再認識することができるわけである。

シェリングは近代社会における啓蒙とキリスト教の関りを次ぎのように語った。「新しい時代の精神は、はっきりと一筋にすべての単なる有限な形式の否定を目指している。新しい時代の精神をここにも認識するのは宗教である。」[21] 世紀末を迎え、様々な物質的な問題や精神的な問題に具体的に直面し、それらを解決するための方向性を模索している我々にとって、シェリングのこの言葉は意義深いものである。現実存在と神の問題に取り組むことが、このような状況下において我々が存在することの意味の深さを教えてくれるのである。このことをまさに我々に具体的に伝えようとしている哲学者ウナムーノ言葉を引用し、拙論を終えることにしたい。

「人格的な生ける神、すなわちわれわれを識り、われわれを愛する永遠にして普遍的な意識を信じるということは、世界は人間のために存在すると信じることである。」[22]

註

＊本稿は、1997 年 11 月 23 日に開催された京都外国語大学イスパニア語学科修士会第 6 回研究会に於ける発表に基づくものです。発表の場を与えて頂いたこと、そして沢山の貴重なご助言を下さったことに対し、この場をお借りしてお礼申しあげます。

1) 「私が生の悲劇的感情と呼んでいるものがある。そしてその背後には、生そのものと宇宙に関する概念のすべてが、大なり小なり形づけられ意識化された一哲学のすべてがあるのである。［…］この生の悲劇的感情を持った典型的なタイプの人間たちがいた」とウナムーノは述べ、この中に近代の哲学者としてキルケゴールのみを挙げている。(『生の悲劇的感情』、p. 22)

2) Rivas, Pedro : *'Unamuno Lector de Hegel'* en *"Cuadernos de la Cátedra Miguel de Unamuno"*, XXIX, (1994), pp.111-113.

3) この『論理哲学』 *Filosofía Lógica* は未刊であるが、十章までの94ページに及ぶ構成内容は、例えば Manuel Pizán の *El joven Unamuno influencia hegeliana y* marxista(1970) などにおいて、確認することができる。書名からも明らかであるようにヘーゲルの弁証法の強い影響が見られる。このヘーゲルの影響については、ヘーゲルを通してドイツ語を学びドイツ人哲学者のなかでもっとも強い影響を受けたことを告白している。

4) キェルケゴール、『不安の概念』、p. 34.

5) 岩佐茂　他、『ヘーゲル用語辞典』、pp. 115-116.

6) 同掲書、p. 116.

7) キェルケゴール、『不安の概念』、p. 19.

8) シェリング、『人間的自由の本質』、p. 60.

9) キェルケゴール、『死に至る病』、pp. 59-60.

10) 廣松渉　他、『岩波哲学・思想辞典』、p. 941.

11) ウナムーノ、『生の悲劇的感情』、p. 333.

12) 同掲書、p. 10, p. 35.

13) 同掲書、p. 94.

14) 同掲書、p. 115.

15) 同掲書、pp. 128-129.

16) Rivas, Pedro : *O.cit.*, pp.111-113.

17) 伊坂青司　他、『シェリングとドイツ・ロマン主義』、p. 237.

18) ウナムーノ、前掲書、pp. 193-194.

19) ウナムーノ、同掲書、pp. 13-14.

20) キェルケゴール、『死に至る病』、p. 65.

21) シェリング、『学問論』、p. 123.

22) ウナムーノ、前掲書、p. 208.

参 考 文 献

Abellán, José Luis : *Historia del pensamiento español*, Madrid (Espasa), 1996.

Amorós, Cèlia : *Sören Kierkegaard o la subjetividad del caballero*, Barcelona (Anthropos), 1987.

Cerezo Galán, Pedro : *Las máscaras de lo trágico. Filosofía y tragedia en Miguel de Unamuno*, Madrid (Trotta), 1996.

Gadamer, Hans Georg : *La dialéctica de Hegel*, Madrid (Cátedra), 1994.

Hegel,G.W.F. : *Diferencia entre los sistemas de filosofía de Fichte y Schelling* (edición preparada por María del Carmen Paredes Martín), Madrid (Tecnos), 1990.

Pizán, Manuel : *El joven Unamuno influencia hegeliana y marxista*, Madrid (Ayuso), 1970.

Ribas, Pedro : *'Unamuno Lector de Hegel'* en *"Cuadernos de la Cátedra Miguel de Unamuno"* ,XXIX, Salamanca (Ediciones Universidad Salamanca), 1994, pp.111-121.

Salcedo, Emilio : *Vida de Don Miguel (Unamuno, un hombre en lucha con su leyenda)*, Salamanca (Anthema), 1998, 3.ª edición del autor (corregida).

Saña, Heleno : *La filosofía de Hegel*, Madid (Gredos), 1983.

Schelling, F.W.J.: *Experiencia e historia* (edición preparada por José L.Villacañas), Madrid (Tecnos), 1990.

— *Investigaciones filosóficas sobre la esencia de la libertad humana y los objetos con ella relacionados* (edición preparada por Helena Cortés y Arturo Leyte), Barcelona (Anthropos), 1989.

— *Sistema del idealismo trascendental* (edición preparada por J.Rivera de Rosales y V.López Domínguez), Barcelona (Anthropos), 1988.

Unamuno, Miguel de : *'Del sentimiento trágico de la vida'* en *"Obras Completas"*, I, Madrid (Escelicer), 1966, pp.635-677.

Urdanibia, Javier (Coord.) : *Los antihegelianos: Kierkegaard y Schopenhauer*, Barcelona (Anthropos), 1990.

アドルノ、T. W. 、『キルケゴール』、 山本泰生訳、みすず書房、1998.

伊坂青司 他、『シェリングとドイツ・ロマン主義』（シェリング論集2）、晃洋書房、1997.

岩佐茂 他、『ヘーゲル用語辞典』、未来社、1996.

ウナムーノ、『生の悲劇的感情』（ウナムーノ著作集3）、 神吉敬三／佐々木孝訳、法政大学出版局、
1983.

キェルケゴール、『死に至る病』、 斎藤信治訳、岩波、1987.

— 、『不安の概念』、 斎藤信治訳、岩波、1989.

シェリング、『学問論』、 勝田守一訳、岩波、1997.

— 、『人間的自由の本質』、 西谷啓治訳、岩波、1994.

角田哲康、「ミゲル・デ・ウナムーノの思想における実存主義の位置」『常葉学園大学研究紀要 外国語学部』 第13号、1996、pp.199-210.

高山守 他、『シェリングとヘーゲル』（シェリング論集1）、晃洋書房、1995.

バウムガルトナー、H. 、『シェリング哲学入門』、北村実 他訳、 早稲田大学出版部、1997.

廣松渉 他、『岩波哲学・思想辞典』、 岩波、1998.

スペイン語疑似分裂文と分裂文

伊藤亜矢

0. はじめに

旧情報、新情報の概念を用いた言語現象の分析の一つに、疑似分裂文 (oración seudo-hendida) と分裂文(oración hendida)[1]に関するものがある。まずは、次の例を見てみよう。

(1) a. María está llorando.
b. La que está llorando es María.
c. Es María la que está llorando.

これら三つの文は、認知的に同義文である。(1a)が真であるためには、(1b)と(1c)も同じく真でなければならず、また(1b)が真であるためには(1a)(1c)が、(1c)が真であるためには(1a)(1b)がそれぞれ真でなければならない。この条件を満たしている三文は、客観的に等しい情報内容を持っていると言える。しかし、客観的に等しい情報内容を持っているとは言え、各文にはそれぞれ用いられるのに相応しい文脈がある。

(1a)は強調のない、いわば無標の文である。それに対し、(1b)(1c)は、一般的に強調構文と呼ばれる有標の文である。本稿では、後者の(1b)(1c)タイプの構文について考察する。(1b)のように "A ser B" 型のAの部分が節になっているものを疑似分裂文と呼び、(1c)のように "Ser B A" 型の節Aが文尾に来ているものを分裂文と呼んでいる。一般的に、"A ser B", "Ser B A" のAの部分は、前提(presuposición)と呼ばれ、Bの部分は、焦点(foco)と呼ばれる。興味深いことに、(1b)(1c)両文には、かなりの頻度で同じ日本語訳が与えられる。(「泣いているのはマリアだ。」)[2]英語の世界では、変形文法の立場から疑似分裂文と分裂文を、どちらも同じ深層構造から派生したものと考える学者もいる。[3]しかし、一つの言語の中で全く同じ伝達内容を表すのに二種類の構文があるとは考えにくく、最近では、両者の間の違いが活発に議論され、構文論的に比較的明確に定義されるに至っている。本稿では、英語ほど明確に定義されていないスペイン語の疑

似分裂文と分裂文について、Prince(1978)[4]の英語に関する分析がスペイン語にも適用できること、そして二つの構文には談話レベルでの使い分けが存在するということを旧情報・新情報の理論を軸に検証する。

1．疑似分裂文

疑似分裂文の前提部は、基本的に、話し手が聞き手の念頭(conciencia)に自然に思い浮かぶだろうということを考慮して述べられる。聞き手の念頭に浮かぶということは、先行文脈で前提部の内容についてすでに触れられている、もしくは内容を示唆する表現・言い回しが含まれているということである。先行文脈ではっきりと示されているもの、つまり先行文脈で用いられたフレーズと同じフレーズが前提部で繰り返し使われている時や、先行文脈中の言葉と極めて関連性の高い派生語・類義語が使われている時に、前提部は「明白な情報(información explícita)」を持つ。また、目に見える形ではっきりと示されてはいないが、容易に先行文脈から頭に思い浮かべることができる時、前提部は「潜在的な情報(información implícita)」を持つ。共に、既に談話の中で述べられたことの直接的、間接的な繰り返しであり、明らかに旧情報を担っている。又、「メタ言語的な情報(información metalingüística)」として、一種の文と文の繋ぎの働きをする前提部がある。[5]これも談話を円滑に運ぶための機能であり、こういった繋ぎの言葉が談話に現れるのは、聞き手にとっても予測できうることで念頭にも浮かびやすい。メタ言語的な情報の中には、話し手の反応を示す前提部も含まれる。話し手の考え、意見、見方、反応などは常に聞き手にとって会話中の関心事であると考えられる。つまり話し手が現時点で話題に上っていることについて、自分がどう思っているかを述べる時に用いられる前提である。以下にそれぞれの前提部について例文を提示しながら詳しく分析する。

1.1．明白な情報を持つ前提部

まずは次の例を見てみよう。

(2) El Tamagotchi es considerado por sus creadores un juguete inofensivo ≪que fomenta el sentido de responsabilidad y al que se toma mucho cariño al poco tiempo de estar cuidándole≫
[varias líneas omitidas]
Tras el lanzamiento de este juego al mercado español el 24 de

mayo la oficina del Defensor del Menor de la Comunidad de Madrid se puso manos a la obra para realizar un seguimeinto de los posibles efectos del Tamagotchi en los pequeños. Según su titular, Javier Urra, los niños sanos no presentan ningún efecto negativo: [1]

-Quienes sí pueden verse afectados son los menores de 7 años [2], puesto que no distinguen entre su propio yo o aquellos niños conocidos como ≪fronterizos≫, que sin ser deficientes se encuentran en el límite y para quienes el juguete puede ser un refugio.[6]

下線部[2]が、疑似分裂文になっている。疑似分裂文の前提部は、同じ言葉の繰り返しではないものの、afectados という言葉と先行文の efecto negativo [1] という言葉が密接な関連性を持つ類義語的な関係にあるため、明らかな情報を持つ前提部となっている。先行文で既に与えられた旧情報を前提部に用いているため、当然聞き手の念頭にも浮かびやすいと考えられる。

次に前提部が明白な情報を持つさらに顕著な例を見てみよう。精神科医を訪れた女性が、診療中、医師に自分の精神状態を語る場面である。

(3) ≪Más o menos desde este verano empecé a perder el apetito. Primero pensé que era natural, debido al calor, pero poco después aparecieron las náuseas. Náuseas que terminaron por preocuparme, ya que se repetían constantemente, convirtiéndose en algo muy incómodo para mí. Fuí a la farmacia en busca de una solución y me dieron un medicamento para el estómago. Lo tomé durante un tiempo sin percibir mejora alguna. Muy pronto empecé a preocuparme...≫ [1] Reiko humedeció su labio superior con la punta de la lengua y vaciló al hablar.

≪...lo que me preocupaba realmente era un posible embarazo.≫ [2][7]

下線[2]の疑似分裂文の前提部で、先行文脈[1]で述べた preocuparme という言葉が、「繰り返し」という「類義語」よりもさらに明白な形で現れている。よって前提部の内容は、聞き手の意識に何の支障もなく上るものと考えられる。また、精神科医を訪れる人間が何らかの心配ごとを抱えているというのは、社会的に確立された常識であり、話し手が

その常識的な内容を前提部で述べるのは、聞き手にとっても念頭に浮かびやすいと判断しているからでもある。

1.2. 潜在的な情報を持つ前提部

明白な情報と潜在的な情報の間に境界線を引くのは難しい作業であるが、ここでは、先行文の言葉の繰り返しや派生語、類義語は使われていないが、先行文から比較的容易に前提部の内容を想定できる時、前提部は潜在的な情報を持つとみなす。潜在的な情報を持つ前提部は、明白な情報を持つ前提部に比べると、聞き手にとって先行文脈と関連付けるのに余分に時間がかかると考えられる。次の例を見てみよう。

(4) La función principal desempeñada por Gonzalo durante los siete meses que estuvo en Diriambo, en la provincia de Caranzo (Nicaragua), se basó en realizar labores de contabilidad y dar clases como profesor en una taller escuela,...

[varias líneas omitidas]

¿Qué visión se tiene entonces de la vida después de todas estas vivencias?:

-Pues he visto que el dolor es el mismo en España que en Nicaragua, la esencia básica de la gente es la misma [1]. Lo que cambia es la fachada [2].[8]

下線部[2]の疑似分裂文の前提部にある "cambia" に関して、先行文脈の中に同一、もしくは類義の言葉は見当たらない。しかし、ここで注目したいのは、下線部[1]にある "el mismo", "la misma" である。下線部[1]では、スペインとニカラグアにおいて「変わらないもの」について語られている。よって後続する文で(この場合[2]の疑似分裂文の前提部に当たる)、今度は「変わるもの」についての言及がなされるであろうということは、聞き手にとっても何ら想像に難くない。聞き手にとって念頭に浮かびやすいということで、この対比を表すタイプの前提部[9]も旧情報的な性格を持っていると考えられるのである。

1.3. メタ言語的な情報を持つ前提部1 — 二つの文の繋ぎとしての前提部 —

明白な情報を持つ前提部、そして潜在的な情報を持つ前提部では、共に先行文脈との意

味的な関係を重視し、すでに述べられた旧情報が繰り返されたり、反意語が用いられたりした。いわばこれらの前提部は、先行文脈から容易に復元できると言える。ここでは、意味的な言語内の関係を示す機能ではなく、メタ言語的な機能を持つ前提部について見てみよう。

(5) ≪No se preocupe, no volverá a ocurrir de nuevo. Si usted no me acompaña, puedo partir rápidamente, con sólo esta maleta; me dirigiré a la estación de Tokio y tomaré un tren. Ya he decidido lo que haré.≫ La muchacha sacó una pequeña bolsa del bolsillo de su sobretodo, de la cual extrajo, a la vez, un portamonedas. Observé con interés esta complicada maniobra, e imaginé cómo sacaba otro portamonedas minúsculo del que ya tenía entre las manos, y aún otro más. Pensé casualmente en los símbolos freudianos.
Lo que hizo fue comparar dos billetes, uno ordinario y el otro con suplemento para el tren rápido, y reserva de la plaza incluida.[10]

下線部の疑似分裂文の前提部 "Lo que hizo" がメタ言語的な言語外の機能を果たしている。このタイプの前提は、先行文と後続文のつなぎ(conexión)の役割を担うのが主たる働きなのである。特に意味的に先行文と関連しているわけではないため、 "Lo que hizo" と繋辞動詞の "fue" を省略して、 "Comparó" ではじめても、多少唐突な印象を与えることを除いては、全く問題ない。よく似た働きを持つ前提部に "lo que quiero decir (es...)" や "lo que pasa (es que...)[11]" などがある。また、省略をしても伝達機能に支障を与えないことから、このタイプの前提部も旧情報の性格を持つと言える。ここでは、例を書き言葉から抽出したが、一般的には話し言葉で多く用いられる表現である。

1.4. メタ言語的な情報を持つ前提部2 — 話し手の反応を表す前提部—

二つの文のつなぎの役割を果たす前提部と同様、話し手の反応などを表す前提部も、先行文脈との意味的関連性は持ち合わせておらず、談話を円滑に運ぶためのメタ言語的なストラテジーを持っていると言える。次の例を見てみよう。

(6) Aquella mañana cuando llegué a la consulta recibí un saludo de mi ayudande Kodama y también de la enfermera Yamauchi. A continuación me cambié de ropa y me vestí con mi habitual bata blanca, hasta que llegó la hora de la visita de Reiko Yumikawa. Llegó siete minutos tarde; llevaba un bonito abrigo de color rojo. En el hecho de haber escogido un color fuerte, que llamase la atención, ya se escondía alguna razón psicológica. Lo que me sorprendió desde aquel primer encuentro fue la belleza de Reiko, con sus 24 ó 25 años y su maquillaje discreto.[12]

話し手の考え、意見、見方、反応などは常に聞き手の関心事である。下線部の疑似分裂文の前提部 "Lo que me sorprendió..." は、話し手の反応を示している。同様の機能を持つ前提部の例として、 "lo que dudo (es...)", "lo que pienso (es...)", "lo que me dio alegría (fue...)" などをあげることができる。この手のタイプの前提部は、先行文脈から復元できず、省略すると伝達機能に支障を来すことから、純粋に旧情報を表すとは言い難いが、常に聞き手の関心事であるということから、聞き手の念頭に浮かびやすいと考えられ、どちらかと言えば旧情報の性格を持っていると言える。

2．分裂文

疑似分裂文と違い、分裂文は、その前提部が必ずしも聞き手の念頭に自然に浮かぶものでなくてもよい(念頭に浮かんではいけない、と言う意味ではない)。分裂文は、二種類に分けることができる。一つは、焦点に文強勢を持つ新情報が来て、前提部に旧情報が来るタイプである。[13]先に見た疑似分裂文も旧情報を担う前提部を持つが、分裂文の前提部の旧情報との違いは、主題化とコミュニカティブ・ダイナミズムとの関わりから後ほど検討する。分裂文のもう一つのタイプは、その前提部が一般的には広く知られて確立した内容であるが、聞き手のみが知らない、つまり聞き手にとっては新情報であると話し手が判断する時に用いられる。珍しく前提部が新情報を担うため、情報を与える機能を持つ前提部と呼ばれる。以下に分裂文の2つのタイプを例文を見ながら分析する。

2.1. 焦点が文強勢を持って新情報を担い、前提部が旧情報を担う分裂文

まずは、次の例を見てみよう。

(7) Sara, de 26 años, es licenciada de Derecho y su deseo es poder vincular la ética, la moral y el derecho, algo así como educar en valores, o lo que es lo mismo, educar en derechos humanos pero haciendo responsable a cada persona de su propio comportamiento, que es donde entra en juego la ética y la moral.
Ahora tiene la posibilidad de irse a Colombia con una beca de la Unión Europea:
-Sigo siendo una inconformista, sobre todo ante las estructuras y el funcionamiento de todo. Ves que el Primer Mundo se va comiendo al Tercer Mundo[1] y lo estamos consintiendo-denuncia.
Al contrario de lo que se pueda pensar, Sara considera que hay mucho más por hacer aquí, en el mundo capitalista, concienciando a las personas: ≪Es la actitud de quienes viven en el Primer Mundo, su manera de pensar, su estilo de vida, sus metas, lo que provoca que el Tercer Mundo esté así[2]≫, continúa.[14]

下線部[2]の分裂文の焦点 "la actitud...sus metas" は、先行文脈から復元することができない新情報を担っており、文強勢もこの焦点に置かれる。逆に、前提部の "lo que provoca...así" は、先行文脈の下線部[1]から復元できる内容になっており、旧情報を担っている。"así" は、まさに先行文の中で述べたということを表す指標である。

また、このタイプの分裂文の焦点には、次の例のように対比的な情報が来ることが多い。

(8) Ahora pude entender por qué Hanai tras la desaparición[1] de Reiko, no dio señales de vida. Efectivamente, resultaba más creíble pensar que era Hanai, y no Reiko, quien había desaparecido, después de haber sido herido en el momento en que la muchacha escuchó la música[2]. ¿Por qué no lo imaginé antes?[15]

ここで、焦点の部分が「X ではなくて Y だ」のように、対比的な新情報を表していることに留意されたい。下線部[2]の前提部 "quien...la música" は、先行文脈ですでに "desaparición"(下線部[1])について言及されているため、容易に聞き手の念頭に上る旧情報であることが分かる。

2.2. 情報を与える前提部を持つ分裂文

次の例を見てみよう。

(9) Sus movimientos y su manera de dirigirse a un lado y a otro no presentaban un solo síntoma de anormalidad. Sin embargo, cuando salí a buscarla, la saludé y la recibí, ella intentó mantener una leve sonrisa en sus labios. Fue entonces cuando un tic se asomó a sus mejillas. Yo fingí no haberme dado cuenta de la convulsión que había mostrado su rostro, sin duda alguna, síntoma de su histerismo.[16]

前提部に当たる "cuando...mejillas" に関する叙述は、先行文脈のどこにもない。また、先行文脈から復元することもできない。従って新情報を担っていると言える。しかしこのタイプの分裂文は複雑な話し手の心理状況を表している。話し手は、前提部を確立された情報として、つまり、この場合、精神科を訪れる患者の顔にチックが走るということを世間一般に確立されたことと見なし、聞き手のみがこの事実を新情報として初めて知る、という具合に発話を進めているのである。このタイプの分裂文は、聞き手に確立された情報を受け入れさせることで、次に続く会話や物語を消化してゆく舞台を聞き手の頭の中に作るという効果を生む。また、焦点には、短く、前方照応的な語(句)が来るのが一般的である。

3. 疑似分裂文・分裂文と主題化

疑似分裂文と分裂文という二つの異なった文法的な枠組みは、聞き手と前提部の関係を、話し手がどう捉えるかによって使い分けられることが分かった。疑似分裂文の前提部は、旧情報を担い、分裂文の前提部は、旧情報と新情報を担うということであった。ここでは、擬似分裂文における前提部の旧情報と、分裂文におけるそれにはどのような違いが見られるのかを主題化との関わりから分析してみたい。

野田(1993)は、スペイン語の主題について、次のように述べている。

「...スペイン語で何を主題と見なすかは難しい問題であるが、...述語より前にある定名詞を主題と考える。主題というのは、その文が何について述べるかを表すものなので、文の前に置かれることが必要であり、また指示対象が定まらないものについても、それがどうであるかを述べるというのは不自然なことなので、定名詞である必要があると考えられるからである。」[17]

擬似分裂文では、"A ser B" 型のAの部分が節になっている定名詞句であり、文頭に出て、つまり積極的に主題化を受けて主題を表している。それでは文頭に出て来ない "Ser B A" 型の分裂文の定名詞句にあたるAの部分は、主題を表しているとは言えないのだろうか。ここで野田(1994)に戻ろう。

「名詞文は、動詞文と違って、全文が新で主題を持たない無題文になる可能性はほとんどない。そのため名詞文を構成する二つの名詞の内、一つがほぼ必ず主題になるのである。」[18]

分裂文の場合もこの主張に当てはめて考えることができよう。つまり、"Ser B A" のAもBも名詞(句)であり、定名詞句であるAが主題となるのである。しかし、文頭に出ていないため、積極的に主題化されているとは言えないのである。つまり、擬似分裂文の前提部が顕題であるならば、分裂文の前提部は陰題であり、両者の違いは主題化に対する積極性にあると言える。

4. コミュニカティブ・ダイナミズムの度合い

4.1. コミュニカティブ・ダイナミズムとは

プラーグ学派は、機能的構文論(Perspectiva funcional de la oración)や、その他の重要な概念を通して、言語のもつ情報伝達機能の側面の研究、発展に寄与してきた。ここでは、彼らの提唱する「コミュニカティブ・ダイナミズム(Dinamismo comunicativo)」(以下D.Cと略記)の観点から、擬似分裂文と分裂文のそれぞれの前提部の働きの違いについて分析を試みる。

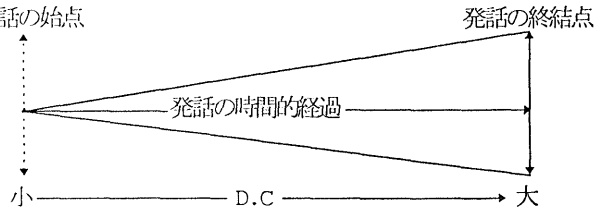
文の構成素は、それぞれ異なった度合いの情報伝達量を担ってメッセージの伝達を推進してゆくと考えられる。D.Cとは、この情報伝達量のことを指している。ファーバス(1964)は、次のように説明している。

「文の構成素の担うD.C(情報伝達量)とは、発話の中で、問題となっている構成素が、伝達を推進するに当たってどの程度その推進に寄与しているか、言い換えれば、どのくらいの力で伝達を先に押し進めていくか、という情報伝達の際に働く力の相対的な程度である。」[19]

線形的に配置された構成素の無標の語順では、より小さな情報量を持つ構成素は、文の前

方に置かれ、より大きな情報量を持つ構成素は、文の後方に置かれる。談話においては、より小さな情報量を担う構成素は、旧情報に相当し、より大きな情報量を担う構成素は、新情報に相当する。つまり、「旧から新への原則」— 旧情報は文の前方に、新情報は後方に持ってくるという談話上の原則 — にも適っているのである。

又、言語を伝達機能を果たすための手段としてとらえる時、より小さな情報量をもつ構成素は、伝達を推進する力が弱いため、伝達を進展させる言語本来の機能があまり効率的に働いていないということになる。ここで注意せねばならないのは、「効率的でない = 不必要である」、とはならないことである。なぜならば、人に何かを伝達する時、いきなり情報量の多い新しい情報で発話を始めることは、特殊な状況 — たとえば、話し手が興奮状態にあり、何の前置きもせずに、聞き手に会うやいなや新しい情報を発するなど — を除いては少ないからである。つまり、突然新しい情報を提示されても、情報内容をのみこむのに時間がかかるのである。通常は、既に導入済の旧情報から発話は始まり、徐々に新情報提示の舞台がつくり上げられる。旧情報で始まり、新情報で終わる文が、聞き手にとって理解しやすい最も一般的な発話パターンであるのはこのためである。一般的なD.Cの推移を発話の時間軸に沿って図示すると次のようになる。[20]



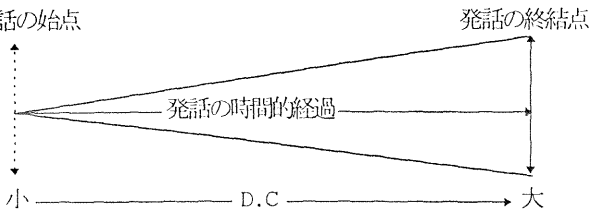
4.2. 擬似分裂文とD.C

次に擬似分裂文におけるD.Cについて分析したい。本稿の1.〜1.4.で分析したように、擬似分裂文の前提部は、全てが何らかの形で旧情報を担い、焦点は新情報を担う。以下の説明のため、(2)で取り上げた例を繰り返す。

(11) Qienes sí pueden verse afectados son los menores de 7 años.

前文脈より、前提部の "Qienes sí pueden verse afectados" は、旧情報を担い、場面に新しく導入された "los menores de 7 años" が新情報を担う。 "son" は、旧情報と新情報をつなぐ「わたり」(transición)[21]である。(10)の図中に(11)を位置づけると次のようになる。

(12)



擬似分裂文では、上の図に見られるように、D.Cの一般的な推移と構成素の持つ情報の旧新の流れが問題なく合致した無標の構図が得られる。

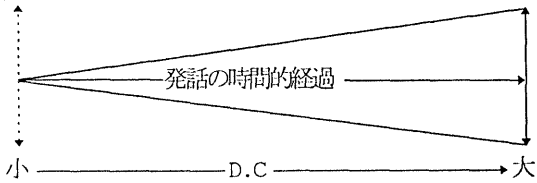
4.3. 分裂文とD.C

続いて分裂文におけるD.Cの働きを分析しよう。分裂文には、前提部が旧情報を担う場合と、新情報を担う場合があった。まずは、後者から見てゆく。次の文は(9)で提示したものである。

(13) Fue entonces cuando un tic se asomó a sus mejillas.

"entonces" は、時間的な前方照応を表す旧情報であり、 "un tic se asomó a sus mejillas" は、聞き手にとっては新情報であると話し手がみなす情報である。このタイプの分裂文では、常に繋辞動詞は文頭に現れ、 "entonces" と共に旧情報の一部と化していると考えられる。 "cuando" は、両者をつなぐ「わたり」である。先程と同様、図(10)にこの文を位置づけると次のようになる。

(14) 発話の始点　　発話の終結点



Fue entonces　　cuando　　un tic se asomó a sus mejillas

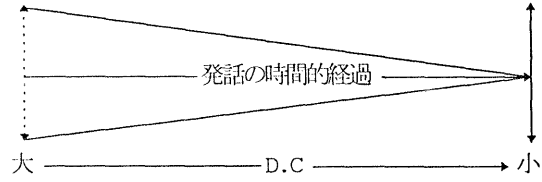
この場合も、D.C は一般的な推移を示している。

次に分裂文のもう一つのパターン、前提部が旧情報を担うケースを見てみよう。次の文は(7)からである。

(15) Es la actitud de quienes viven en el Primer Mundo, su manera de pensar, su estilo de vida, sus metas, lo que provoca que el Tercer Mundo esté así.

文脈から、焦点の "la actitud...sus metas" は新情報を担い、"lo que...así" は旧情報を担うことが分かる。興味深いことに、このタイプの分裂文だけ下図に見るように、一般的な D.C の推移とは逆の流れをもつ有標の構図を示していることが分かる。

(16) 発話の始点　　発話の終結点



Es la actitud...metas　　lo que　　provoca así

文頭の繋辞動詞 "es" は、この場合、新情報の一部と化し、"lo que" は「わたり」である。このタイプの分裂文の前提部は、しばしば省略されることからも、D.C の度合いは擬似分裂文の前提部よりも低いと言える。次の例を見てみよう。

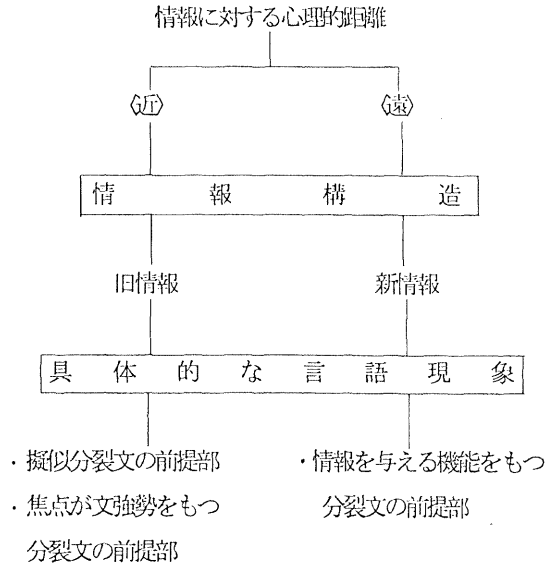
(17) A:¿Quién preparó la mesa? ¿Fue mi madre? o ¿fue mi hermana?
B:Fue tu hermana.

下線部の後に "quien preparó la mesa" という前提部が省略されているということは容易に分かる。このように省略が許されるのは、D.C の度合いがかなり低く、伝達を推進するために必要な構成素であると見なされていないからである。

結論

擬似分裂文と分裂文では、その前提部の情報に対する話し手の心理的態度が異なることを中心に見てきた。この心理的態度とは、前提部のもつ情報と話し手(あるいは聞き手)との間にある心理的距離 — 〈近〉又は〈遠〉の二つの目盛りで測られる— を意味する[22]。旧情報は既に先行文脈で導入済か、あるいは復元可能な情報であり、心理的に話し手、聞き手により近いと考えられる。逆に、新情報は、心理的に話し手、聞き手から遠い情報と考えられる。このような、情報に対する心理的距離が具体的な言語現象となって実現されたものの一つが、擬似分裂文と分裂文の前提部なのである。この関係を図式化すると(17)のようになる。

(18)



註

[1] "oración enfática" "oración de tensión" とも呼ばれる。"enfática" は焦点(foco)や強調(acentuación)の問題を論ずる際に用いられるため紛らわしくなってしまうことや、分裂文の "oración hendida" との整合性を考慮すると、疑似分裂文には "oración seudo-hendida" を用いるのが適当であると思われる。

[2] 野田尚史 (1994),「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105, pp.32-53. 野田は、分裂文と疑似分裂文には助詞の「が」と「は」による使い分けがあると指摘している。しかし筆者の集めた例を見る限りでは、この使い分けが必ずしも明確に定着しているわけではなく、多くの場合、分裂文、疑似分裂文ともに「は」が用いられていることの方が多いと分かった。

[3] Adrian Akmajian (1970), "On Deriving Cleft Sentences from Pseudo-cleft Sentences", *Linguistic Inquiry 1*, pp.149-168 を参照。

[4] Ellen F. Prince (1978), "A comparison of Wh-clefts and It-clefts in Discourse", *Language 54*, pp.883-906.

[5] *Ibid.*, pp.886-894.

[6] *Cambio 16*, 1997, No.1334, pp.71. 下線部は筆者。

[7] Yukio Mishima, Traducción de Isisu, S.(1996), *Música*, pp.13-14. 下線部は筆者。

[8] *Cambio 16*, 1997, No.1334, pp.62-63. 下線部は筆者。

[9] Prince は対比を表す前提部を潜在的な情報を持つ前提部の中では扱わず、独立させて分析を行っている。しかし、先に見た潜在的な情報を持つ前提部の性質からすると、対比を表す前提部をその一例として扱っても何ら問題はないと思われる。

[10] Mishima, *Op.cit.*, p.92. 下線部は筆者。

[11] Prince は "What happens ～" を繋ぎの働きを持つ前提部とは見なしていない。しかし、スペイン語の "lo que pasa (es que)" は、会話の途中に挟まれる決まり文句的な繋ぎの表現として頻繁に用いられるため、二つの文の繋ぎとしての前提部に分類した。

[12] Mishima, *Op.cit.*, p.12. 下線部は筆者。

[13] Prince, *Op.cit.*, pp.894-903.

[14] *Cambio 16*, 1997, No.1334, p.63. 下線部は筆者。

[15] Mishima, *Op.cit.*, p.150. 下線部は筆者。

[16] *Ibid.*, pp.12-13. 下線部は筆者。

[17] 野田 ,前掲書, p.41.

[18] 同上書 , p.40.

[19] Jan Firbas(1992), *Functional Sentence Perspective in Written and Spoken Communication*, pp.7-8.

[20] 荒木一雄・安井 稔 (1992),『現代英文法辞典』,p.271.

[21] 福地 肇 (1985),『談話の構造』, p.61.

[22] <近> <遠> という心理的距離と情報構造の関係は、神尾昭雄(1990),『情報のなわ張り理論』に詳しい。

参考文献

Abraham, W. (1981): *Diccionario de terminología lingüística actual*. Madrid, Gredos.

Bolinger, D.L. (1954): "English prosodic stress and Spanish sentence order", *Hispania, 37*, pp.152-156.

Borkin, A. (1984): *Problems in Form and Function*. Norwood, N.J., Ablex.

Brown, G. y Yule, G. (1993): *Análisis del discurso*. Madrid, Visor Libros.

Bustos Gisbert, J.M. (1996): *La construcción de textos en español*. Salamanca, Universidad de Salamanca.

Chafe, W. (1970): *Meaning and the structure of language*. Chicago, The University of Chicago Press.

Contreras, H. (1978): *El orden de palabras en español*. Madrid, Cátedra.

Firbas, J. (1992): *Functional sentence perspective in written and spoken communication*. Cambridge, Cambridge University Press.

Gili Gaya, S. (1994): *Curso superior de sintaxis española*. 15-a ed., Barcelona, Biblograf.

Halliday, M.A.K. (1967/1968): "Notes on transitivity and theme in English", *Journal of Linguistics*, 3/4, pp.37-81; pp.199-244; pp.179-215.

Hernanz, M.L. y Brucart, J.M. (1987): *La sintaxis*. Barcelona, Crítica.

Moliner, M. (1994): *Diccionario de uso del español*. 19-a ed., Madrid, Gredos.
Prince, E.F. (1978): "A comparison of Wh-clefts and it-clefts in discourse", *Language*, 54, pp.883-906.
Real Academia Española (1976): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Madrid, Espasa-Calpe.
Van Dijk, T.A. (1992): *La ciencia del texto*. 2-a ed., Barcelona, Paidós.
---------- (1995): *Texto y contexto*. 5-a ed., Madrid, Cátedra.
Yamashita, Y. (1983): " "Tema" en la oración española y su orden desde el punto de vista informativo", *Lingüística Hispánica*, 6, pp.123-143.
荒木一雄・安井 稔 (1992):『現代英文法辞典』, 東京, 三省堂.
井上和子 (1979):「旧い情報・新しい情報」『言語』18, 10, pp.22-34.
神尾昭雄 (1990):『情報のなわ張り理論』, 東京, 大修館.
久野 すすむ (1978):『談話の文法』, 東京, 大修館
柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1982):『言語の構造』, 東京, くろしお出版.
柴岩佐枝 (1982):「動詞との関係における主語の位置 — 現代スペイン語の語順を巡って —」『宮城昇教授還暦記念論文集』, 東京, スペイン語学研究会.
野田尚史 (1994):「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105, pp.32-53.
M.A.K. ハリデー・R. ハッサン著, 筧 壽雄訳 (1991):『機能文法のすすめ』, 東京, 大修館.
坂東省次 (1997):『スペイン・中南米関係文献目録』, 広島, 渓水社.
福地 肇 (1985): 『談話の構造』, 東京, 大修館.

引用文出典

Mishima, Y., Traducción de Isisu, S. (1996): *Música*. Barcelona, Seix Barral.
Cambio 16, 23 junio 1997, No.1334

CANTARES DE ISE, VISTOS DESDE LA LITERATURA HISPANICA

Maria KINOSHITA

INTRODUCCIÓN:

La motivación a elegir el tema de los *Cantares de Ise* y *Don Juan* fue una frase de José Gaos. La frase presenta el encuentro de tres sabios: José Ortega y Gasset (1883-1955), Xavier Zubiri (1898-1983) y José Gaos (1900-1969). Éste narra su impresionante encuentro con Zubiri:

"Vi y oí a Zubiri por primera vez el mismo día que oí por primera vez a Ortega sin verlo ni haberlo visto nunca antes. No hacía mucho que yo andaba por la Facultad de Madrid. Aún no había tenido ocasión de conocer a Ortega, catedrático de Metafísica, asignatura de doctorado. (...) De pronto, corrió por la Facultad el anuncio de una conferencia de Ortega sobre *Don Juan* en la Residencia de Estudiantes. Los compañeros nos propusimos ir todos juntos. Llegó la tarde de la conferencia y efectivamente nos reunimos muy a primera hora en la Facultad un grupo de compañeros."[1]

Al leer este pasaje nos surgieron estas dos preguntas: cómo explicó aquel gran maestro de filosofía la figura de don Juan y cuál será la obra que por su índole podría compararse con la de Zorrilla dentro de nuestra literatura japonesa. Con este interrogante empezamos a analizar los *Cantares de Ise* y *Don Juan*. Ortega se queja de mala prensa de don Juan, mientras acentúa la originalidad de la obra española:

"La figura de Don Juan es uno de los máximos dones que ha hecho al mundo nuestra raza. No obstante, en los últimos tiempos los españoles la han desatendido y dejan que se anquilose en las guardarropías de los teatros populares. (...) Así, la leyenda de Don Juan empieza por ser un ejemplo devoto en que se narra de un hombre frívolo, concupiscente e impío, que en hora tardía, sobrecogido por el castigo de una visión, se convierte y sucumbe. Al cerebro medieval que la imagina y al que la escucha, les importa solo el castigo y la conversión, que eran la faena divina. (...) Es preciso, pues, repensar hasta su raíz profunda ese heroísmo negativo de Don Juan. (...) Es

más, puede decirse que él representa uno de los pocos temas cardinales del arte universal que la Edad Moderna ha logrado inventar y añadir al sagrado tesoro de la herencia grecolatina. Es, pues, don Juan un símbolo esencial e insustituible de ciertas angustias radicales que al hombre acongojan, una categoría inmarcesible de la estética y un mito del alma humana. Junto a Hércules y Elena, junto a Hamlet y Fausto, en el espléndido zodíaco de nuestros afanes, ocupa Don Juan un cuadrante e irradia perennemente en la noche del alma su patético reflejo estelar, una palpitación conmovedora de gentileza y desesperación."[2]

1. PRESENTACIÓN DE LOS DOS GRANDES MITOS

A. *Cantares de Ise*

Parece ser, en lo tocante a la época en que los *Cantares de Ise* fueron escritos, que éstos aparecieron entre los años 905 y 951. Esta obra es anónima a pesar de que hay algunos candidatos que pueden haberla escrito: Un pariente de Narijira que puso en orden el diario de éste o el propio Narijira o Tsuraiuki de Ki. Actualmente se sostiene más la primera teoría: Un pariente de Narijira dio a conocer confidencialmente entre los nobles el auténtico y primitivo diario de Narijira.

La obra trata de los amoríos del coronel Narijira de Ariuara cantados en 125 episodios. Aunque el héroe sólo amó de verdad a Takako, con quien se encuentra en la primera parte de la obra. En los *Cantares de Ise*, las mujeres que aparecen son diversas: desde una emperatriz a una sirvienta; de una niña a una anciana; de una mujer de la capital a una aldeana de Michinoku. El autor trata de transmitir la belleza del refinamiento del amor y del alma que se dedica a amar con fervor. Naturalmente en la obra también aparecen otros temas como la melancolía del viaje, la amistad, etc.

Los *Cantares de Ise* empiezan con el encuentro del protagonista Narijira y Takako. Este encuentro sucede cuando Narijira cumple 33 años y Takako 16. Los episodios de la obra giran alrededor de Narijira, Takako y el príncipe Koretaka. La primera parte de la obra cuenta los amores de Narijira y Takako. La segunda cuenta una serie de amoríos que hace resaltar el intenso amor de la primera parte. La tercera nos habla

fundamentalmente de la amistad. La cuarta, que es el núcleo de la obra, describe el reencuentro de Narijira y Takako después de ocho años. Takako se ha convertido en la emperatriz. La quinta parte trata del exilio de Narijira a causa de su amor prohibido hacia Takako. El emperador se entera del idilio y por esta razón obliga a exiliarse a Narijira. La sexta parte también trata del amor. Esta parte está dividida en tres ciclos: el primero describe varios episodios de amistad, especialmente entre Narijira y el príncipe Koretaka; el segundo muestra el amor de Narijira y Takako; y el tercero mezcla el amor con la amistad. La séptima parte, que será la más bella de esta obra, traza el curso de la vida y la muerte cercana ya de Narijira. El protagonista se arrepiente de los pecados cometidos a lo largo de su vida.

El protagonista de la leyenda de los *Cantares de Ise* es un personaje real. Narijira, nuestro protagonista, fue el quinto hijo del príncipe Abo, heredero del reinado del emperador Jéizei. A pesar de ser noble de nacimiento, tuvo que resignarse al puesto de coronel por causa del poder de la familia Fuyiuara. Establecido el régimen de los Fuyiuara, las otras familias distinguidas tuvieron el destino de decaer. Tales descendientes que sufrieron destino tan penoso tenían en el fondo de corazón sentimientos de antagonismo. Para la permanencia del régimen de los Fuyiuara, nuevos sistemas políticos y culturales fueron establecidos. Pero para los Fuyiuara, la conducta de Narijira, la lubricidad de éste, era una heterodoxia. Se supone que hubo un buen número de este tipo de heterodoxos. Los descendientes de familias nobles que no pudieron conseguir puestos importantes en el nuevo régimen, no tuvieron otra alternativa que seguir el mismo camino de Narijira.

No han quedado fragmentos del diario del protagonista, pero se sabe que Narijira comenzó un viaje al Santuario de Ise que está relatado en el episodio 69 de la obra. Este episodio aclara que Narijira pretendía desviar la atención de Takako a la Virgen de Ise, Iásuko. Según este episodio, una vez vivía un hombre (Narijira) que era Montero de Su Majestad. Fue enviado a una cacería a la provincia de Ise. La madre de la princesa que servía en el Santuario de Ise como Virgen Sacerdotisa, le dijo a su hija: "Tienes que recibir a este hombre mejor que cualquier otro." Cumpliendo

el deseo de su madre, por la mañana, la hija ayudó personalmente a los preparativos de la caza, y por la tarde dio alojamiento al Montero Imperial en su propio palacio.

En la noche del segundo día, el Montero Imperial le dijo: "Quiero verte como sea." La joven también quería hablar con el hombre pero como había gente que miraba, desistió en quedarse a solas. Como el hombre era jefe de los enviados, su aposento no estaba lejos del de ella. Cuando se aseguró de que todos estaban acostados, la joven fue al aposento del Montero pasada la medianoche. El que estaba pensando en ella sin conseguir dormirse, se dio cuenta con la pálida luz de la luna que ella estaba cerca de su aposento, acompañada de una doncella niña. Lleno de gozo, la invitó a donde él estaba acostado. Ella aceptó y estuvieron hablando hasta las tres de la madrugada. A esta hora, ella volvió a su propio aposento sin haber declarado sus sentimientos. El hombre, entristecido, no pudo dormir el resto de la noche.

A la mañana seguía pensando en la joven, pero como había ojos indiscretos, no le envió mensaje y decidió esperar. De repente, le llegó un poema de ella cantando:

¿Viniste tú a mí?
¿O fui yo a tu vera?
Yo no lo sé.
¿Sueño? ¿Realidad?
¿Dormida? ¿Despierta?[3]

El hombre lloró y compuso:

Con la sombra en el alma
Y llanto en los ojos,
¿podré saberlo?
Dímelo esta noche,
si fue sueño o no.[4]

Enviando este poema a la joven, salió de cacería, pero andando los campos, su corazón estaba ausente. Y se prometía a sí mismo verla esa noche.

Pero esa misma noche vino el Gobernador de la provincia y sabiendo la visita de los Monteros de Su Majestad, les quiso obsequiar una fiesta de despedida, y estuvieron bebiendo toda la noche. Con esta fiesta, le resultó imposible visitarla.

A la siguiente mañana, como el hombre tenía que partir a la provincia de Ouari, tuvo que desistir de conseguirla. A la mañana, le llegó a su aposento un regalo de despedida de la Virgen Sacerdotisa. Era una copa con su pedestal, en el cual estaba escrito:

Lo nuestro fue un vado
que un hombre cruzó
¡ay! sin mojarse ...[5]

Como faltaban los dos últimos versos, el hombre escribió en el pedestal:

Cruzaré otra vez
Paso Montamor.[6]

Y se dirigió a la provincia de Ouari. Durante el reinado del emperador Séiua, la Sacerdotisa de Ise fue la hija del emperador Montoku y la hermana menor del príncipe Koretaka. Este poema parece tratar con fuerza desmentir el amorío de Takako y Narijira.

B. *Don Juan*

Se considera a Tirso de Molina (1582-1648) el primer autor que trata el tema. Una de las más grandes creaciones literarias españolas, que nace nada menos de la pluma de un fraile mercedario Gabriel Tellez, conocido como Tirso de Molina. Su personaje inmortal vio la luz en su drama *El Burlador de Sevilla*. Con esta obra se creó el mito de don Juan, creación de alcance universal y del cual se han desprendido innumerables creaciones literarias. Pero la obra que ha obtenido más popularidad en España ha sido el *Don Juan Tenorio* de José Zorrilla (1817-1893).

La obra de Zorrilla describe a don Juan como seductor de mujeres y burlador de los muertos y los vivos. Recibe el castigo divino por medio del convidado de piedra, que es el comendador al que don Juan había matado. En el acto tercero de la obra la escena se traslada al panteón de la familia Tenorio. Las estatuas de doña Inés y don Gonzalo están ausentes. Don Juan se da cuenta de esto y empieza a dudar si está en un sueño o en la realidad. Don Juan prueba a llamar al comendador y el sepulcro de éste se transforma en una mesa parecida a la de la noche anterior, en la que don

Juan estaba cenando con sus amigos. Pero en vez de manteles, comidas y flores, hay culebras, huesos y fuego. Aparecen el comendador, algunas sombras y espíritus. La estatua le dice que la advertencia que la sombra de Doña Inés y el comendador habían hecho no sirvió de nada y que por eso va a cumplirse la sentencia. La estatua le anuncia que el capitán mató a Don Juan, y que el entierro que está pasando delante de ellos es el suyo. Don Juan se arrepiente por primera vez en su vida. El comendador le da la mano en señal de despedida. Don Juan acepta dar la suya sin saber que es una trampa. Al agarrar la mano de don Juan, el comendador trata de llevarlo al infierno, pero don Juan se arrepiente, tiende la mano libre al cielo y pide misericordia a Dios. Doña Inés aparece y salva el alma de don Juan purificándola con su amor (el subrayado es nuestro). Las sombras y espíritus desaparecen y los ángeles rodean a doña Inés y a don Juan derramando flores que forman un lecho. Don Juan agradece a Dios su misericordia y muere con doña Inés en el lecho de flores. Las almas de los dos son llevadas al paraíso. Así termina el *Don Juan Tenorio* de José Zorrilla. En la obra de éste, don Juan se salva del infierno gracias a su amor por Inés.

II. EL ATRACTIVO DE LOS PROTAGONISTAS: NARIJIRA Y DON JUAN

Ambos se parecen en su fisonomía y su talento literario. Los dos son amorales y no muy hábiles en política a pesar de sus cargos importantes.

A. La elegancia de Narijira

La estructura de los *Cantares de Ise* corresponde a la de una novela: cada episodio explica la relación de los personajes. Después de esta explicación, el protagonista Narijira les canta un poema adecuado a la relación y a la escena. Narijira enseña cómo representar los sentimientos amorosos. Los *Cantares de Ise* muestran ejemplos a los lectores de cómo contestar a la carta de su amado o amada. El episodio 107 es famoso por la magnificencia de enamorar a una persona con un solo poema. En la historia se trata de una doncella que estaba a servicio de Narijira. Ésta fue cortejada por un hombre cuyo nombre era Toshiiuki de Fuyiuara. El oficio de este hombre era secretario del emperador. La doncella que todavía era muy joven, no sabía escribir

cartas ni componer poemas. Tampoco podía hablar correctamente. El señor de esta doncella que era Narijira compuso en su lugar un poema. Al terminar la carta, mandó a la doncella copiarla de mano y la envió al pretendiente de ésta. Toshiiuki de Fuyiuara se quedó asombrado de la belleza de la carta y se apresuró a contestarla:

Empapa mis mangas
un río a torrentes,
embebecido
llover al yo ver
que no puedo verte.[7]

Narijira respondió con el siguiente poema:

Liviano es el río
que sólo empapa
las dos mangas.
Si te arrebatase,
de ti me fiara.[8]

Admirado de este poema, Toshiiuki la guardó con el máximo cuidado y siguieron cambiándose cartas. Una vez él le escribió: "Según está el cielo, parece que va a llover. ¡A ver si tengo suerte y no llueve! Si no, me será imposible ir a verte." El señor de la doncella le respondió otra vez:

¿Me quieres? ¿No me quieres?
-otra y otra vez,
-pregunta dura.
Cae un aguacero
que lo sabrá bien.[9]

Al leer este poema, Toshiiuki salió enseguida a visitarla poniéndose nada para protegerse de la lluvia y llegó empapado a la casa de la doncella. La doncella y Toshiiuki tuvieron un final feliz gracias al señor de la doncella.

La profunda angustia que Narijira experimentó, por el deshonor a causa de los Fuyiuara, le da profundidad a los poemas de Narijira. Sus poemas relatan la vida llena de amor, odio, pena y los sentimientos que Narijira sintió a lo largo de su vida.

Esta obra nos atrae y causa emoción en nuestros corazones. Aunque nosotros tenemos sentimientos parecidos a Narijira, pocas personas tienen la capacidad de convertirlos en poemas tan maravillosos.

B. El coraje de don Juan

El atractivo de don Juan, que viene de sus rasgos de héroe romántico, es subrayado por otros personajes que hacen destacar sus virtudes. Don Luis Mejía subraya la acción de don Juan, mientras don Gonzalo de Ulloa representa el honor inflexible y clásico. Brígida hace el papel de la celestina usual. La criada de doña Ana, Lucía, es la persona interesada que traiciona a su ama por el brillo del dinero. La bella protagonista, que se puede llamar ángel del amor o Virgen María, es doña Inés. Ella marca el punto culminante de la obra uniendo el amor del hombre y la mujer al amor misericordioso de Dios. La primera parte de la obra cuenta la historia de un libertino, llena de acción y violencia en tiempo muy concentrado. Toda la primera parte ocurre en una sola noche. La segunda parte transcurre muy lentamente. Han pasado cinco años desde la primera parte. Don Juan viaja entre el delirio y la realidad, con la duda respecto a su salvación. En los actos finales de la obra fuerzas opuestas luchan en el alma de don Juan. La virtud y el pecado, por una parte, y la condenación al infierno o la salvación del cielo, por otra, luchan hasta el último instante. El arrepentimiento y el amor ganan, y las dos almas ascienden al cielo.

Una de las mayores virtudes del *Don Juan* de Zorrilla consiste en el coraje de éste. Este don Juan no sólo tiene el coraje de morir y luchar en cualquier situación, sino que también tiene el coraje de arrodillarse a los pies del Comendador y confesar el amor sincero a su hija, doña Inés. Se brinda a ser el esclavo de don Gonzalo y después del matrimonio promete vivir en la casa de éste sometido a las leyes y a la voluntad del Comendador. Don Juan, que tanto estima su propia libertad, acepta a ser el esclavo de don Gonzalo. Éste rechaza el ofrecimiento de don Juan a causa del odio que éste le inspira. El Comendador, que es el símbolo de la rectitud y la justicia, es enviado al infierno por su pecado de orgullo, egoísmo y odio espiritual. Ortega explica que la figura de Don Juan nos atrae por el coraje de entregar la vida

a cambio de algo. La parte trágica de la obra estriba en que la sombra de la muerte siempre acompaña a don Juan. Zorrilla le da un aire romántico y, a pesar del carácter burlador de su héroe, le describe como una persona infeliz que nunca ha conocido el amor verdadero.

El encanto de don Juan emana también del de Sevilla. Si don Juan hubiese nacido en otro lugar, el héroe hubiera perdido su encanto. Esa ciudad acoge a don Juan y le acompaña en su trato con las mujeres. El agradable ambiente de los monumentos y las calles le ayudan a seducir y embriagar el alma de sus víctimas. La ciudad de Sevilla es el condimento de la obra, lo cual hace aún más atractivo el personaje de don Juan.

III. LA REACCIÓN DEL ALMA ANTE EL AMOR

Los dos pecadores y protagonistas de ambas obras se salvaron moralmente en el fin de sus vidas. La llave de esta salvación fue el arrepentimiento de ambos personajes.

A. El remordimiento de Narijira

Los últimos años de Narijira fueron años de remordimiento y arrepentimiento de los pecados cometidos a lo largo de su vida. El episodio 124 describe perfectamente el movimiento del corazón de Narijira. Una vez le pasaba algo grande en el fondo de su corazón porque exclamó:

Lo que tengo dentro,
¡que no salga fuera!,
¡que allí se quede!
No encuentro en el mundo
nadie que me entienda. [10]

La angustia de haber comprometido el honor de su amada, Takako, le hizo componer un poema mostrando al final el profundo arrepentimiento.

En el episodio 125 que anuncia la muerte de Narijira, el protagonista acepta la muerte con toda tranquilidad, pero con un poco de remordimiento de haber herido los

sentimientos de sus amantes. Nuestro protagonista cayó enfermo y se dio cuenta de que su muerte era cercana y compuso su último poema:

Sabía que existe
al fin un camino
inexorable.
Él ya lo tenía
Desapercibido. [11]

La vida de Narijira y sus poemas han servido no sólo como lecciones de cartas de amor sino también de las lecciones populares.

La salvación de Narijira de sus pecados está basada en el arrepentimiento de haber cambiado el destino de su amada, aunque al principio lo había planeado para vengar el deshonor de su familia. La ternura de Narijira hacia las personas que le rodean, incluyendo su madre y su amigo de la vida, el príncipe Koretaka, le ayuda también a salvar su alma.

B. La piedad de Jesucristo

Los pecados de don Juan que son motivados por la estima personal y por su deshonor, se reducen a bravuconadas. Sus dudas religiosas son sólo dudas. No es obstinación contra la fe. Don Juan no está seguro si hay un Dios que pueda mirar sus lágrimas, pecados o dudas. Con la desaparición misteriosa de la estatua y la presencia de la sombra de doña Inés, don Juan entra en un estado conflictivo de duda. Duda si es la realidad o un sueño, si es una visión sobrenatural o un delirio suyo. Cuando la estatua del Comendador le prueba la existencia de un Dios y una vida después de la muerte, nuestro héroe se torna blasfemo. La visión de un pasado de pecados le sumerge en un estado desesperanzador. Ese estado está basado en el concepto humano de justicia, y le parece imposible borrar en un momento sus treinta años de crímenes y delitos.

El milagro le ilumina antes de caer el último grano del reloj de su vida. Y es doña Inés quien toma la mano que don Juan tiende al cielo demonstrando así su fe. La justificación de un pecador sólo se da tras la penitencia o arrepentimiento personal. La virtud de la penitencia es sentir el dolor de haber ofendido a Dios

incluyendo la detestación del pecado y proponerse a no volver a pecar. Y esta virtud tiene que realizarse por caridad, o en otras palabras, por amor de Dios. En esta obra, la salvación por la virtud de penitencia es perfecta. Don Juan se duele y detesta sus pecados e invoca al Dios de la clemencia. La intervención de doña Inés es un acto concreto de los santos. La sombra de ésta, movida por el amor, ofrece su alma a Dios para salvar el alma de don Juan. Frente a Dios, despojado de todo egoísmo, su amor sincero a doña Inés hace que vuelva a sí mismo y reconozca, junto a su maldad, la infinita piedad de Dios. No es sólo la salvación del alma por el amor sino el encuentro consigo mismo.

La salvación a través de su amada, doña Inés, deja satisfechos los sentimientos del pueblo español. Y la salvación por la creencia en unos principios religiosos también satisfacen al pueblo porque ellos querían ser fieles y creer en ese tipo de salvación. Dios creó al ser humano, y puso como lo más importante las relaciones del sexo para dejar a salvo la sucesión humana. Don Juan nos pone en la pista de los instintos con la naturaleza del hombre, e interpreta unos impulsos que no son nuevos sino de todos los tiempos. El don Juan de Zorrilla que creía en su "valor, inteligencia, poligamia, amoralidad y su orgullo", se arrepintió de todo ello al encontrarse con la figura pura y bella de Inés, y con ésta encontró la salvación del alma.

A MODO DE CONCLUSIÓN

Al principio de este trabajo presenté en primer lugar los *Cantares de Ise* y luego el *Don Juan* de Zorilla e intenté sacar algunas comparaciones tanto literarias como morales:

1. Estas dos obras tienen los puntos de convergencia entre dos de los más relevantes arquetipos de las literaturas japonesa y española.

2. Estas obras hablan de la vida de dos caballeros que disfrutan cortejando a las mujeres y que reciben un castigo. Pero si con Ortega se fija en el carácter de "héroe" de ambos, las obras cobran un nuevo brillo. Ortega afirma que el héroe es una persona que da su vida por algo. Y realmente los dos héroes en este estudio

tratados ofrecieron sus vidas por el amor. Don Juan dio su vida por el amor puro de doña Inés. Y Narijira dio su vida política por el amor a su familia y para defender el honor de ésta, arriesgando el de Takako.

3. Es notable la diferencia del concepto de la culpa que hay en ambos personajes: uno de raíz judeocristiana en el caso de don Juan y el otro de raíz áulica y consuetudinaria en el caso de Narihira. En los *Cantares de Ise* se afirma la importancia del arrepentimiento aunque no lo representa en forma religiosa sino como el arrepentimiento del protagonista. En cambio, la historia de *Don Juan* explica el gran poder de Dios, junto a la lección de que nunca es tarde para arrepentirse. Allí la muerte no es el fin de la vida sino el comienzo de una vida espiritual.

En suma, a través de este análisis creemos haber podido comprobar que las dos obras contienen elementos morales y sociales y que no son literatura puramente sensualista.

---

[1] Abellán, José Luis y Malló, Tomás, *La escuela de Madrid*, p. 110.
[2] Ortega y Gasset, José, *Obras Completas*, vol. VI, pp. 121-126.
[3] *Cantares de Ise*, edición de Antonio Cabezas, pp. 99-100.
[4] *Ibid.*, p. 100.
[5] *Ibid.*, p. 100.
[6] *Ibid.*, p. 101.
[7] *Ibid.*, p. 129.
[8] *Ibid.*, p. 129.
[9] *Ibid.*, p. 130.
[10] *Ibid.*, p. 139.
[11] *Ibid.*, p. 140.

BIBLIOGRAFIA BREVE

Maeztu, Ramiro de: *Don Quijote, Don Juan y la Celestina*, Madrid, Espasa-Calpe, 1926.
Menéndez Pidal, Ramón: *Sobre los orígenes del convidado de piedra*, Madrid, 1920.
Ortega y Gasset, José: *Obras Completas*, vol. VI, Madrid, Alianza, 1983.
Rousset, Albert: *El mito de Don Juan*, México, Fondo de Cultura Económica, 1985.
Zorrilla, José: *Don Juan Tenorio*, edición de Aniano Peña, Madrid, Ed. Cátedra, 1994.
Anónimo: *Cantares de Ise*, traducción, presentación y epílogo de Antonio Cabezas, Madrid, Hiperión, 1979.

バルデロマールと追憶のピスコ生活情景

高 林 則 明

1. はじめに

Mi infancia que fue dulce, serena, triste y sola
se deslizó en la paz de una aldea lejana,
entre el manso rumor con que muere una ola
y el tañer doloroso de una vieja campana.

Dábame el mar la nota de su melancolía,
el cielo la serena quietud de su belleza,
los besos de mi madre una dulce alegría
y la muerte del sol una vaga tristeza.

En la mañana azul, al despertar, sentía
el canto de las olas como una melodía
y luego el soplo denso, perfumado del mar,

y lo que él me dijera aún en mi alma persiste;
mi padre era callado y mi madre era triste
y la alegría nadie me la supo enseñar... [1)]

甘く澄んで切なくも独りぼっちの私の幼年時代は、
死にゆく波のもの静かなさわめきと
古びた鐘の痛ましげな音色にゆれる、
あの遙かな村の穏やかな時間とともに流れていった。

憂いに満ちた海の調べと

美しき空の凛とした静寂につつまれた私は、
母の口づけに甘美なる喜びを
沈みゆく日輪にそこはかとない悲しみを覚えた。

青霧に染まる朝、私は目覚め、そして感じた、
旋律を奏でるがごとき波の唄と、
そのあとから風となってそよぐ潮の香りを。

心には彼の言葉がまだ消えずに残っている。
寡黙な父と、鬱ぎがちな母だったから
誰も知らなかったのだ、私に喜びを教える術は･･･と。

1888年 4月16日にリマの南300キロにある熱い砂礫の町イカに生まれたペドロ・アブラアム・バルデロマール (Pedro Abraham Valdelomar)は、五年後の93年にイカの西およそ70キロの港町ピスコの郊外サン・アンドレス・デ・ロス・ペスカドーレスの地に移る。青い海原と爽やかな潮風、打ち寄せる白い波しぶきに洗われる浜辺とそこに生きる人々の姿は、バルデロマールにとって叙情にみちた忘れがたい詩的世界を形づくる。九歳まで生活したこのピスコ近郊の海岸にたいする憧憬と素朴な生活への共感、つましく生きる人々に寄せるあたたかい眼差しが、バルデロマールの代表作ともいえる後年の余韻の残る短編にあふれている。

私は兄弟の六番目として戦争〔＝太平洋戦争1879-83〕が終わって数年後に生まれました。父は仕事がなく、職を探してあちこちの町をまわっていて不在でした。その当時、私は六歳、長兄が十八歳だったろうと思いますが、屋根と壁だけのちっぽけな家で唯一珍しいもの、ただ一つの家具、たった一つの調度品といえば中庭に葉を茂らせたトケイソウで、明け方になるとそこに沢山の雀が集まってきては囀るのでした。幼年時代のそうした日々を思い出す度にいまでも私は驚きと懐かしさで一杯になるのです。[2)]

私は田舎の出ですからいつでも間近に自然というものを眺めながら、幼年時代を海辺で送りました。本ではなく、朝な夕なに染めあがるあの素晴らしい景色のなかで育

ったのです。宗教についての先生は母でしたが、やがて大空が母にとって代わりました。私に美というものを教えてくれたのはそうした景色と海なのです･･･ [3]

（〔 〕内は引用者の補注）

ペルーの現実と社会とを実感する旅でもあった北部各地での精力的な講演の後、議会出席のため訪れた中部山岳地方の都市アヤクーチョのホテルで講演後に階段で転倒したことから不慮の死（1919年11月3日）をとげたバルデロマールは、詩や演劇をはじめとする様々な文学ジャンルや新聞･雑誌の編集、さらには外交官や議員としての活動など、31年の短い生涯を華々しく駆け抜けた。彼は＜死＞や＜倦怠＞＜官能の鬱屈＞などの＜世紀末的デカダン＞詩想を謳うオスカー・ワイルドやダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio）風のモデルニスモ詩人・作家として出発しながらも、やがて装飾性を排した素朴で清澄な叙情味あふれる表現をとおしてアメリカ的・ペルー的な主題を積極的に開拓したことで知られている。また、４号という短命で終わったとはいえ、若手作家たちを集めて1916年に雑誌『コロニダ』を創刊し、アカデミズムの支配する硬直した当時の文壇に偶像破壊的な異議申し立てをしたことでも有名である。[4] 一般に＜ポスト・モデルニスモ＞詩人、ないし＜クリオジスモ＞作家とも見なされるバルデロマールは同時に、現代へとつづくペルー短編小説の起点に位置づけられている。

2. バルデロマールと短編作品

バルデロマールが手を染めた多岐にわたる文学ジャンルの中で一応まとまった形で作品が残るものとしては小説と短編と詩である。＜詩＞の多くは新聞や雑誌に掲載され、唯一生前に刊行されたものとしては若手詩人７名による詩集『さまざまな声 Las voces múltiples, 1916』に載ったものを数えるにすぎない。新聞連載の形で発表し＜小説＞として分類されるものには「死せる町 La Ciudad Muerta, 1910」や「労咳者の町 La Ciudad de los Tísicos, 1911」などがあるが、いずれも中編にも満たない分量で、タイトルからも察せられる＜世紀末的＞な倦怠や幻想的な叙述、陰鬱な官能性が色濃く漂う作品である。単行本として生前に刊行されたものは、夭逝したこともあって、伝記『元帥夫人 La Mariscala, 1914』や短編集『カルメロの騎士 El caballero Carmelo, 1918』、美学エッセイ『悲劇のベルモンテ Belmonte, el Trágico, 1918』などを数えるにとどまり、没後出版の

ペルー的な主題の『太陽の息子たち Los hijos del sol, 1921』は、<インカ族の物語 Cuentos Incaicos>の副題にみられるように、アンデス・インディオの過去の栄華や伝承に題材を求めた<インカ主義>とも呼べる短編集となっている。比較的に数多い<短編>作品には雑多な傾向が認められ、セサル・アンヘレス・カバリェロに従えば次のように分類される。[5)]

(1)家族や懐かしい思い出をあつかう作品

「カルメロの騎士」「コンドルの旋回」「ユダの眼」など

(2)インカ期に想を求めた作品

『太陽の息子たち』に収められた「陶工」「ケーナの魂」などの短編

(3)中国ものや北米もの

「死のサーカス」「チン・フー・トンまたは餓鬼の話」など

(4)幻想的な内容の作品

「黄金のタツノオトシゴ」など

(5)ユーモアの際立つ作品

「恋に死んだ柳のエバリスト」など

(6)哲学的な内容の作品

「アイデアを盗む犬」など

分類の仕方は、無論のこと色々あって、これらの六つの項目も交錯しあう側面をもつが、たとえばペルーに題材を求めたものと外国に求めたものとに二分すれば、後者には先の(3)の項目にふくまれるものが分類される。これをさらに作者が幼少年期を過ごしたピスコやイカ周辺の人々の生活や地方風俗に想をえた作品とそれ以外のものというように分ければ、残りの大部分の短編はそのどちらかに分類することができよう。なかでも当時のペルー文壇の常識外でもあった先住民の歴史や風俗を扱う(2)の項目は、やがて1920年代から30年代にかけて無視できない大きな潮流となって現れるいわゆるインディヘニスモ文学との関係でそれなりの顧慮が払われるべきものかも知れない。ちなみに、短編集『太陽の息子たち』を構成する作品のタイトルを順不同に書きだせば下のようになるが、いずれも未だアンデス地方の社会的現実に切り込んだ内容とはなっていない。さながら夢幻境を徘徊する人物像などインカ時代の栄華や伝承をかりて詩的・幻想的な世界を演出する傾向からすれば、

文学作品としての新境地を開拓したというよりも、むしろペルー的な主題枠の拡大を示すにとどまっている。ペルー海岸地方というバルデロマールの生育環境や夭逝という事情を考慮すれば、未完とはいえ、この新たな主題枠のその後の発展方向こそ大いに関心をそそられるものであった。

「陶工 El alfarero」「雪と化した山羊の群と牧者 El pastor y el rebaño de nieve」
「太陽への道 El camino hacia el sol」「アヤールの兄弟 Los hermanos Ayar」
「死の彼方 Chaymanta Huayñuy」「呪われし男 El hombre maldito」
「放浪の唄歌い El cantor errante」「ケーナの魂 El alma de la quena」

3. 少年の眼がとらえた民衆の生活と哀感

小論の冒頭で触れたように、バルデロマールが今日なお評価されるのは、ピスコ海岸地方の人々の生活を作者自身の幼少年期の体験に重ねるかのような郷愁のベール越しに描きだす、叙情味あふれるほのぼのとした短編作品によるところが大きい。ピスコ周辺の生活情景を描いたものの中から以下三篇を取りあげるが、いずれも読後にカタルシスが残る作品となっている。[6)]

(1) 「コンドルの旋回 El vuelo de los cóndores」: 人生の不条理への開眼

短編集『カルメロの騎士』(1918)所収の短編で、空中ブランコの曲芸を演じるサーカスの少女を描く。筋そのものはいたって単純で、日常生活のちょっとした事件を少年の目をとおしてとりあげたものである。ある日ピスコの町にサーカスがやってくる。桟橋にサーカスの一団が降りたとのニュースは、瞬く間に<私>をふくむ少年たちに広まったが、さらに鉄棒乗りや猛獣使いやピエロなどの団員が鳴り物入りで周辺の村々を触れて回ったこともあって、人々の興味はいやが上にもかき立てられた。土曜日の夜、父につれられ兄弟ともどもサーカス見物に出かけた<私>は大テントの中を埋める観衆と次々に繰り広げられる曲芸に、驚きと興奮ですっかり魅せられてしまう。プログラムも進んでいよいよ待ちに待った<コンドルの旋回>と名付けられた空中ブランコ・ショーが始まった。金髪で黒い眼の華奢で幼い少女が登場しオルキデア嬢として紹介される。観衆が固唾をのんで見ま

もるなか、少女は危険な空中ブランコの妙技をどうやら無事に演じ終え、割れるような歓声と拍手がわき起こる。マット上の難しい技を披露して観衆への返礼とした少女に対する拍手は、いつしかアンコールを求める執拗な催促へと変わる。観衆に押される形で下した団長の合図でふたたび空中ブランコに挑んだ少女は、わずかなミスからバランスを崩し、落下して重傷を負ってしまう。父や兄弟と家路を急ぎつつも、悲しみの混じる暗澹たる気持ちの<私>は、世間にはとても意地悪い人たちがいるものだとの思いを強くする。

主人公の<私>は大勢の兄弟をもったアブラアムと呼ばれる幼い少年である。愛情深い母親と理解ある父親のもとで質素ながらも規律ある家庭生活を送っている様子が叙述からうかがわれ、作者の自伝に重なる部分が大きいことが了解される。学校からの帰り、桟橋に下船したサーカス団に夢中になる余り、いつになく遅い帰宅で心配した母親との間にちょっとした不和が生じるくだりを描く書き出しの一節を通して、少年をとりまくほのぼのとした暖かい家族関係が伝わってくる。

みんなはもうベッドに入っていた。母がやって来て、僕のそばに腰を下ろすと、僕がとても悪いことをしたのだと言った。母は僕をやんわりと叱ったが、僕はそのときになっていかに自分が間違っていたのかを悟った。母が僕のせいで食事をとらなかったことを思い出したのだ。あれこれ心配するといけないからお父さんには今度のことは内緒にしましょう、と母は言った。でもお前はお父さんに心配をかけてるし、この母だってお前には嫌われてるんだから･･･

可哀想な母の言葉はなんと優しかったことだろう！　そして、温もりに溢れる手を膝の上で組んだ母の眼差しはなんと悲しげだったろう！　母の眼から二粒の涙の滴がいちどきに滴り落ちた。こらえきれなくなった僕は、すすり泣きながら彼女の両手に口づけした。母は私の額に口づけしてくれた。ああ、そのとき僕はなんという幸福感を味わったことか、お仕置きもしないで僕を許してくれた母はなんと素晴らしかったことか！

そのあとで母はいろいろと僕に忠告すると、祝福のお祈りをさせた。そうしてから頬を近づけてそこに口づけするのを許してくれ、僕をベッドに寝かせてくれたのだった。(p.126)

カルロス・ルイス・ファーリャス（コスタリカ）の中編『母 Mi madrina, 1954』にみら

れる孤児のフワン・ラモン少年と養母との、あるいはホセ・マリア・アルゲーダス（ペルー）の作品世界でくり返し描かれる少年エルネストとインディオ女性ドニャ・カイタナとの関係にも似た、優しさといたわりに溢れる感情の交感が直截簡明な表現で描かれている。

団長の指示に従って空中ブランコ乗りの曲芸に再び挑んで落下する少女が、少年の眼にどのように映るか叙述を追ってみよう。

新たな歓声があがった。可哀想な少女はその厳めしい男の指示にほとんど無意識のうちに従った。台にのぼった。声が飛んだ。観客が固唾をのみ、場内が静けさにつつまれた。少女にじっと目をすえた僕は、どうぞうまく行きますようにと懸命に祈っていた。手を叩く合図の音がして、オルキデア嬢が跳んだ･･･　それから少女の身にいったい何が起こったのだろう？　誰にも判らなかった。ブランコの摑み方が悪く、飛び出すタイミングが狂ったので、わずかにためらい、絞り出すような、怖ろしい、身震いするような叫び声をあげて、さながら羽を傷めた小鳥のように墜ちたが、幸いなことにサーカスのネットの上だったので一命をとり止めたのだった。少女の身体はネット上で幾度か跳ねた。鈍い衝撃。観衆のどよめきの中、ぐったりして男たちに担ぎ出されてきた少女は途中で唾を吐いたが、その時ハンカチが血に染まるのを僕は目にした。

父に促されて僕たちはその場を離れ、通りを横切って、軽便馬車にのった。悲しい気持ちで押し黙った僕は、みんながあれこれ話すのを聞いていたが、何か無性に腹立たしかった。僕はそのとき初めて世の中にはとても意地悪い人たちがいるものだということを理解した。(p.133)

アンコールを求める観客の利己的な振る舞いが、結果としていたいけな少女の転落事故をひき起こすことになった。だからといって主人公の少年は、サーカスでの曲芸そのものの否定や危険な空中ブランコ・ショーの否定、そしてそうした危険と隣り合わせのサーカスを楽しむ無責任な観客への非難、さらには観客の一人であった欺瞞的な彼自身をも断罪しようという性質のものでないことは言うまでもないであろう。だとすれば、「僕はそのとき初めて世の中にはとても意地悪い人たちがいるものだということを理解した」という最後の一文はこれをそのままの意味で解釈することはできないことにもなろう。思うにそれはむしろ、何の変哲もない＜日常性のなかに潜む不条理＞、ないしは＜人生そのものが

抱える不条理>、それとは自覚せずにとる私たちの極めてエゴイスティックな行動がときに他人の不幸や悲劇をひき起こすに至るような、<人間の生のあり方>そのものに目覚めた少年の批判的な省察と理解すべきものかも知れない。

この事件の後、療養中の少女に偶然に再会して以来、ほのかな友情をはぐくむ少年は、やがて港の埠頭から乗船してピスコを後にするサーカスの一団を寂しさをかみしめながら見送ることになる。海も空も真っ赤に染まる夕焼けの中、少女を乗せた汽船が煙をなびかせながら海の彼方に滑ってゆく作品末の情景は、詩的な哀感を醸しだして効果的である。

〔美人騎手の〕ブルトゥネル嬢と〔鉄棒乗りの〕ケンダルの二人に両側から腕を支えられ、コホンコホンと咳き込みながら、あの可憐な少女がゆっくりと歩いて来た。少女が桟橋からボートに乗り込むのを見ようと、僕は人々の間に割って入った。探しものでもするかのようにあちこちに視線を走らせた少女は僕と目が会うと、にっこりと微笑みかけ、そばを通り過ぎる際に「さようなら･･･」と僕に言った。

「さようなら･･･」

ケンダルの腕に抱えられた少女がゆらりゆらり揺れる小さなボートへと降りてゆくのを僕は目で追いかけた。少女が桟橋の錆びた鉄の階段から遠ざかっていくのを見た。少女は潤んだ目で悲しそうに僕を見つめていた。僕の方を見ながら、ハンカチを取りだしてそれを振った。僕は手を挙げてそれに答えたが、そんな風にして彼女の姿は次第にかすんでいき、ついには折れた翼のような、死に瀕したハトのようなハンカチだけが認められるようになり、最後にはボートしか見えなくなったが、やがてそれも汽船の影に隠れていった･･･

僕は家に帰った。そして夕方の 5時、学校を出た僕は、空っぽになったあの家のテラスに、懐かしいあの少女がいたいつもの場所に腰をおろすと、黄昏どきの真っ赤な空にさながら黒髪と見まがう煙を染みのように引きながら、広々とした海原の彼方に消えてゆく汽船を見つめたのだった。((pp.134-35)〔 〕内は引用者の補注)

(2) 「カルメロの騎士 El caballero Carmelo」：名もなきものへの共感

同タイトルの短編集の表題作品をなし、リマの新聞「ラ・ナシオン」紙が1913年に主催した文芸コンクールの首席を獲得した作品で、同紙の翌14年1月3日付に掲載された。ビリ

ングハースト G. Billinghurst はかつての太平洋戦争（1879-83）の英雄で南部の富裕な硝石業者であったが、バルデロマールはリマのサン・マルコス大学在学中に、大衆派の大統領候補として出馬した彼の支持運動に奔走して、その当選（在任1912-14）に大きく貢献した。やがて彼は駐イタリア公使館二等書記官に任命されてローマに赴任し（1913）、大統領がクーデタによって失脚するまでの約一年弱、＜世紀末デカダン＞の残り香の漂う第一次世界大戦直前の西欧文化を吸収することになるが、恐らくはアメリカ的・ペルー的な世界への見方を一新させる契機となったであろうこのローマ時代に、短編「カルメロの騎士」が書きあげられた。

ある朝、颯爽と馬にまたがりスカーフを風になびかせながら、長い間実家を留守にしていた長兄のロベルトがわが家に帰ってきた。旅先での積もる話もさることながら、父母と大勢の兄弟からなる家族それぞれに贈った土産の中に、父が譲り受けたカルメロと名付けられた立派な軍鶏があった。家族の一員として迎えられた軍鶏はその気品ある振る舞いから＜カルメロの騎士＞と呼ばれ、みんなから可愛がられて平穏な三年間が経過する。昼食のすんだある日の午後、サン・アンドレスの村で来る 7月28日に開かれる闘鶏に行きがかり上、カルメロを参加させざるをえなくなったとの衝撃的なニュースが父からもたらされる。聞けば相手は＜アヒセコ（赤トウガラシ）＞という修羅場を何度となくくぐってきた歴戦の喧嘩鶏であった。私たちが成長するのとは対照的に年を重ね、もはや老境ともいえる＜カルメロ＞を再び闘わせるような酷いことを何故するのかと悲しむ私たちに、怖れていたその日がついにやってきた。国旗が翻ってお祭り気分一色に染められた独立記念日の当日、サン・アンドレスの闘鶏場にやってきた私たちは、まずそこで相手の脚に結わえられた鋭いナイフの一撃で首を血潮に染めて倒れる別の軍鶏の最期を目にすることになった。そしていよいよ＜アヒセコ＞と＜カルメロ＞の出番がまわってくる。周りの人垣からは勝敗に賭ける人声が飛び交い、観衆の興奮の渦の中で闘いが始まった。相手側有利とみて観客の大半がアヒセコに賭けるのを眺めながら、それをカルメロが負けて死んでしまう確率の大きさに結びつける私たちは心配でたまらなかった。二羽の喧嘩鶏が繰り広げる壮絶な死闘は若さと体力に優るアヒセコの優勢のうちに展開し、ついに相手の鋭い攻撃で深手を負ったカルメロが喘ぎながら倒れこむ。一度は勝負あるかに思われた戦いは、しかしながら再び立ち上がったカルメロが、勝ち誇る相手の隙を突いた捨て身の攻撃でとどめの一撃をアヒセコにくらわせるが、自らも血塗れになって倒れ込むのであった。「でかしたぞ、カルメロ！」の歓声のなか、人々は素晴らしい試合だったと褒め称えては口々に父を祝福

した。瀕死のカルメロは自宅に運ばれて手当され、みんなの手厚い世話をうける。もはや立つことも餌をついばむこともできないカルメロを前に失望感が広がった二日目の夕方、ぐったりしていたカルメロがにわかに起きあがって窓辺に近づいた。弱々しく羽ばたいたあとでしばらく大空を見上げていたが、やがて翼をひろげ威儀を正すかのように反り返ると一声放って刻を告げ、静かに息を引き取ったのであった。

「コンドルの旋回」とほぼ同様にピスコ生活情景の一コマをあつかった作品であるが、以下の引用にみるように冒頭の導入部と結末部分で遠い昔の出来事としての回想の枠組みが示される点で、幼年時代の<私>の世界に直接いざなわれた「コンドルの旋回」との相違が認められる。

> すっかり昔のことになった幼年時代のこの親しい友は、このようにして私たちの身近な存在になったが、この友については物語るにふさわしい由来があり、彼の思い出はちょうど羽をつけたもの悲しい影のように今でも私たち家族のなかに生き続けている。(pp. 88-89)
>
> 戦士の華であり軍鶏族の雄である<カルメロの騎士>、誰もが認めるその名声は長年にわたって、この緑あふれる肥沃なカウカトの谷全体の誇りであったが、その無名の英雄、かくも好かれた私たちの子供時代のあの友は、そのようにしてこの世から去って行ったのだった。(p. 100)

それ故こうしたことからすれば、軍鶏のカルメロを可愛がった当時の<幼い私>と、そうした<私>に寄り添いつつも幼少年期をすでに過去と見なす<現在の私>という少なくても二つの視点が作品叙述を織りなしていることが理解され、それだけ<失われた良き時代>や<過ぎ去りし日々>への想いが強調されて示されることになろう。こうした<過去への憧憬>は一章を割いて平和でのどかなピスコ情景を描き込むことでさらに増幅されてもいる。

> 駅舎近くの白くひっそりした名もない小さな広場から、南に長くのびるカスティーリョ通りをたどってピスコの町の外に向かう者は、その通りの尽きるところで復活祭の日曜日にユダの人形を燃やす小さな広場に出るが、そのあたりは野生の葵が地面のあちらこちらに緑の斑点をつけているような侘びしい場所になっている（‥‥）なお

も道をたどると、海岸の彼方、海沿いのためにおぼろに揺らぐ霞をとおして、終日絶えることのない潮騒と荒涼とした砂地との間に粗末な家々がならぶ、あの素朴な住人の村サン・アンドレス・デ・ロス・ペスカドーレスが見えてくる。椰子の木々が茂り無花果の樹々が家々に爽やかで心地よい緑陰をつくり出しているので、その風情はまるで（･･･） 樹陰の大気がものみな眠りに誘う午後に、舟の傍らで漁網を繕う年老いた漁師。その節くれ立つ指で結び合わされた亜麻糸は魚たちに絡まりついて彼らをアッと驚かすのだ。老女は前日に舟が持ち帰った獲物の、銀色に輝く背肉をこそげ落とす。陽光の下、銀鱗はさながら火花のごとく飛び散り、犬はクンクンと鼻を鳴らしてそのおこぼれにあずかる（･･･）。(pp.91-92,93)

そしてこれらの生活情景の叙述中には、後に『太陽の息子たち』で取りあげられるようなペルーの歴史と文化にたいする作者の関心が、次例にみるようにすでに顔を覗かせていることが判る。

私が見知る当時のサン・アンドレスには教会もなければ司祭もいなかった。日曜日ともなれば、夜明けとともに村人たちは新鮮なニベを積んだロバを引いて港へとむかい、その後に礼拝堂で神に祈りを捧げるのだった。柔和な顔と穏やかな眼差しの、控えめで素朴な善良なる人々。どんな道をも歩きとおす生粋のインディオ、幸せなるインカの時代に背負い袋に供物をいれ、尋ねたき言葉をそらんじ、篤き信仰を純朴なる精神に宿して、遅れることなくパチャカマ神殿に馳せつけて神のお告げを聞こうと、長く連なる隊伍を組んで浜辺を渡った、あの遙かな昔の紛うことなき太陽の民の末裔たち。(p.94)

「カルメロの騎士」は家畜やペットといった名もなきものに寄せる少年と家族の暖かい眼差しが読む者に自然に伝わってくる短編である。それぞれ固有の名前と性格をもった人間にも等しい存在として遇せられる家畜やペットを念頭におけば、闘鶏や軍鶏の＜カルメロ＞が一騎打ちとそれを演じる騎士にも見立てられることは、もはや何らの違和感も感じさせることがない。読む者は少年の視点に同化して、＜騎士＞のように誇り高いカルメロに共感し、人間の社会、大人の社会の身勝手さや残酷さへの批判を含むその運命に、さながら人生そのものの悲哀を感じとることになる。カルメロの死を見つめる＜私＞とその死

を真摯に受けとめる家族の反応を描いた作品末尾の一節をながめてみよう。

カルメロはにわかに身を起こした。陽が沈もうとしており、部屋の窓を通して黄昏時の赤々とした光が差し込んできた。カルメロは窓辺に近寄るとその光を見つめ、弱々しく翼を動かすと、そのあと長いあいだ空をながめた。やがて黄金色に染まる翼をせわしげに広げると、威儀を正すかのように胸をせり出して一声刻をつくった。それから二・三歩後退し、玉虫色に輝く首を垂れて胸にのせたかと思うと、身体を小刻みに震わせながら倒れこみ、うろこに覆われた二本の脚を力無く伸ばし、優しげな視線を私たちにむけた後で静かに息を引き取った。

私たちはわっと泣き出した。私たちは母を探しに行ったが、それがカルメロの見納めとなった。その夜の食事は陰鬱だった。母は一言も喋らず、石油ランプの黄色い明かりの下で私たちみんなは無言のままお互いを見つめあった。翌日の明け方、宵闇が苦しげに力尽きる頃、あのいつもの潑剌と刻を告げるカルメロの啼き声は聞こえなかった。(p.100)

雄々しく闘って傷つき、死期迫る自らの運命を諦観とともに受け入れ、自分を慈しんでくれた者たちに感謝しつつ慫慂として旅立っていく。ヒトに人生最期の輝きと呼べるものがあるように、カルメロもまた残照を受けて黄金色に輝くその翼をうち振り、宵闇が広がりをます大空に最期の刻の声を放つ。今まさに消えゆかんとする自らの魂を、カルメロは全身の力をふりしぼって発したその啼き声にのせて大空へと飛翔させたのだ。このように解するとき、この作品は最も鮮明な形でアブラアム・バルデロマールの美学が描かれているものの一つと見なすことができるのではないだろうか。

(3) 「ユダの眼 Los ojos de Juda」：幻想性・宗教性と大衆性

＜復活祭の日曜日にユダの人形を燃やす広場＞がピスコの町にあったことが先の「カルメロの騎士」の引用文の中にも述べられているが、＜日曜日＞と＜土曜日＞というわずかな違いこそあるものの、短編「ユダの眼」は、キリストを裏切って密告した罪で聖週間の土曜日の夜にユダの人形を焼くという古い伝統行事に幼年期の出来事を絡ませた、どこか不気味な幻想性を漂わせる作品となっている。

当時のピスコには広場が三つあり、そのうちの一つは主人公である九歳の＜私＞と妹、父母と女中からなる家族が住む間近にあった。父はピスコの港の税関吏として勤め、母は夕方になると私や妹を連れて浜辺を散歩がてら港近くまで足をのばして、家路をたどる父を待つ毎日であった。船の出入港が夕方から夜にあれば、職業柄、父の帰宅が遅れて母の心配性がさらに嵩じるのだった。聖週間の月曜日の午後のこと、ピスコからサン・アンドレスの村にのびる浜辺の半ばで眠気を覚えて眠りこんだ私は、夢のなかで白い衣装の不思議な婦人に出会った感覚が残る。目覚めると婦人の姿はどこにも見えなかったが、服のポケットに無原罪の聖母像を刻んだ銀のメダルを見つけて不思議な思いにとらわれる。翌日の聖火曜日、好奇心を捨てきれずに昨日と同じ場所で横たわると、ほどなく白い衣装に身をつつんだ見知らぬ婦人が現れた。相半ばする恐れと好奇心に捕らわれた私ではあったが、「浜辺で子どもが眠りこむと天使が現れてメダルを贈るの」といった婦人の説明や聖土曜日の夜にユダの人形を焼く行事について色々と話をすることで、私は婦人とうち解ける。なか三日おいた聖土曜日はユダの人形を燃やす日で、夕方近く外出した私はすでに準備が会場の広場ではできて、覆いから頭だけのぞかせたユダの怒り立つように大きく見開かれた瞳のない無表情な目が遙か沖合に向けられているのを眺めた。浜辺の半ばまで三たび足を運んだ私は、サン・アンドレス村の方からやって来る白い衣装の婦人を認めた。彼女は青ざめて病人のように見えたが、砂浜に腰をおろした私たちは海を眺めつつユダをめぐる色々な話をした。「ユダを許すことができないの？」という前回同様の質問に私は「できない」という立場を変えなかったが、「ユダの眼はどこを見てるの」との問いに「海」と答えると、婦人は「本当にそう思うのね？よく観察したの？」と逆に謎めいた問いかけをする。その後連れだって行事の会場に近づくと、婦人は立ち止まって目を地面に落としたまま「ユダの眼がどこを向いているか、よくご覧なさい」と私に注意し、人形の傍らを過ぎる折にもユダの顔を見ないように努めながら「あの眼はどこを見ているの？　どんな色の眼をしているの？」とくり返し私を促して別れたが、私はなぜかゾッとする恐怖心で一杯だった。

その夜は曇り空で海が荒れる気配がした。帰宅すると案の定、その時刻に出航する船のため出勤しなければならない父を案じて母が泣いていた。父の帰宅を待ちわびるなか、遭難事故発生の知らせが飛んでにわかに町中が騒々しくなった。折よく帰宅した父の後を追って人々でごった返す海岸に向かうと、その沖合には汽笛を響かせ照明灯で合図を送る難破船の姿があった。救難に向かうボートが港の桟橋から漕ぎ出されたが、人々の見守るな

か、やがて汽笛も止み照明灯の光も夜の闇の中に沈んでいった。海岸の人々も次第に退き始めたので、私は父と一緒にユダの人形が焼かれるのを見に町外れの会場へと向かった。事故の発生で中止かと思われたが、強硬派が人形の足許に火をつけると人形はたちまち真っ赤な炎につつまれていった。そのとき奇しくも、「水死人があがったぞ」との不吉な知らせが届いて人々は怖ろしい混乱に陥った。潮流で浜辺近くに打ち寄せられた水死者は女であった。未だくすぶり続けているユダの人形近くに確認のために運ばれた水死者を父に従って間近にみた私は、見るも無惨に変わり果てたその亡骸があの白い衣装の婦人と判って、吃驚し叫び声をあげて父にしがみついた。そして燃え残ったユダの人形の顔の二つの眼が亡骸を見つめ、その亡骸が私を見つめていることに気づいた私は、さらなる恐怖に襲われて「許します！ええ、僕はユダを許します！」と叫んだのであった。

漁労に携わる人々の間では各種の信仰や迷信が代々護り伝えられるが、彼らにとって海難事故は日々の生活に直接関わる身近なものだけに、こうした性向にはそれなりの根拠があることがくり返し語られる。そのくだりを取りだしてみよう。

「難破！」

それは壊れやすい小舟で波間に乗りだす漁師たちや日暮れともなれば心配そうに彼らを待ちわびる女たちの、海に生きる人々にとっての永久に変わらぬ敵であった。海辺で暮らす人々みんなが、いつでも相手にしなければならない敵であった‥‥　それは海岸地方の人々の信仰や迷信のすべてに闘いをいどんでくる恐ろしい敵であり、こつ然と現れて、ときに前代未聞の忌まわしい竜巻に姿を変え、漁師たちを不思議な渦へと運び去ってふたたび海岸に戻らせることがない。危険はまた、船を陸から遠ざける風となって姿を現し、果てしなく広がる青と緑の大海原のまっ只中に置き去りにもする。素朴なる人々は、この未知の予想だにしない悪霊が現れるとおののいて、漁の守護聖人であり案内人でもある、漁労をうけもつキリストの使徒にその祈りを捧げるのを習いとするが、すでに悪霊の犠牲者がでたことが確かであれば、それも無理からぬことなのだ。(p. 117)

バルデロマールは短編「ユダの眼」をとおして、海岸地方に生きる人々がそなえる敬虔な宗教性や篤い信仰心を、こうした感傷的な一種独特の幻想的筆致で描きだした。ピスコ

で過ごした主人公の九歳の折の出来事であると作品の冒頭部分で述べられるなど「カルメロの騎士」同様に回想の枠組みが示されるが、他方で作品末尾における枠組みはなく、代わってクライマックス部分で恐怖に動転する主人公にみられる<劇的な不安>をさらに持続させるがごとく「月が隠れつつあった‥‥ (Ocultábase la luna...)」と結んでいる。作品世界の主要な出来事はおおかた夕方から夜といった時間帯に集中し、光と闇のイメージが闇を基調に入り交じる手法が特徴的でもある。聖週間の宗教行事と海難事故とを重ねあわせて描くことで<ユダの眼>の神秘的で不気味な幻想世界が優れて効果的に創出されているが、職業柄、危険と隣り合わせの父と心配性な母といった人物設定や、真偽の記憶も状況判断も不確実な<幼児の視点>の採用が、こうした演出に不可欠の役割を果たしている事実は否めない。

日没とともにピスコの港の標識用のランプが埠頭の先端に向かって次々と灯されていくが、それはさながら夕闇に灯が浮かんで行進するようであり、父を待つ私たち親子を幻想へと誘うものでもあった。

夕闇がその翼をゆっくりと広げつつあった。ふと、母が水平線近くの遙かな沖合に点のような影を認めた。

「今夜はお父さん、私たちと一緒に食事をしないわね、きっと」と言ってから、つけ加えた「あのお船をお迎えしなければならないの。おうちに帰るのは夜になるでしょうね。海はあんなに荒れてるんだもの」。そして母は、悲しそうにため息をついた。

真っ赤な太陽が水平線に沈んだ。代しゃ色に染まる海の上に切り取られたかのような船影がはっきりと見分けられた。港はすっかり夕闇におおわれた。無言のうちに私たちは帰途についたが、埠頭ではカンテラが灯されて<灯の行進>がだんだんと伸びていくところであった。

港湾事務所からカンテラを満載して出て、埠頭へと水夫に引っぱられる荷車を私たちはそんな風に呼んでいた。水夫は50メートルごとに停まっては、長く真っ直ぐに伸びた埠頭の先端までの支柱の一本一本にカンテラを吊り下げていくのだった。この作業は夜の到来を告げるものであったとはいえ、人間も車も埠頭さえも分からないままに灯だけが海の上を進んでいくのが見られた。その刻になると辺りは深い宵闇に閉ざされたから、標識灯は何か現実離れした不思議なもののように映った。そしてあの荷車は、さながら物音の消えた死んだような海面に漂う幽霊船であった。(pp. 106-107)

ところで、主人公の＜私＞が語るように、サン・アンドレスへと続く浜辺で＜私＞が出会う＜白い衣装の婦人＞とユダの人形を燃やす聖土曜日の夜に浜に打ち上げられた＜水死者＞が仮に同一人物であるとすれば、＜白い衣装の婦人＞はいったい何者なのであろうか。作品末尾のクライマックスにおいて、恐怖にとらわれた＜私＞は「ユダを許します」と叫ぶことになるが、ここには一体何が隠されているのだろうか。確かに短編「ユダの眼」は幻想的な作品であり、読み手としては合理的な解釈への努力を放棄して作品叙述をそのまま受け入れることが極めて自然なやり方と思われる一方で、作品の中にはいくつかの暗示的な記述が存在することにも気づかされる。たとえば、ある朝ふと目覚めた＜私＞の耳に、知人が巻き込まれた殺人事件をめぐる父母の会話が断片的に聞こえてきたとの記述が、ユダの人形と白い衣装の婦人に絡まる作品の主要な事件の発生と展開の前に置かれている。＜私＞の脳裏にいつまでも残る父母の只ならぬ会話の内容は、子どもを人質にして本当のことを話すよう判事に脅迫された知人の女性が、脅されるがまま自分の夫がピスコにやってきた目的を認める供述をした結果、女性の夫が拘留された云々というものであった。「それじゃ、彼女は自分の夫を密告したことになるのね？　何という怖ろしい裏切り行為なんでしょう、なんと怖ろしい！」(p.108) という＜私＞の母の声が＜私＞の脳裏に鮮明に焼きついたのだった。この事件の真偽と詳細は＜私＞が幼児ゆえに不明のままであるが、キリストを裏切って密告したユダの話や、さらには白い衣装の婦人が「ユダを許すことは出来ないの？」とくり返し＜私＞に尋ねる理由とも繋がっていることは明らかであろう。その他、＜水死者＞が実際に難破した船の乗客であったのかどうか、そして＜私＞が叫ぶように白い衣装の婦人が＜水死した女＞と同一人物なのかどうか。また、白い衣装の婦人と水死者とが同一人物と仮定しても、では婦人は私が出会った時点では実在の人間であったのかどうかといった数々の疑問が生じてこよう。しかしながら、作品の成立が幼児という主人公の視点に支えられていることからすれば、こうした推理をそれ以上展開させることはほとんど意味をなさないし、この点にこそ逆の意味で、短編「ユダの眼」の幻想空間が一つの完結した世界を形づくる理由があるのである。豊かな空想力や想像力と裏腹に未熟で曖昧な判断力や記憶力、不安定な情緒性などといった幼少年期特有の特徴にくわえて、神経過敏で心配性の母親に示される家庭環境と信仰心のつよい土地柄といった主人公の生育条件を考慮すれば、二つの相異なる出来事としての＜白い衣装の婦人＞と＜水死者＞が、父母の会話における＜知人の女性＞と聖週間に焼かれる＜ユダ人形＞というこれも別々の

出来事に触発されて、＜私＞の想像ないし妄想のなかで一つに繋ぎ合わされたと見なす方が妥当ではないだろうか。いずれにせよ、ある消しがたい哀しい事件の記憶を＜私＞という幼児の目をとおして生々しく描きだすことで、バルデロマールは同時に、ピスコ海岸に生きる人々のいだく深い宗教性と郷愁にも似た自身の熱い想いとをそこに託したのだと解することができる。

注

(1) Valdelomar, Abraham: "Tristitia", en R. Silva-Santisteban(ed): Antología general de la poesía peruana, pp.357-358.

(2) Angeles Caballero, César A.: Valdelomar: Vida y obra, p.15.

(3) Ibíd.

(4) バルデロマールが主宰して創刊した雑誌『コロニダ』の位置付けと当時のペルー文学の状況については、思想家マリアテギによって取りあげられている。
Mariátegui, J.C.: Siete ensayos de interpretación peruana, pp.223-231.

(5) Caballero, C.A.A.: Valdelomar: vida y obra, pp.37-39.

(6) テキストとして
Valdelomar, A.: La ciudad de los tísicos, El caballero Carmelo y Otros cuentos, PEISA, 1989 を使用し、以下の引用はすべてこの版に拠る。。

参考文献

＊作　品

Valdelomar, Abraham: Los hijos del sol, Lima, 1921.

----------: El Caballero Carmelo, Lima, s.f.

----------: La ciudad de los tísicos, El caballero Carmelo y Otros cuentos, Lima, 1989.(テキストとして使用)

Los mejores cuentos peruanos: V.G.Calderón/A.Valdelomar/J.Diez Canseco (selec. y prólogo de Manuel Suárez Miraval), Lima, 1956.

Silva-Santisteban, R.(ed): Antología general de la poesía peruana, Lima, 1994.

＊評論・研究書

Abril, Xavier/A.Cornejo Polar/T.Escajadillo et al.: Mariátegui y la literatura,

Lima, 1980.

Aldrich, Jr. Earl M.: The Modern Short Story in Peru, Madison/London, 1966.

Angeles Caballero, C.A. : Estudios en torno a Valdelomar, Ica, 1961.

---------- : Valdelomar : Vida y obra, Ica, 1964.

Bendezú Aibar, E. : La novela peruana, Lima, 1992.

Cornejo Polar, A./W. Delgado/et al. :Literatura y sociedad en el Perú, Lima, 1982.

Delgado, W. : Historia de la literatura republicana, Lima, 1984.

Mariátegui, J.C. : Siete ensayos de interpretación de la realidad peruana, Montevideo, 1970.

Montalvo, C.T. : Literatura peruana: De los Incas a la época contemporánea, Lima, 1994.

Rubén Chauca Arriarrán, P. : Abraham Valdelomar : Vida y obra, Ica, 1988.

Sánchez, L.A. : La literatura peruana, Tomo 4, Lima, 1981.

Tamayo Vargas, A. : Manual de Literatura peruana e hispanoamericana, Lima, s.f.

Vargas, I.P. : Valdelomar en Moquegua, Lima, 1991.

メシカの俗信にみる呪術的思考
―『フィレンツェ文書』第五書の解読―

山本 匡史

はじめに

気象や動植物の行動など、自然現象の変異をもって未来の出来事についての吉凶を判断したり、特定の行動を災厄を招くものとして戒めたり、あるいは来るべき災難を回避し、よりよい結果を手中に収めるために何らかの呪物を操作するといった行為は、論理的、合理的、科学的な思考様式を基盤とする近代社会においては非合理的な迷信、俗信として斥けられてきた。しかしながら一方で、先端技術をうみだす近代的工場の片隅に鳥居が建てられ、最新の運動生理学理論にもとづくトレーニングを積み重ねたスポーツ選手が試合の度ごとにジンクスを気遣うなど、現代においてさえ、宗教的、呪術的な心性は明らかに存在しているとすることができよう。

この点について、タンバイア(Stanley J. Tambiah)はレヴィ・ブリュル(Lucien Lévi-Bruhl)によって提唱された「前論理的心性」と「論理的心性」の対比を再解釈、展開し、いわゆる未開社会、近代社会のいずれをとわず、すべての人間は現実に対して「多元的秩序づけ」をおこなっていることを指摘するとともに、融即と因果というふたつの指向性を明らかにした。タンバイアによれば、これらはいずれも「人間に備わった〈同一〉の感覚の様式、すなわち触ったり、味わったり、聞いたり、見たりという様式がもっている経験的能力や象徴化の能力」[1]を基盤としており、このうち融即とは「人々、集団、動物、場所、自然現象などが近接する関係にあるときに生じるものとしてあらわすことができ[…]その関係は直接的で接触的、かつ親和力を共有するような関係へと翻訳されうる」[2]ような現実への指向性であり、そして因果とは「世界の中の出来事にたいして、ある種の距離を置くことや精神の中立性、抽象化などが必要とされる」ところの「実証的な科学や言説的、数理・理論的な理性のカテゴリー、規則、方法などによって典型的に代表される」[3]指向性であるという。すなわち、呪術的あるいは宗教的思考としての融即と科学的思考としての因果は同一の社会内において共存し、しかもこれらは二元論的な対立概念ではなく、人間のもつ表現形式の連続体の両端として相互補完的な関係にあるとされる。

本稿では、このような観点から、俗信を前近代的な疑似科学の残滓ではなく、当該社会における知の一形態として捉え、フランシスコ会修道士ベルナルディーノ・デ・サアグン(Bernardino de Sahagún) による記録をもとに、14世紀中期から16世紀初頭にわたってメキシコ中央高原地域を中心に古代メソアメリカの核文化のひとつを形成したメシカ（アステカ）社会における俗信についての考察をおこなう。

1．サアグンの調査と記録

1521年、メヒコ・テノチティトラン(México-Tenochtlitlan)の陥落をもってスペインによる軍事的征服が達成されると、メソアメリカにおける古代は終焉を迎えることになる。スペイン人によるメソアメリカの征服・植民活動は、単に物質的側面だけではなく、征服から２年後の1523年には３名の、次いで翌1524年にはイエス・キリストの十二使徒に因んだ12名のフランシスコ会修道士が到来し、先住民のカトリックへの改宗という精神的征服事業が開始される。1499年頃にスペインのレオン地方に生まれ、1516年頃にサラマンカでフランシスコ会士となったサアグンは、そのような改宗事業の一翼を担うべく、1529年にヌエバ・エスパーニャに渡り、1590年に同地に没するまでその半生を布教活動と先住民文化の調査研究に捧げることとなった。

ヌエバ・エスパーニャに到着後、サアグンはトラトロルコ(Tlatelolco)のサンタ・クルス学院でメシカ人子弟にラテン語文法を講じるとともに、メシカ人の使用言語であるナワトル(nahuatl)語の知識を得る。1540年代後半にテペプルコ(Tepepulco)において先住民文化に関する資料収集に着手したサアグンは、先スペイン期の教育を受けた古老たちを集め、一定の質問項目に沿った面接調査をおこない、サンタ・クルス学院の弟子の協力によりアルファベット表記のナワトル語資料を作成した。『初期覚書(Primeros Memoriales)』として知られるこの資料はさらにその後トラテロルコ(Tlatelolco)、メヒコ(Mexico)における調査により増補・校訂が加えられ、『マドリード文書(Códices Matritenses)』[4] とよばれる資料へと発展する。

これら一連の調査は、先住民のカトリックへの改宗事業に従事する修道士のための資料作成という目的をもっていたことから、サアグンは蒐集されたナワトル語資料にスペイン語の翻訳を添付することになる。『マドリード文書』に

若干の校訂を加えつつナワトル語とスペイン語のテクストを並置し、あらたに図版を加え、1570年代に完成したのが現在『フィレンツェ文書(Códice Florentino)』とよばれる文献である。全体で12書により構成され、1845枚の図版を含む1179葉からなるこの『フィレンツェ文書』は、宗教、暦法、祭事、歴史、社会生活から博物誌に至るまでの広範囲な内容が収められている。なお、後年になって作成された同文書のスペイン語部分のみの稿本—『トロサ手稿本(Manuscrito de Torosa)』とよばれる—は、『ヌエバ・エスパーニャ総覧(Historia General de las Cosas de Nueva España)』という名前でも知られている。

このように、まさに民族誌学的ともいえる手法により編纂されたサアグンによる一連の資料は、著者の見聞録や単なる聞き書きに多くを依存している同時代の他の多くの記録とは違い、スペインによる征服直前のメキシコ中央高原を中心とした文化事象を解明する上で欠かすことのできない基礎資料となっている。

サアグンによる一連の民族誌学的調査のなかで、俗信にかんする情報は『初期覚書』の段階では17件のみがリストアップされ、内容も「何々があれば…何々が起こる」といった現象と結果のみの簡潔な記述にとどめられている[5)]。『マドリード文書』ではこれらのうち15件の情報が採用され、事物や現象にかんする解説や結果の解釈の根拠、対処法などが付加される。さらに最終報告書ともいえる『フィレンツェ文書』においては、第五書としてこれらの情報は13章に分けられ、それぞれに表題が添付される。またここでは補遺として37章にわたる「迷信」が新たに加えられ、全50章におよぶメシカの俗信のコレクションが日の目を見ることになる。なお、『フィレンツェ文書』のスペイン語部分にはさらにサアグン自身により本編と補遺の冒頭にそれぞれ序文が加えられている。ここでのスペイン語への翻訳は直訳ではなく、随所に省略や註釈をほどこした意訳となっている。

『フィレンツェ文書』第五書の本編、補遺を構成する50章では、複数の情報を含む章があるため、件数としては本編13章で20件、補遺37章で48件、合計68件の俗信を数え上げることができるが、内容は多岐にわたっており、さまざまな角度からの分類が可能であろう。そこで次章では、メシカの俗信の概要を把握するため、これらの情報に独自の視点からの検討を加え、分類をおこなう。

2．メシカの俗信

サアグン自身はこの第五書の本編の表題を「当地の先住民が、将来の事柄を占うために、鳥、動物、虫などを見て行なった占いと予測について扱う第五書」とし、序文では本編の構成を「先住民が吉兆、凶兆としたものを列挙し、最後に、夜、彼らの前に現われた様々な幽霊のことを、取り上げている」と説明している。一方、第五書補遺では「当地の先住民が行なっていた迷信について」という表題のもと、本編との違いを

> 吉凶の前兆と迷信は同じ類のものに見えるが、吉凶の前兆は、概して、本来は被造物に具わっていないものを被造物のせいにする。[…]第五書ではこの手の吉凶の前兆について述べられている。この補論で扱う迷信はこれと反対で、被造物が具えている良い印象、良い影響を悪いように解釈するのである[6]。

と述べている。すなわち、サアグンの分類によると、「前兆」を対象物の属性に基づかない行為の解釈、「迷信」を対象物の属性をもとにした解釈と位置づけ、これらを第五書の本編（超自然的存在との遭遇という怪異現象を含む）と補遺にそれぞれ充てている。

ところが、これらの俗信を通観してみると、本編に収められているもののなかに対象物の属性に基づく解釈が見られ、また補遺のなかにも対象物の属性とは直接関連していない解釈が見いだされる。さらには、目前で生起した現象を受動的に解釈する行為のみならず、特定の成果を引き出すための能動的な行為も含まれている。したがって、ここではサアグンによる分類基準とは離れ、『フィレンツェ文書』第五書の本編、補遺に収録されている68件の俗信について、予兆、禁忌、呪術的行為、怪異現象の４項目により分類をこころみることにする。

(1)予兆

気象や動植物の行動など、自然現象の変異、あるいは人間の日常行動における異常な帰結といった現象をもって未来の出来事についての吉凶を判断する行為を予兆と定義すると、『フィレンツェ文書』第五書においては、22件の俗信がこの予兆に相当する。

題材としては動植物に関するものが大半を占め、16件が見いだされる。吉凶の判断については、下記に示すように鳴き声や名称による類感（事例１、２）、習性による類感（事例３）、宗教的シンボルとの連関（事例４）といった根拠にもとづいたものが数多くみられる。

【事例１】
みみずく(tecolotl)の鳴き声は病死、戦死、奴隷の逃亡、一家離散の凶兆とされる。これはみみずくの鳴き声 "tecolo-o-o" のなかに "coloa" という動詞(encorvar, doblegar)が聞き取られることによる。(本・四)[7]

【事例２】
コガネムシ(pinahuiztli)に家に入ってこられたり、道で遭遇したりすると、病気にかかったり他人から辱めを受けたりする凶兆となる。これは "pinahuiztli" という単語が「コガネムシ」と「恥辱」の同音異義語であることによる。(本・八)

【事例３】
ウサギが家に侵入すると、家が収奪されたり、荒廃したり、家人が失踪する凶兆となる。これはウサギがその習性から「野生」をあらわすシンボルとされているからである。なお、同様のことはスカンクに関しても、家の当主の死という予兆で伝えられている。(本・七、九)

【事例４】
ふくろうの鳴き声は家人の病気や死をもたらす。これが二度、三度と繰り返されると凶兆はますます確実なものになる。これはふくろうが冥界神ミクトランテクトリ(Mictlantecuhtli)の使者であるとされているからである。(本・五)

なお、この他の題材としては、家の梁がきしんだり割れたりする現象(補・三三)、あるいはメタテ(metlatl)[8]が使用中に割れるという現象(補・三四)を家人や本人の病気や死に連関させるといった類感呪術的な予兆、さらには、根拠は不明であるが、くしゃみをすると他人に噂をたてられているという興味深い予兆(補・三〇)も残されている。

(2)禁忌

予兆の解釈は、日常生活のなかでいわば不可避的に起こる現象が対象となるが、あらかじめ特定の行動を災厄を招くものとして戒めることにより危機を回避しようとする行為が禁忌である。『フィレンツェ文書』第五書には25件の禁忌が収められているが、食生活に関するものが7件、住居内での立居振舞に関するものが2件、妊婦に関するものが6件、子供に関するものが4件（うち3件は双生児に関するもの）、そして動植物に対する行為に関するものが6件と多岐にわたっている。これらのうち、比較的根拠が明確なものとしては下記の事例があげられよう。

【事例5】
アマリリス(omexochitl)やポインセチア(cuetlaxochitl)の花を跨いだり、香りを嗅ぎすぎてはならない。痔疾や性器の病気となる。というのは、これらの花の形状がただれた性器の形状と似ているからである。(補・一、二)

【事例6】
柱にもたれると嘘つきになるので、両親はこれを戒める。これは「柱」と「嘘」が同音異義語(tlaquetzalli)であることによる。(補・一六)

【事例7】
鍋に貼りついたタマル(tamalli)[9]を食べると、男性は戦場で矢を狙いどおりに射ることができなくなり、女性は胎児が子宮に貼りつき難産となるため、母親はこれをたしなめる。(補・八)

このなかで、事例5は感染呪術、事例7は類感呪術の典型的な例であるといえよう。なお、この他に、年少者が年長者よりも先に飲食をしてはならない（成長が阻害される）、若い女性が立ったままものを食べてはならない（遠隔地に嫁ぐことになる）といったマナーに関すると思われる禁忌も見いだされ、メシカの社会生活の一端を垣間見ることができる。

(3)呪術的行為

危機回避のための防衛手段として、特定の行為を強いて「おこなわない」というのが禁忌の意図であるが、これとは逆に、来るべき災難を回避し、よりよ

い結果を手中に収めるために呪物などを用いて操作をおこなう能動的行為が呪術に相当する。ただし、ここで取り扱われるのは、宗教職能者によっておこなわれる儀礼的行為としての呪術ではなく、世間一般の人々によっておこなわれる非職業的な呪術的行為に限られる。『フィレンツェ文書』第五書には、そのような呪術的行為が15件収められており、題材としては妊婦、子供、商人といった特定の人間に関するもの、調理や遊戯といった特定の行為に関するものに加え、雹や地震といった自然現象に対処するための呪術的行為がみられる。ここでは事例としてメシカ人のライフ・サイクルに関わる行為（事例８）、商人の護符（事例９）、乳歯や爪といった身近な老廃物の処理法（事例10）をあげておく。

【事例８】
新生児の臍の緒を、男児の場合は戦場に、女児の場合は竈のそばに埋める。こうしておくと成長後、男児は戦術に長け、女児は家事に巧みになる。ちなみにメシカ社会においては男性の最重要な職務として戦争が、女性の職務としては炊事、掃除、機織りなどの家事が義務づけられていた。（補・九）

【事例９】
商人は猿の掌を身につけておくと商品が飛ぶように売れる。これは猿が貪欲な動物とされているからである。（補・二〇）

【事例10】
乳歯が抜けると鼠の穴に投げ込んでやる。これをしないと永久歯が生えてこない。また、爪を切ると水の中に捨てる。こうすると爪が大好物なカワウソが丈夫な爪を生やしてくれることになる。（補・二九）

（４）怪異現象
上述のように『フィレンツェ文書』第五書本編では、とくに夜間に遭遇するとされる超自然的存在に関する俗信が収録されている。サアグンの編集方針では、これらはいずれも予兆のカテゴリーとして取り扱われているが、対象物が超自然的存在であるということから、本稿では予兆とは別に怪異現象として分類することにした。ここでは６件の情報がとり上げられており、胸が扉のように開閉する首のない妖怪（本・三）、巨人（本・一一）、うめき声をあげる脚と頭

のない妖怪(本・一二)、毛髪が腰まである矮女、髑髏、埋葬用の布を巻いた死人(以上3件は本・一三)といった超自然的存在が登場する。このうち、矮女と髑髏以外はすべて闇をつかさどる創造神テスカトリポカ(Tezcatlipoca)の幻影であるとされ、これらに遭遇すると、無知や臆病な者は恐れをなして逃げ帰り、凶兆に恐れおののくことになるが、逆に勇敢な者はこれらを捕縛し、マゲイ(龍舌欄)の棘を要求する。マゲイの棘はメシカの儀礼行為のなかでも重要な放血の自己犠牲に用いられる祭具でもあり、これにより繁栄の運気を手に入れることになる。

以上、『フィレンツェ文書』第五書の本編および補遺に収録されたメシカの俗信を若干の事例をまじえながら分類をおこなってきた。しかしながら、サアグン自身も言及しているように[10]、この記録は必ずしも網羅的なものではないことから、これに計量的な分析を加え、メシカの俗信を総体的に論ずることは適当ではない。そこで、次章ではメシカ人の身体観にみられるトナリ(tonalli)とよばれる概念に着目し、俗信をつうじたメシカの呪術的思考の抽出をこころみる。

3．トナリ(tonalli)をめぐる断章

(1)生命の活力源

『フィレンツェ文書』第五書には、つぎのような禁忌が見いだされる。

> 歩いて行く先に子供が寝そべっているとき、この子供を跨ぎ越すと、その人は「なぜこの子を跨ぐのだ」と諫められる。この行為により子供はもはや成長しなくなり、大きくならないとされている。この子供を直し、ふりかかる災厄を防いでやるには、再び、今度は反対側からこの子供をまたぎ越してやる。そうすればこの子供は救われる。
> (補・五)[11]

ここでは、跨ぎ越す行為によって子供の成長が阻害されることが明らかにされているが、その根拠は明らかにされていない。しかしながらサアグンはこれをスペイン語に翻訳する際、「もはや成長しなくなる(ic ayocmo manaz in

piltontli＝por esto el niño ya no crecerá)」という部分を、"que le quitaba la virtud de crecer"[12]と意訳しており、子供を跨ぎ越すことは、成長するための「活力」を奪うからであると解釈している。

メシカ人の身体観によると、人間には生命の源となる活力が宿っているとされ、この活力はナワトル語で「トナリ(tonalli)」と呼ばれていた。トナリは熱を放射または照射するという意味をあらわす動詞「トナ(tona)」の派生語（名詞）で、太陽熱、乾季（夏）、日中、日をあらわす占暦のシンボル、出生日によって定められる人間の運命といった事柄とも関係づけられる[13]。

トナリは通常、頭部に宿っていると考えられていた。

> 子供がまだ赤ん坊で、寝かされているときに、[近くで]ものを食べたり飲んだりする際には[その少量を赤ん坊の]額に付けてやる。そうするとしゃっくりをしなくなり、飲食しているものを欲しがらなくなる。(補・三一)

生命の活力であるトナリは成長をつかさどる。この呪術的行為はしゃっくりという生理的現象を手がかりとして、乳児の頭のなかに宿るトナリの旺盛な食欲を抑制するためにおこなわれる。

子供のトナリはまだ脆弱で、突発的な衝撃により抜け出てしまう恐れがあるとされる。そこで地震が起きた際には、つぎのような呪術的行為がなされる。

> 地震が起きたときには、子供が早く成長し、早く大人になるように、すぐさま子供の首のところをつかんでやる。もし速やかに首をつかんでやらなければ、子供はうまく成長できないといわれている。「首をつかんでやらなければ、地震が子供を連れ去ってしまう」というのである。また、子供の顔に水がかけられる。(補・一二)

子供の首をつかむ(qujnquechaana in jnpilhoan＝toman por el cuello a sus niños)という行為について、サアグンはスペイン語訳では、"tomaban a sus niños con ambas manos, por cabe las sienes,y los levantaban en alto"[14]としており、具体的には子供のこめかみのところをつかみ、頭部を持ち上げてやるという所作であることを示している。この所作はまた、太陽暦に基づいて執り行われる年次儀礼のなかで、子供の成長を願う目的でおこなわれており、

頭中に宿るトナリの強化をはかるためのものであるとすることができる[15]。ここでは地震の衝撃によりトナリが抜け出てしまう危機を回避するための行為であると解釈することができよう。なお、子供の顔に水をかけるという行為もまたトナリを強化する目的で、通過儀礼や治療儀礼のなかに見いだされる[16]。

(2) 双子のトナリ

ところで、誕生してくる子供のなかでも、双子を特殊な存在と位置づける社会は数多くみられる。ターナー(Victor W. Turner)はアフリカ各地の部族社会における事例をもとに双子の出産を女性の生産力の過剰にもとづく異常な現象として捉え、「双子は、肉体的には二つであるものが構造的には単一であり、神秘的にはひとつであるものが経験的にはふたつであるというパラドックスを提示する」[17]と指摘している。メシカ社会においても双子は特異な存在として、ひとつのトナリをふたつの肉体で分かち合わねばならないとされていた。そこで

> テマスカリ(temazcalli)とは入浴する場所のことで、たいへん熱いのだが、そこに双子がやってくると、[熱を]弱らせてしまい、テマスカリがどれだけ熱くても熱を失わせてしまう。これはかれらが入り口のところへ立っただけでも起こるが、他の人たちとともに入浴している場合はなおさらである。(補・三六)

前述のように、トナリは熱と関係づけられており、生命を維持するための熱のエネルギーであると考えられる。ひとつのトナリを分かち合わなければならない双子はテマスカリとよばれる蒸し風呂の熱を吸収してしまうのである。

同様のことは、タマルの調理をめぐる禁忌のなかでも見ることができる。

> 双子はまたタマルを蒸しているところへ入ってはならない。というのは、もし入ってきたならばタマルと鍋に呪いがかかると言われているからである。たとえ一日中蒸し続けたとしてもタマルは半生のままになってしまう。これを避けるにはつぎのようにする。もし[蒸している最中に]入ってきたときには双子に火をくべさせてやる。あるいは双子のいる前でタマルを蒸し始める場合には、タマルをひとつ双子の手で鍋に入れさせてやる。こうするとタマルは被害を蒙らない。(同上)

ここでは、熱を奪い取ってしまう双子のトナリを鎮めるためには、双子を火に直接関与させる感染呪術的な解決法と、双子とタマルを同一視し、ともに熱を受けるようにしてやる類感呪術的な解決法が与えられている。

慢性的なトナリ不足の状態にある双子はまた、さらなる禁忌を課せられることになる。

> [双子は]ウサギの毛の染め物をしているところへ入ってきてはならないとされている。もし入ってきたならば、呪いがかかり、とくに赤色の場合は色が飛んでしまい、うまく仕上がらずにまだらに染まってしまうと言われる。これを避けるには双子に染料をなめさせてやる。そうするとウサギの毛は被害を蒙らない。(同上)

熱に由来するトナリのエネルギーは、太陽をあらわす赤色で表現される[18]。メシカ社会において、ウサギの毛は染織のなかでも装飾用の高級素材として用いられていたが、双子のトナリは、熱をあらわす赤色までも奪い取ってしまうのである。

(3) 呪物としての灰

生命を維持するための熱を貪欲に吸収しようとするトナリに対し、それが周囲に及ぼす危険を回避するとともに効果的に熱を与えてやる方法は、これまでいくつか示されてきたが、さらには、熱を与え、保温するための呪物として竈の灰が用いられることがある。

> 雹が降ると、畑を持っている者は、それがトウガラシであれ、フリホル豆であれ、チアであれ、竈の灰を庭に撒いてやる。そうすれば畑には雹が降らず、降った雹も消え失せてしまうと言われている。(補・二六)

メソアメリカにおいては、一年は乾季(11月～5月)と雨季(6月～10月)に分かれるが、標高2000メートルに達するメキシコ中央高原では夏場に当たる雨季に雹が降ることがあり、農作物に対する被害は深刻な問題となる。ここでは、雹害に対処するための呪術的行為のなかで、竈の灰が熱を与えるものとして登場する。

このような竈の灰の利用は、熱エネルギーとしてのトナリをめぐる呪術的行為にもみられる。子供のトナリが脆弱で不安定であることはすでに指摘しておいたが、トナリは関節から抜け出してしまう傾向があるという[19]。

> もし出産したばかりの女性に挨拶にゆくときに、自分の子供をつれてゆく場合、[相手の家に着くと]すみやかに子供のこめかみ、むこうずね、関節のすべてにもれなく灰を塗ってやる。灰を塗るには竈の前に座っておこなう。[例えば]子供のひざに灰を塗らなかった場合、子供は歩くたびにひざ、手首、くるぶし、ひたいがきしむようになると言われている。(補・一一)

前述のように、産まれたばかりの赤ん坊のトナリは貪欲である。そこに同席することになる子供はトナリ(熱)を吸収されるという危機を回避するために、あらかじめ灰の熱によって防御することが求められるのである。さらに、胎児を宿している妊婦についても灰が効果的な呪物として用いられる。

> [妊婦は]夜、ひとりで出歩いてはならない。子供が泣き虫になるとされる。こうしておけば妊婦に災いがふりかからない。小石や竈の灰やニガヨモギを腹部につけておくのである。(補・一九)

さらには、

> 妊婦が夜間に外出する際には腹部に灰を少々つけておく。これはお腹の中にいる子供の助けになると言われている。こうしておくと[幻に]出会わずにすみ、子供が守られるのである。(補・一〇)

前者では小石やニガヨモギといった呪物も加えられており、後者では、胎児に危害を及ぼす対象として超自然的存在が示されているなど、不明瞭な点も見受けられるが、いずれの場合も胎児のトナリを奪われないようにするために、保温のための竈の灰を腹部に塗る行為が示されている。

(4) 事物に宿るトナリ

道具や食物のなかに人格をみとめ、あたかも人間と同じように取り扱う行為

は、日常生活のあらゆる側面で目にすることができる。メシカ社会における事例を俗信のなかから拾い出してみると

> マント商人は、どこに行っても商品が売れないとき、つまり、だれも彼からマントやスカートや上着を買おうとしないときには、商品が売れるように「トウガラシを食べさせる」という。これは、家に帰ってから[…]二鞘か三鞘のトウガラシを[商品の中に]入れておくというものである。こうすると商品は売れるようになると言われている。(補・二〇)

> もしトウモロコシの粒が床に散らばっているところに居合わせたならば、「かわいそうな食べ物よ、泣いているではないか。」といってすぐに拾い集める。「もし拾ってやらなければ[トウモロコシは]我らの主に私たちのことをこう言って訴える。『我らの主よ、この人は私が床に落ちていても拾い上げなかった。どうか罰してやって下さい。』すると飢饉がやってくることになる。」というのである。(補・四)

前者はトウガラシを用いた商人の呪術的行為、後者は主食であるトウモロコシが床に落ちていた場合の行動規制(拾わないことに対する禁忌)であるが、ここではいずれも対象物は擬人化して捉えられている。そうすると、このように擬人化された事物にもトナリは宿っていると考えられていたのであろうか。

> [地震が起こると]自分の家、柱、納屋、鍋、家財道具などのすべてに水を吹きかける。水を吹きかけるのを忘れた物は地震が運び去ってしまうと言われている。(補・一二)

地震の際に子供のトナリを防御する呪術的行為についてはすでに述べたが、これは家屋や家財道具に対してもおこなわれる。水を吹きかけるという行為は、メシカ人が明らかに家屋や家財道具にもトナリの存在をみとめていたことの証左となろう。

トナリを強化する方法として、息を吹きかける行為もまた見られる。これは、子供が誕生する際にはトナリが創造神により「吹き込まれる」とされることに因んでいる[20]。

[トウモロコシを]鍋で煮るとき、あらかじめトウモロコシの粒に息を吹きかけてやる。これはトウモロコシが怖気づかないようにし、熱に対して恐怖を抱かないようにするためだと言われている。このようにするとトウモロコシは落ち着くのだとされる。(補・四)

現代のメキシコにおいても、夜になってトウモロコシの粒を軸からはずすと、トウモロコシの粒はもう眠っているので栄養が損なわれるとする俗信が残されているが[21]、ここでは、擬人化されたトウモロコシの粒にトナリを注入することで滋養を高め、調理が上手にできることが意図されていると考えられる。

メシカの身体宇宙論においてトナリの概念は重要な位置を占めている。それはかれらの伝統信仰を構成する教義のなかに体系的に組み込まれ、宗教儀礼の場で繰り返し制度的に表明されていた。しかしながら、他方、そのような公式の場とは対照的に、日常生活のレベルでもトナリの概念は、俗信という形式をとって到るところに表出し、かれらの宗教観念を再強化するとともに、日常行動につきまとう不安を取り除く機能を果たしていたのである。

おわりに

以上、フランシスコ会士ベルナルディーノ・デ・サアグンによる『フィレンツェ文書』第五書をもとに、メシカの俗信の一端を紹介するとともに、トナリという概念を手がかりとしてそれらの俗信に見られるメシカ人の呪術的思考を考察した。

はじめにも指摘しておいたが、人間社会における知の形式として、宗教的・呪術的思考と科学的思考は対立することなく共存することができる。実際、メシカ社会では天体観測や建築、農耕などの技術水準はけっして低いものではなかった。たとえば、主食であるトウモロコシ栽培において、チナンパ(chinampa)とよばれる古来の浮島農法は、現在の農法に比べて 1.5倍以上の生産性を有しているという[22]。したがって、メシカ社会においても俗信は「古代の未開社会」における前科学的な思考形式として位置づけられるのではなく、科学的思考とは方法論を異にする知識形態として捉えられるべきであることを

再び強調しておく。

前述のように、タンバイアが融即と因果として再解釈したこれらの思考形式はまた、人間のもつ表現形式の連続体の両端として相互補完的な関係にあるとされる。そこでこの図式に、いずれも制度的に体系づけられた知の形式という観点から、一方に「俗(ケ)」の文脈での実践概念としての科学を、他方に「聖(ハレ)」の文脈における操作概念としての宗教を想定した場合、俗信はどのように位置づけられるのであろうか。レヴィ＝ストロース(Claude Lévi-Strauss)は、呪術と科学を認識の二様式として併置する立場から、前者を潜在的有用性によって定義づけられた既存の資材を駆使する「ブリコラージュ(bricolage：器用仕事)」と特徴づけている[23)]。これまで検討してきたように、言語・生物・物理といった科学的観察、あるいは身体観、世界観にもとづく宗教的シンボルを素材とするメシカの俗信は、まさに科学と宗教の両極を取り結ぶブリコラージュ的な知の手法とすることができよう。

なお、12書からなる『フィレンツェ文書』のなかには、今回とりあげた第五書以外にもさまざまな俗信が散在している。また、サアグンと同時代の他のクロニスタの記録にも俗信に関する情報は少なからず見ることができる。今後は、このような情報の収集に加え、サアグン以後の植民地時代における俗信の実態をも検討し、先住民の文化変容下における呪術的思考の変化を分析してゆくことも課題としてゆきたい。

【注】

(1)Tambiah, 1996, p.182

(2)ibid., pp.179, 181

(3)ibid., pp.177-178

(4)この『マドリード文書』は前半部にあたる『マドリード王宮文書(Códice Matritense del Real Palacio)』とよばれる文書ならびに後半部にあたる『マドリード王立歴史アカデミー文書(Códice Matritense de la Real Academia de la Historia)』とよばれるふたつの文書により構成される。

(5)この『初期覚書』には、さらに夢占いに関する10件の情報が含まれているが、『マドリード文書』以降の資料では削除されている。なお、『初期覚書』の俗信に関する部分はGaribay, 1944-1947においてスペイン語に訳出

されている。

(6)Sahagún, 1992, p. 133

(7)以下に示す事例は、紙幅の関係からオリジナル・テクストの翻訳ではなくCódice Florentino, 1950-1963、López Austin, 1969、Sahagún, 1956をもとにまとめ直したものである。なお、オリジナル・テクストにおける出処を明らかにするために、本編は「本」、補遺は「補」の略号と章をあらわす数字を付すことにする。

(8)メタテとはトウモロコシを挽くための石臼を指す。

(9)タマルとはトウモロコシの粉をこねたものをトウモロコシの皮や葉で包んで蒸した料理で、現在メキシコでも伝統料理として広く用いられている。

(10)Sahagún, op. cit, p. 39

(11)ここで示す事例はLópez Austin, op. cit. を底本とし、Códice Florentino, op. cit. およびSahagún, op. cit. を適宜参照した拙訳である。ここでもオリジナル・テクストにおける出典箇所を前章同様の形式で示しておく。

(12)Sahagún, op. cit., p. 31

(13)López Austin, 1980, p. 223

(14)Sahagún, op. cit., p. 32

(15)メシカ社会においては、一ヶ月を20日とし、これに5日間の「空白の日(nemontemi)」を加えた365日の太陽暦にもとづき、年間を通じて各月ごとに国家的規模の祭祀が執りおこなわれていた。ここでとりあげたのはそのなかのイスカリ(Izcalli)と呼ばれる祭祀でおこなわれていたものである。

(16)López Austin, op. cit, pp. 232-233, 247-251

(17)Turner, 1976, p. 65. さらにターナーは、このような双子のパラドックスを解決する方法として、双子の片方、あるいは両方を殺害する、社会構造から分離させ、聖化する、出生、結婚、死といった局面において特殊な儀礼を執行するなど、アフリカ各地のの事例を示している。メシカ社会における双子ついて、サアグンの同僚であったフランシスコ会士メンディエタ(Gerónimo de Mendieta)は、双子は創世神話のなかで双子の神を産んだとされる地母神シウアコアトル(Cihuacoatl：女・蛇)に因み、蛇を意味する「コアトル(coatl：複数形はcocoa)」と同音異義語であらわされることから、双子は父親もしくは母親を「食べてしまう」、すなわち死に至らしめるため、双子が誕生すると、そのいずれかを抹殺しなければならないと考えられていたと報告している。Mendieta, 1980, p. 111 参照

(18)González, 1976, p. 13

(19)López Austin, op. cit., p. 235

(20)ibid., pp. 226-230

(21)ibid., p. 251

(22)Malo de Oi, 1984, p. 43

(23)Lévi-Strauss, 1976, pp. 18-28

【参考書目】

Códice Florentino

1950 Florentine Codex. General History of the things of New Spain

-63 Charles E. Dibble and Arthur J. O. Anderson (trad.), Utah UP.

Garibay K., Angel María

1944 "Paralipómenos de Sahagún",

-47 en *Tlalocan* 1, pp. 307-313, 2, pp. 167-74, 235-54

González, Yolotl T.

1976 "El concepto del tona en el México antiguo"
en *Boletín INAH* 19, pp. 13-16, INAH

Lévi-Strauss, Claude (クロード・レヴィ＝ストロース)

1976 『野生の思考』大橋保夫 訳 みすず書房

López Austin, Alfredo

1969 *Augurios y Abusiones*, UNAM

1989 *Cuerpo humano e ideología*, UNAM

Malo de Oi, Blanca A. (大井ブランカ)

1984 「ショチミルコのチナンパ農耕社会 ―メキシコ盆地南部の伝統的農耕社会の展望―」大井邦明 訳 『京都民俗』1, pp. 31-48

Mendieta, Gerónimo de

1980 *Historia eclesiástica indiana*, Porrúa

Sahagún, Bernardino de

1956 *Historia general de las cosas de la Nueva España*, Porrúa

1992 『神々とのたたかいⅠ』篠原愛人、染田秀藤 訳 岩波書店

Tambiah, Stanley J. (スタンレー・J・タンバイア)

1996 『呪術・科学・宗教―人類学における「普遍」と「相対」―』
多和田裕司 訳 思文閣出版
Turner, Victor W. (ヴィクター・ターナー)
1976 『儀礼の過程』富倉光雄 訳 思索社

スペイン語繋辞動詞と状態動詞に関する一考察

－　"甲ハ、乙ダ"の表現について　－

米田　富彦

0. はじめに

スペイン語においては、「甲ハ、乙ダ」という、「甲=乙」ということを表す、いわゆる繋辞の機能を持った動詞を用いる表現を行う場合、主語「甲」と述語「乙」との相関性を基本にして、特定の弁別要素に基づいた二項対立、即ち、二種類の不規則動詞である、ser 動詞とestar 動詞を以て表現を行う。一般的な説明では、「甲ハ、乙ダ」という「命題」において、その「甲」と「乙」の間に見られる「属性」の表現、即ち、「甲=乙」という「同一・等質」を示す意味内容を表現する際、甲が乙に対して：

①その属性において不変かつ固定的な事柄を述べる場合⇨ ser動詞

ex. María es guapa.(マリアは、見栄えがいい。⇨ 見栄えの良いの状態は変わることがないことである。)

Margarita es alegre. (マルガリータは、陽気だ。⇨ ココロの変わらない。性格・機能である。)

②その属性において属性の変化を前提条件とした物事を述べ場合⇨ estar動詞

ex. María está guapa.(マリアは、今は、見栄えがいい。⇨ 今の状態はそうだが、何時もはそうでない。)

Margarita está alegre.(マルガリータは、嬉しい。⇨ 今、うれしがっているだけのこと)

という二種類の動詞が存在して各々の場合に区別して使用されている。これらの動詞の使用が外国人の学習には些か困難なところでもある。

本稿では、特に日常表現で最も頻繁であり、使用頻度も高い「甲ハ、乙ダ」という「命題」において、主語の「属性」を述べる表現、即ち、「甲=乙」（英文法では、主語が主格補語をとるＳＶＣの文型：即ち、甲と乙とが「同格」になる、即ち、「同一内容」を意味するもの。）という論理を表現する際、話者が「主語=甲」と「述語=乙」の間における相関性において、どのような意味内容を基準としてser 動詞とestar 動詞の使用が区別

されているのかを概観した。特に、スペイン語においては、ser 動詞とestar 動詞は、主語と述語との相関性において、同じ命題を基本として、主語と述語の間の「属性」が同一なものを示している場合、それらの両者を繋ぐというところから、両者は、「繋辞動詞」であるとまとめて捉えられがちである。しかし、実際は、両動詞共に単純に主語と述語を繋ぐというよりは、主語と述語との相関性を的確に捉えながら意味的には、特定の弁別要素に基づいた二項対立を基準として各々の表現を選択していると考えられよう。

本テーマは、今まで幾多となく議論せられてきたところであるので、意見は出尽くしている故、説明の途上、いささか論理の展開において乱暴と思われる箇所もあろうが、筆者なりにまとめさせていただいたものである。

1．繋辞動詞と状態動詞の概念について

ここでは、構文上、「甲=乙」の論理を展開させる両者であるが、その使用にあたり、弁別の基本的な概念をまず明確にしておく必要がある。ここでは、それぞれ繋辞動詞とは何か？状態動詞とは何か？について、繋辞と状態の表現のどこがどのように異なるのかということを述べる。

1－1．繋辞動詞について

いわゆる繋辞動詞とは、個々に存在する二つ以上の"物事"（もの：具体的・物体的な存在。こと：抽象的・概念的な存在）があり、一方が他方に対し、その属性において「同一」のものであるということを述べる際に使用される動詞である。

「同一」という概念を述べるにあたり、主語として表現したい内容を"甲"として、それと「同一」を示す内容を述語として表現したい内容の"乙"とし、両者を「繋辞動詞」（または、「つなぎ動詞」）という種類の動詞で以て等格に「つないで」表現する。この「つなぐ」ことを表現する動詞が使用される場合に、通常、何が基準になるのかということであるが、「主語=甲」と「述語=乙」との関係における「属性」が必然的概念を意味しているということである。

この動詞の場合には、主語は、特定の物質・物体・概念・観念等の"物事"=実質・実体的内容を示すものである。故に、名詞（主格に置かれる）が通常であり、述語においては、主語の「属性」が不変化であり、甲が乙そのままであることを表すのものである。故に、繋辞動詞においては、述語にはまず、同じ品詞である名詞が置かれ、次には主語の品

質等の付加的な意味を加える形容詞が置かれる。

ex. ア. Yo soy yo y mis circunstancias.(Ortega y Gasset)

（私は、私であり、私の環境である。）

イ. ¿Qué es poesía? Poesía... eres tú. (Bécquer)

（詩とはなに? 詩とは、君なのだ。※ここでは、強調して"君とは、詩なのだ"も可）

次に、形容詞の場合であるが、むしろ意味的には名詞に近い内容となる。

ex. ウ. Isabel es española.（イサベルは、スペイン人です。）

エ. Juan es tonto. （フアンは、馬鹿です。）

また、実際上のコミニュケーションにおける構文上の成立から考えると、主語の「属性」を表現するので、話者においては、主語とは全く関係の無い内容を述語に述べることはなく、何らかの意味論的な相関関係を意図した表現が行われる。故に、主語と述語との結びつきの度合いは強いと言えよう。

さらに、不変的かつ固定的な意味内容、即ち、変化を前提とする「状態」ではないことを述べるところから、時間軸の中では、「時」を示す「時制」は問われるが、「間」を問うアスペクトの概念はさほど指摘されることはない。しかし、固定的・不変化というところから、述語「乙」は、その関連性において到達性・完成性を持った物事の内容を示すのであるから、厳密に観察すれば、アスペクトの概念が皆無であるとは考えられにくいと思われる

1－2. 状態動詞について

繋辞動詞が、主語と述語、即ち、甲と乙との「属性」に基づき、「同一」をテーマとするのに対して、状態動詞は、同じように主語と述語の「属性」に基づく「同一」をテーマとしながらも「状態」の語が示す通り、時間軸の中で、時間の経過と共に生起するであろう主語の「変化」を最初から予想し、かつ、包合した意味を持っており、流動的・可変的な意味内容を表現するものである。即ち、「状態」とは変化を前提としているテンポラルな一定期間（=間）の有り様を述べているものであるからである。

よって、状態動詞とは、即ち、日本語の「甲ハ、乙ダ」という表現でも、英語の"A is B"という表現でも、その意味的な内容は：

①主語「甲」の「属性」の「存在」が時間軸の中において「乙」という「状態」にその時にあることが分かっている。

②その時にあるが故に、そこに「所在する」ということが分かっていて表現するのだから、繋辞動詞と比較すると、同じ構文ではあるが、時間的に、特に時間上の一定間隔を意識している。そして、一定間隔とは、事象の開始と到達等をあらわすものである。

③時間まかせであるが故に、実体詞と実体詞が結びついて繋辞動詞のように「不変の同一」や「固定的な同一」を述べることはない。故に、主語と述語の結びつきの度合いはゆるいと言えよう。

④そして、述語に来る品詞は、その一定間隔における状態を表すのであるから、名詞は置かれず、付加的な意味を述べる形容詞が普通である。

ex. ×María está estudiante. マリアは、学生の状態にあります。⇨それでは、しばらくしたら看護婦でもなるのか?

⑤状態動詞においては、その時間的な要素を持ち、「間」を問う内容であるので、動詞のカテゴリーであるアスペクトの概念が指摘されよう。

また、状態動詞は:

ア. 表現する内容が時間の経過と共に変化するという気持ちがあること。

イ. 即ち、「疑惑・否定・不確実・推量・予想」等の気持ちも述べる。

等を表現すると考えられる。故にある程度のニュアンスにおいて、法(モード)の概念の存在も指摘されよう。

2. 「甲=乙」の表現方法について

ここでは、「甲=乙」という命題に関して、その「属性」を述べる表現における特徴的な様式として:

①繋辞機能=絶対的な存在を表す⇨「〜デアル+〜イル・アル」が同一動詞で機能するような表現をとる様式。

(ラテン語、ゲルマン語〔英語やドイツ語〕の表現方法)

②特定の弁別要素をもった二項対立(不変/可変)が基準と考えられ、各々の表現にお

いて動詞を使い分ける様式。

（フランス語を除くスペイン語等の、現代ロマンス諸語に見られる表現方法）

③繋辞・状態を表す動詞を用いず、主格+主格の式で以て繋辞の〜ダや主格+副詞・副詞句の式で以て状態のアル・イルの表現をとる様式。

（これは、現代ロシア語に見られる表現方法。他のスラブ語には繋辞・状態を表す動詞は表現されている〔⇨ポーランド語の" byts' " 等〕。しかし、現在時制のみでの通常用法であり、過去時制と未来時制での表現や現在時制でも強調や定義を行う場合には使用されている。）

というような以上の三つの表現様式が指摘できるが、次に、その各々の様式について概観しておきたい。

2－1．単一方式（ラテン語、ゲルマン語等）

「甲=乙」という命題において、そもそも、「属性」を表して、主語と述語との同一性を述べるのであるから、ここから絶対的な意味での存在を表すこととなる。(注1)

最も、比較として引き合いに出される言語としては、英語があげられようが、英語の場合には、be動詞（IE. bheu-, bhu-: "有る、存在する" より）が繋辞動詞も状態動詞も兼ねている。「甲=乙」を述べる際には、動詞が一つなので、「〜デアル」のか「イル・アル」を述べるのか、ややこしいところでもある。そして、be動詞の中には、繋辞動詞の役割と状態動詞の役割が併存しているので、何方に意味をとるのかということは、文脈によって判断しなければならない。

このように、繋辞動詞も状態動詞も一つの言語は、ロマンス諸語の源であるラテン語のesse、ゲルマン語においては、英語のbe、独語のsein等があるが、現代ロシア語には、このような種類の動詞は、使用されず、主語と述語を並列させて表現している。

また、同じロマンス語の中で、フランス語においては、元々、"esse"を継承した繋辞動詞であった"estre" と状態動詞であった"ester" が分化して存在していた。しかし、中世（11世紀）には、ester は、estre と混用されて一つの動詞体系の内に次第に組み込まれて行き、両者は、遂に現在のêtreとなり一本化の経緯を辿ったのである。(注2)

2－2．二項立方式（ロマンス諸語）

本来、ラテン語において、"esse"で表現されていた繋辞・状態の表現は、ロマンス諸語の段階になると、他の表現様式によるようになった。そもそもロマンス諸語の中で、イタリア語(essere/stare)、スペイン語(ser/estar)、ポルトガル語(ser/estar)等、に共通した表現様式であると指摘される。「甲=乙」の命題を述べる際、「甲=乙」の関係において、固定的/状態的あるいは、不変/可変という二項対立的な意味内容を基準として、次のパターンに分類できよう:

①"esse"をそのまま繋辞動詞で継承して、そこに状態を表現する機能の"stare"を加えた対立を持つもの。

⇨イタリア語のパターン。

②"esse"の繋辞を基本として、その一部を継承。機能面では"sedere"を導入して動詞体系に組み込む。そこに状態の"stare"を加えた対立を持つもの。

⇨イベロ・ロマンス語のパターン。(スペイン語やポルトガル語で、ser 動詞〔繋辞動詞=～デアル〕とestar 動詞〔状態動詞=～ノ状態ニ居ル〕を使い分ける特徴が見られるもの。)

③上記①のように繋辞動詞を"esse"、状態を"stare"から導入しておいて、後に混交して一本化されたもの。

⇨フランス語のパターン。

スペイン語では、"esse"の繋辞機能を"ser"が、状態叙述機能を"estar"がそれぞれ担うようになった。即ち、"ser/estar"に見られるように固定的/状態的あるいは不変/可変という弁別要素に基づいた二項対立的な表現方法を取る様式へと移行してしまったということである。

ただ一つ興味深いケースが見られるが、それは、フランス語における場合であり、繋辞/状態を表現する動詞の用法では、ラテン語より分化の段階で、一度は、他のロマンス諸語と同じように二分化(être/ester)しながらも、中世以降は一本化(être)されてしまったのであった。(この原因には、フランスとフランス語を形成したゲルマン人の言葉であるゲルマン語、即ち、フランス語の影響であると考えられている。)

この二項対立による使い分けは、主に「主語=甲」が「述語=乙」に対して、その相関性において時間と間隔の概念を持っていることが指摘されよう。このようなところから、

動詞カテゴリーの概念を援用して、説明の展開に供し、ここに整理してみると：

①行為の「時」を示す時間軸上の指呼機能である時制は、単に事象の行われた時を指し示して表現するのみで、原則的に「時制」の概念で以て考えてみれば；

イ．"甲ハ、乙デアル時"　(現在)

ロ．"甲ハ、乙デアッタ時"　(過去)

ハ、"甲ハ、乙デアロウ時"　(未来)

といったように、行為や事象の生起・発生・終了等の「何時？」が問題となるのであって、要するに「時」を問うているのである。

②繋辞と状態というものは、繋辞は、時間的に不変化の内容を意味し、状態は、一定の時間中での間隔を問題とする意味内容を表現しているのであるから、繋辞も状態も「時」を問うというよりは、むしろ、「間」を問うているのであり、「間」とは始発・経過・反復・終了等の様相を表すものであるので、それの基本概念である完了／不完了といったことを問題とするアスペクトの概念の方がより重要性を持っている。

この場合には、そのまま動詞カテゴリーのアスペクトをそのまま適用して考えるのではなく、「間」を問う「アスペクト性」というかアスペクトの弁別特性に基づく二項対立的な概念を援用すれば理解されやすいと思われる。特に、ser 動詞では、甲が乙における完成度・完遂度・到達度等の意味の度合いが高く、それで「同一性」を述べようとしている。反対に、estar 動詞では、それらの度合いが低い場合であり、甲が乙における一定間隔内の持続・継続といったような「間」を述べて、「変化」を述べているものである。これらの概念が、いわゆる繋辞動詞として一括りにされてまとめられているser 動詞とestar 動詞の基本である。印欧語の動詞が有する基本的な諸カテゴリーから概観すれば、何となく前者がアオリスト的な感覚を受け、後者がパーフェクト的な感覚を受けるところでもある。

2－3．繋辞・状態動詞の無表現の場合（現代ロシア語の場合）

以上のような二つの表現方法とは異なるものが存在する。同じ印欧諸語においても、スラブ語所属する現代ロシア語においては、一般的に「甲＝乙」を表す繋辞動詞と状態動詞に相当する動詞には、byt'があるが、通常、現在時制において表現には用いられないのが

普通である。（但し、同じスラブ語でもポーランド語等では、同源の"byts' "という繋辞も状態も表す動詞があって、省略されずにきちんと表現する。ex. Ja jestem Tadeusz Pikus. ＝私は、タデウシュ・ピクスです。）

ex.①Eto moja kniga.(eto:este, moja:mi, kniga:libro→Este es mi libro.)
②Ja doma. (ja:yo, doma: en casa →Estoy en casa.)
（二例中、ser にもestar にも相当する動詞は表現されていない。）

ロシア語では、①の例に見られるように現在時制においては、「甲=乙」は、甲にも乙にも主格を並列させて表現している。（このような表現方式、即ち、主語と述語の関係に明確性のある場合、並列で以て繋辞の意味を表現することは、スペイン語においても見られる現象である[ex. Yo, el rey.] が、一般的ではない。また、スラブ語には、否定の場合には、述語に他の格〔属格あるいは生格と呼ばれる〕を用いたりする特徴がある。）また、②の例に見られるようにイル・アルを表現するには、主語（主格）の次の位置に副詞や副詞句を持ってきて表現を行う。(注3)

この繋辞動詞と状態動詞に相当するbyt'動詞にその現在時制の"jest'" （本来は、byt'の直接去現在三人称単数形。cf. ラテン語est,スペイン語es, 英語is, 独語ist,etc)が使用される場合は、通常、「学術的定義」で使用されたり，アル・イルという意味では特にその存在を強調する場合に使用されるのみで、現代のロシア語では一般的な表現とは言えないところがある。

また、ロシア語では、「甲=乙」を表す場合に:

①過去時制においては過去形の"byl" を用いる(ロシア語の過去時制=過去形の人称には、性・数による語尾母音の付加があるので、男性単数の形態が"byl" 、女性単数が "bya" 、中性単数が "bylo" 、複数〔性は共通〕が "byli"となっている。そして、この過去時制とは、本来は過去分詞であり、ロシア語の過去時制の活用は、活用自体が廃れてしまい、その代わりに過去分詞を使用するようになったからである）。

②未来時制においては未来形"budet" を用いる(こちらは人称・数できちんと六通りの活用がある）。

以上のそれぞれの非現在時制（即ち、過去時制と未来時制）においては、主格+動詞+造格（instrumental: 具格のことである）の構造を持つ。

ex. ①Moj brat byl vrachom.（私の兄弟は医者だった。）
(moj:mi, brat:hermano, byl:fue, vrachom:médico[instrumental])
②On budet uchitelem.（彼は、先生になるだろう。）
(on:él, budet:será, uchitelem:maestro[instrumental])

また、繋辞動詞や状態動詞は、二次的な用法として助動詞として使用される場合があるが、英語では、既に助動詞として使用されているのに対して、ロシア語では、byt'が未来形において、一般動詞を従えた迂言法で以て未来時制を表現する意外は、助動詞的な役割は果たしていない。一般的な現象として、繋辞動詞や状態動詞が使用されない言語には、助動詞もあまり使用されることはないというところがあるといわれているが、ここにその一例が見られるのである。

3．ロマンス語の繋辞・状態動詞の形成について

ここでは、ロマンス諸語に属するスペイン語における歴史的な背景を述べ、ラテン語においては、一元化されていた繋辞・状態を表す動詞("esse")の表現様式が二分化して来た流れを見て行きたい。

3－1．ロマンス諸語の全般的な現象

ラテン語の繋辞・状態を表す動詞 "esse" から、ロマンス諸語に分化して行く際の形態は、俗ラテン語の段階では、この"esse"が"-ere"型の語尾をとって "essere" となり、これが、各ロマンス諸語における元の形と考えられている。ロマンス諸語においては、本来ラテン語'esse"があったのであるが、主語と述語の関係において、固定的・不変化／状態的・可変というような関係を時間的な間隔の中に見てこれをを弁別要素として意識するようになり、即ち、「間」を問うアスペクト的な考え方を基準とした二項対立で以て表現されるようになった。特に、スペイン語とポルトガル語に代表されるイベロ・ロマンス諸語においては、"sedere/stare"（坐る／立つ）というような元々あった"esse"を基本として、各々の機能面のみを他の動詞に担わせて、ロマンス語一般に起こった現象とは異なる動

きをしている。同じロマンス語といっても、フランス語の場合やイタリア語の場合とはその性格が異なっている。(注4)

ロマンス諸語においては、ラテン語の"esse"から俗ラテン語の"essere"へと移行してそのまま自らの言語に導入して来たが、主語と述語の相関関係を表現するに際し、単一の動詞である場合には、それが、単に繋辞を表現しているのか？または状態を表現しているのか？ということが曖昧かつ抽象的な観念を強いられるところから、より具体的で明確性のある表現方法を選択していったのであった。(注5)

では、ロマンス諸語では、どのような動詞をそのような意味を強調したり補ったりといったことに使用し始めたのか？ということを次に述べることにする。

3－2．ロマンス諸語の繋辞・状態動詞のパターン

ロマンス諸語における繋辞/状態を表現する動詞において、どのような動詞を使用するようになってきたのかということについて分類してみると以下のようになる：

①"essere"について

ラテン語の"esse"より。繋辞と状態の両方の意味を担うもの。本来的にこのような動詞の意味を考えてみると、主語が述語と同一属性を有するにあたり、「～ハ、～ダ」ということは、主語も述語も存在するからこそ「～ハ、～ダ」と言えることになるのである。故に、主語と述語をつなぐということは、その両方が存在して「在る・居る」という意味でもあるので、繋辞も状態の表現も一つの動詞で処理している。

（現代フランス語の "être" のパターン。中世フランス語は、ロマンス語の現象として見られるような二つの動詞で以て繋辞/状態を表現していたが後にこの"esse"から変化した"être"に両方を統合した。）

②"sedere"について

本来の意味は、" 座する、坐る" という意味であり、ここから次のような意味が派生して来た。即ち、「ある特定のものが、そこの場所を占有する」ということは、「そこに居て動かない」ということであるので、固定的・不変化のことを表すようになった。これが主語と述語をつなぐ表現に使用され、繋辞動詞として導入されたと考えられる。

（スペイン語、ポルトガル語の"ser" のパターン。即ち、長くは坐って居らる。）

③"stare" について

英語の"stand" やドイツ語の"stehen"と同じ語源（ＩＥ　*√sta- "立つ"）であり、「立つ」という意味が原義である。これは、元々、足で立つというところから、「特定の高さを持ったものが特定の時間、特定の場所にある」ということを意味し、即ち、「あるものがある場所に居る・在る」ということになる。ここから、「存在」の意味になり、主語の継続的な有り様を述べる「状態」のことも意味するようになり、状態動詞として導入されたものと考えられる。

（こちらは、ロマンス語にはほぼ、共通して導入されている。スペイン語、ポルトガル語の"estar" 、フランス語の"ester"[後消滅] 、イタリア語の"stare" のパターン。）

これらの３種類の動詞の内、①の動詞を基本として、これの表現機能を踏襲しつつ、より明確とした形式でもって主語と述語の様態を述べようとし、特定の弁別要素を基準として二項対立で以て表現するようになった。即ち、ロマンス諸語における繋辞と状態の表現機能を強調するものとしてこれら②と③の動詞が導入されているのである。そして、これらの動詞の導入は、各ロマンス諸語において、同じ要領で一律に導入されたものではなく、各地域での場合に相違が見られるのである。

まづ、"essere"をそのまま導入したフランス語の場合には:

①フランス語の場合

フランス語における場合であるが、この俗ラテン語の形態をそのまま導入して、まづ、第二音節の母音の"-e-" が脱落してできる"-sr-"という子音の連続を避けるために語中音添加"-t-" を行ってから、"estre" という形態となり、そこから、さらに子音"-t-" の直前の"-s-" を消失した形態の"ętre"へとなり、人やものの性質を表現をする繋辞動詞の機能を担うこととなる。そして、アル・イルの表現については、より具体的に「存在・状態」をありありと述べることを重視するようになってきたので、"stare" がその状態動詞の機能を担うこととなった。元々、フランスを形成したフランク人は、ゲルマン語を使用していたので、これの影響が考えられるということであるが、"ętre/ester"両者は、１４世紀以前よりお互いの領域を交互に侵し合うことが始まり、ついに両者は混交され、"ętre" が両方の意味を担うようになり、後に、元々のラテン語や、ゲルマン語の英語やドイツ語のように一本化されてしまうこととなった。

②イタリア語の場合

イタリア語の場合においては、ラテン語の"esse"より、そして"stare" は、そのままに "stare" として使用され、"esse/stare"の対立が見られるが、イタリア語においても、他のロマンス諸語における現象と同じく一般的な繋辞と状態を表現する方法は、この固定／状態という二項対立を用いて表現している。

③スペイン語・ポルトガル語の場合

イベロ・ロマンス諸語において、「甲=乙」の「命題」を表現する動詞であったラテン語の"esse"に関しては、イベロ・ロマンス語の特徴として述べられるところであるが、この動詞を継承するにあたり、繋辞機能を、"sedere"から"ser" 、状態叙述機能を "stare" から "estar"を導き、「繋辞／状態」（"ser/estar" ）の対立がみられるようになった。同じロマンス語でもフランス語やイタリア語と比べて様態の趣が異なっている。スペイン語では、１０世紀後半に最初のスペイン語文献としての記録とされている有名な「シロス注解語集」（" Glosas Silensis " ）において、ラテン語'esse"に対する注釈には、"sedere"が記入されている。ここから、母音間の有声子音"-d-" の脱落した"seer"が１３世紀には、誕生していた。イベロ・ロマンス語であるスペイン語においては、現在、"ser" の活用体系の構造は、"esse"からそのまま引き継いで発展したものに"sedere"から新たに導入したものとが混合されており、"esse"からは、直接法の現在・完了過去・不完了過去、接続法の過去のそれぞれの形態が確認され、その他は、加えて導入したところである"sedere"から直接法の未来、可能法、接続法の現在の各形態が確認されており、これら"esse"と"sedere"との混在になっている。（スペイン語の混在現象はここまでで、同じ繋辞動詞の中で起こったものである。フランス語のような"stare" 系との混交、即ち、単一の表現様式になるようなことは、起こっていない。）(注6)

4．スペイン語における繋辞動詞と状態動詞

ここでは、スペイン語における繋辞動詞と状態動詞に関する表現について、まづ、どのような論理において生起するのかということを考えた上で、二項対立の概念を見てゆきたい。

4－1．論理について

スペイン語において、特に繋辞動詞と状態動詞が問題とされるのは、「甲」と「乙」があって、「甲」の属性と「乙」の属性が同一内容を表す際、「甲」を主格として、次に繋

辞・状態を表す動詞を活用し、その次の位置に補語である「乙」を同じく主格に置いて表現する。ここにまとめてみると：

①表現内容 ⇨ 甲 ＝ 乙：これが命題となっている。ex. 空=青

②要するに、属性の同一を述べるのであるから、主語（甲）と述語（乙）の属性が論理的に整合して一致していなければならない。即ち、述部が形容詞の場合には、名詞への「一致」と同じく、「性・数」を一致させる必要がある。

主語の性・数 ＝ 述語の性・数

③属性の同一内容を述べるにあたり”二項対立”の概念を用いる。

ex. 繋辞 ⇨ El cielo es azul. （本質的に青い）

状態 ⇨ El cielo está azul.（青い状態である）

次に、この二項対立の概念について見て行くことにする。

4－2. 二項対立について

スペイン語においては、表現する内容が「甲=乙」である場合、主語と述語の関係において、繋辞（ser）／状態（estar）という二つの動詞によって表現されるが、その基準に関しては、主語と述語の相対的な関係において、何が根拠とされているのかということを提示する必要がある。まづ：

①その関係が動かしがたい、即ち、固定的に変化しない内容であるか？
（いわゆる「必然」を根底とした関係があるのか？）

②その関係が時間の経過で変化することが前提とされているのか？
（いわゆる「可能」を根底とした関係があるのか？）

ということである。（故に、一般的に考えられるような時間軸との関連とは別の問題であろうと思われる。）即ち、時間軸を問題にする場合には、通常、まづ、現在／非現在を問う「時制」が問題とされる。この時制は、事象の行われる時点を時間軸の上に指呼する機能であり、「いつ」が問題とされる。ここで問題になっていることは、同じ時間軸の上に生起しながら、「主語のあり様」が問題となっている。その「あり様」とは、「時」の

「間」に存在するものである。その「間」を問うのがアスペクトであり、この「間」における「変化」を意味するということである。即ち、「状態」とは「間」に生起するということである。さらに話者の心理的・感情的な面において「未来における可変、可能、推量」的なニュアンスも同時に表現することとなり、ここから、モードの概念が存在することも考えられよう。このように、単純に二項対立で表現されているのではなく、基本的な弁別要素による対立に加え、話者の心理的・感情的概念も同時表現されているのである。

5. 結 論

本来、スペイン語の起源であるラテン語においては、繋辞を述べる場合でも状態を述べる場合でも「甲=乙」という同一の「命題」を表す場合には、同じ動詞"esse"で表現していた。しかし、イベロ・ロマンス語の特徴として、俗ラテン語の段階を経てロマンス諸語への発展の中で、"esse"の概念を基本として、ある命題を繋辞/状態の対立で表現する様式になった。その場合には、時制を確定する際、主語と述語の関係が:

①必然的関係にあり、「点」的に捉えられる場合。即ち、「間」を問う必要が存在しないもの。故に、固定的・不変化を述べることが主なる意味である。

ex. El cielo es azul. / Carmen es guapa.

(空は青です。 / カルメンは、見目良い。)

⇨繋辞動詞の場合においては、空は、必然性を以て青いのであるし、話者からはカルメンという女性は、通常、不変的に綺麗な女性を意味している。

②可能的関係にあり、「線」的に捉えられる場合。即ち、「間」を問うもので、継続性を持っており、必ず最終点に到達するは変化するという感覚が見られるもの。故に、状態・変化を述べることが主なる意味である。

ex. El cielo está azul. / Carmen está guapa.

(空は今、青い状態である。 / カルメンは、今は、見目良い。)

⇨状態動詞の場合においては、その時においては空は青いが、曇る可能性もあり、カルメンは日比野は綺麗とは言えないがその時は化粧でもして美人になっていることを意味している。

要するに、命題は同じ" 空=青" であるし" カルメン=見目の良い" ものごとを示しているのである。即ち、両者の使用選択においては、命題の表現は、話者の主観を通じて行

われるということであるから、そこに選択の幅ができており、話者との相対的な関係が述べられることとなる。このようにその程度、絶対的なものではなく、確定的な表現様式が曖昧なところから"ser/estar" という動詞に関する各研究のテーマの基となっている。

基本的には、この種の動詞には、「甲=乙」という同一命題を表現するのに"esse"という 単一・一本化した動詞があったのである。ロマンス諸語の段階で、わざわざ二項対立で以て細分化して表現されるようになるが、根本的には繋辞も状態も同じ命題から発しているのであり、要はそのとらえ方の差を表現するということである。故に、両者とも本義とするところは同一であると考えられよう。

イベロ・ロマンス語にみられるように（スペイン語の例）ここでのロマンス諸語の分化においては、一方では本来の印欧語にあった「アオリスト」的概念を"ser" へと、もう一方では、「パーフェクト」的概念、即ち、アスペクト的概念を"estar" へと継承しながらわざわざ細かく表現し分けて行ったような感覚を受ける。

さらに状態動詞では、「状態」の表現をより詳しく検討してみれば、この中では「変化」が前提とされているので、特に話者の主観が色濃く入る場合には、その心理的かつ感情移入といったニュアンスも指摘されよう。ということは、アスペクトのみならず、「法」の概念も指摘が可能とされよう。（繋辞動詞では反対に話者の心理や感情は混入されないので客観性が強くなると考えられよう。）

このように、繋辞/状態に関する表現においては、単なる二項対立に基づいて表現されているのみならず、時制・アスペクト・法といった動詞のカテゴリーが同時に存在して表現されていることをここに指摘することができよう。

〔注〕

(1) 島岡 茂、1986、『ロマンス語比較文法』、P.116 , 1.2 ～4

(2) 島岡 茂、1980、『フランス文法の背景』、P.88, 1.1 ～11

(3) プリキーナ/ ザハヴァーネクラーソヴァ（稲垣 兼一・初瀬 和彦共訳）、『新ロシア語文典』、P. 251 , 1.5 ～30

(4) 島岡 茂、1986、『ロマンス語比較文法』、P.116, 1.16 ～17

(5) ｉｂｉｄ. 、P.117, 1. 11～18

(6) ｉｂｉｄ. 、P.117 , 1.19～P.118,1.18

参　考　文　献

Gili Gaya, Samuel. 1981, "Curso superior de sintaxis española", VOX, Barcelona

Menéndez Pidal, Ramón. 1982, "Manual de gramática histórica española", Espasa-Calpe, Madrid.

Real Academia Española, 1983, "Esbozo de una nueva gramática de la lengua española", Espasa-Calpe, Madrid

大森　洋子; 1993,「カテゴリーの連続性とスペイン語の繋辞動詞:serとestar],
SOPHIA LINGUISTICA, 33

寺崎　秀樹, 1988,「SER/ESTAR の意味と機能」, スペイン語学研究 3.

大西　英文, 1997,『はじめてのラテン語』, 講談社現代新書, 1353, 東京

島岡　茂, 1980,『フランス文法の背景』, 大学書林, 東京

〃　, 1986,『ロマンス語比較文法』, 大学書林, 東京

〃　, 1993,『フランス語の歴史』, 第4版, 大学書林, 東京

三好　助三郎, 1993,『新独英比較文法』, 第13版, 郁文堂, 東京

ヘンチェル／ヴァイト (西本　美彦, 高田　博行, 川崎　靖訳), 1995,『ハンドブック　現代ドイツ文法の解説』, 同学社, 東京

鈴木　英一; 安井　泉, 1994,『現代の英文法　第8巻　動詞』, 研究社, 東京

プリキーナ／ザハヴァーネクラソヴァ (稲垣　兼一; 初瀬　和彦訳), 1986,『新ロシア語文典』, 吾妻書房, 東京

原　求作; 1996,『ロシア語史講話』, 水声社, 東京

『チリの歴史』－世界最長の国を歩んだ人びと－

ハイメ・エイサギㇾレ著
山本雅俊訳（株）新評論、１９９８年、９０８ページ

梅田美代子

日本チリ修好通商航海条約締結100周年を記念して、*HISTORIA DE CHILE*(Jaime Eyzaguirre, Tomos I y II, Santiago, Zig-Zag, 1982)が全訳、出版された。著者ハイメ・エイサギㇾレ(1908～68)は、厳格な思想と豊かな散文の才覚でその名を残したチリを代表する法学者、歴史学者、文学者である。他の作品、『ペドロ・デ・バルディビアの運命』(9版)『オヒギンス』(8版)、『チリ歴史上の特質』(10版)、『法学史』(8版)、『独立の司法・理論予算』(10版)、『社会科学の原理』(11版)などが版を重ねて出版されていることからも、専門の研究者の間だけでなく一般に広く読まれ支持されてきたことが窺える。

本書の構成は大きく分けて、序説・先住民時代、第一部・植民地時代(1540～1817)、第二部・独立以後(1817～1861)となっているが、第二部は著者が第一部まで刊行後急死したため、彼の弟子や協力者たちが残された原稿をもとにまとめ上げたものである。原書は693ページにおよび、内容が思想、政治、経済、社会構造、宗教、文化、教育、日常生活と広範囲にわたるため通史としては読みにくいが、全章を通して特定分野を抽出してみると大変興味深く読めて時代が鮮明に理解される。チリは他のラテンアメリカ諸国と同様に先住民、白人、黒人、混血からなる重層階級社会である。国の歴史とは、つまるところその時代を歩んだ人々の足跡であるかぎり、社会を構成する人たちの物の考え方や行動様式などを十分踏まえないと誤った解釈に陥ることにもなる。ラテンアメリカ社会を理解するには、その社会構造の中でとりわけ見逃されがちな被支配階級の伝統、習慣、思考、行動に目を向けてみる必要があるだろう。本書では社会構造、日常生活、国民性に関する部分を概観しておくと、歴史全体の把握が容易になるように思われる。

チリの歴史理解には300年にもわたって抵抗を繰り返してきた勇猛なアラウカ族と征服

者との関係も欠かせない。強大な大帝国であったメキシコのアステカ文明やペルーのインカ文明の崩壊と異なり、狩猟民族に近かった地の果てのアラウカ族とそこまで踏み込んでいったスペイン人との闘争は、執拗で壮絶であった。アラウカ族の原始的な精悍性にくわえて、孤立した辺境には貴金属獲得上のメリットがなかったことと、チリ中部以南のし烈な気象条件による居住の困難さが完全な征服を阻んだのであろう。現代のチリではアラウカ族やその他の先住民は、メキシコ、ペルー、ボリビアに比べると極めて少数であり、共同体を出てサンチアゴなどの大都会に移り住む者がふえて少数民族としてのアイデンティティーが消え失せていく現状である。インディヘニスモ（先住民文化の擁護と復権）はラテンアメリカに定着しているが、チリにはその運動がおよばなかった。チリを代表する二人のノーベル賞作家ガブリエラ・ミストラル(1889～1957)とパブロ・ネルーダ(1904～1973)はインディヘニスモ文学の分野には該当しないといわれる。チリがなぜそのようになったのか、先住民が無視されるようになったのは如何なる理由によるものであろうかを考えさせられる。

著者は、「チリは南米大陸の西側に位置し、ヨーロッパ文明からは遠く離れ、しかも北側は砂漠、東側はアンデス山脈、西側は太平洋、南側は南極の氷河に閉ざされた極限の孤立の中で隠者のような性格を持つ国であり、スペインの血が少数の先住民を吸収し均一な民族を形成し、過酷な自然はその国民気質にも影響した。」といっているが、そこには先住民の入る余地はなく、インディヘニスモを受容するものでもないようだ。しかも、「チリ人は、美しい景色、澄んだ空気と豊かな土地に育まれ、一方ではアラウカ族の逆襲に苦しみ・・・」と述べているように、この場合のチリ人とは征服者側をさすようである。「スペイン人は・・・チリに住みつきそしてそれまでになかった統一という意識をチリに与えたのである。チリにとってスペイン人の進出は、国家を形成するための成熟した文化や、歴史の軌道速度を早めるための文化を迎え入れることにほかならなかった。」と書いているこのチリとは、明らかに先住民の住むチリであり、先住民そのものと置き換えてもよいであろう。そして、１６世紀末スペイン軍がアラウカに惨敗し、チリ南部にスペインが築いたものが廃墟と化した時のことを「不毛の地において大きな犠牲を払い、やっとヨーロッパ文明がめばえようとしていた時、野蛮な行為が全てを圧しつぶしてしまったのである。」というくだりでは、先住民を野蛮の一言でかたずける著者の見解が垣間見える。惨敗の後も、廃墟を乗り越え、飢えと貧窮に苦しみながらも、なお騎士道精神は健全に生きながらえたと誇張する。

だれがだれに向かって何を語るのか。歴史像はその立場によって著しく異なってくることはいうまでもない。著者の根幹をなしているのは摂理主義（プロビデンシアリスモ）であり、チリを含むラテンアメリカは「神の意志」に導かれ、スペイン人によって発見、征服される運命であった。前述の『ペドロ・デ・バルディビアの運命』(1986)ではことさらこの「神の意志」が強調され、先住民にとって残虐な殺人者はチリ国の創設者であり、英雄である。フランシスコ・エンシーナ(1874～1965)の実証主義的な『チリの歴史』(1954)との対比は議論を呼ぶところでもある。西欧文明を継承し、先住民に対する共感度はたとえあるとしてもキリスト教的博愛主義の域を出ていないが、白人比率が圧倒的なチリおいては著者にかぎらず大半の国民も同じような考えなのかもしれない。

また対外関係を重視するだけあって、豊富な知識をもとに植民当初からイギリス、オランダ、フランス、ドイツ、アメリカその他の国々が入れ代わり立ち代わり係っていく様子をよく描いている。イギリス女王に陰でバックアップされた海賊がバルパライソまで出没するあたりの記述は、さながら時代小説を読むような印象を与えてくれる。本書を評して興味深い、面白いというのにはわけがある。本書はチリ人によるチリ人のための「自国史」ある。中立的・客観的記述に重点をおく西洋史的視点とは異なった立場をとっているうえに、著者の文学者としての特性が随所に如実にあらわれているからである。だからといって歴史的価値を損なうものではないとは、巻頭に一文をよせたラテンアメリカ社会史専門の寿里順平氏の言である。事実より言葉に価値をおく伝統は、ラテン人の間で帰納的で実証的な学問が育ちにくい結果を生んだといわれる。ラテンアメリカ人の書く論文・著書が思弁豊かでありながら、裏付ける事実に欠けることが多いともいわれるが、本著者も能弁・饒舌な面を持ち合わせているようで正にラテン気質とでもいうべきか。しかし、歴史学者でありまた文学者でもある著者の本領が発揮されたとすれば、当然とも思われる。

本書は1861年で終わりになっているが、興味はむしろそれ以降現代までにもおよばざるをえない。ラテンアメリカでも稀有な存在であるチリがその後、どのような歴史をたどったのか、どういう方向にむかっているのか、とりわけ先住民の処遇が気にかかる。その意味で、チリ人によるチリ通史の完成が望まれる。

〔書評〕：　ホセ・マリア・アルゲダス

『ヤワル・フィエスタ（血の祭り）』

（杉山　晃　訳・　現代企画室　１９９８年）

片倉充造

ラテンアメリカ最初の近代小説は、メキシコのフェルナンデス・デ・リサルディによる『ペリキジョ・サルニエント』（１８１６）というピカレスク小説である。ペルーの場合は、ナルシソ・アレステギの『オラン神父』（１８４８）というインディオ小説が原点であり、そこにはすでに同ジャンルの特徴のひとつ、インディオ疎外の権力機構（判事－司祭　行政）のトライアングルが描写されている。そして、マヌエル・ゴンサレス・プラダに思想的影響を受けたクロリンダ・マットの『巣のない鳥たち』（１８８７）がこれに続くが、先住民インディオ（問題）を題材とした広義のインディオ小説が開花するのは、エンリケ・ロペス・アルブハル『アンデス物語』（１９２０）以降のことであり、ホセ・カルロス・マリアテギやL．E．バルカルセル他が参加した雑誌『アマウタ』の刊行（１９２６）が、ペルー・インディヘニスモの方向づけを促したことは特筆に値しよう。

継母、義兄による冷遇という複雑な家庭環境から、先住民インディオとの濃密な接触のうちに少年時代をすごしたホセ・マリア・アルゲダスにとって、ベントゥラ・ガルシア・カルデロン『コンドルの復讐』（１９２４）などの既存のインディオ小説に対する疑義こそが、文学者として短編集『水』（１９３５）を起点とする作品群を執筆する動機であったことはよく知られている。

『ヤワル・フィエスタ』（１９４１）は、そのような作家の最初の小説であり、１１章立ての構成である。舞台は、ルカナス郡プキオ、主な時代は、１９２０－３０年代。ペルーの独立記念日７月２８日に毎年開催されるトゥルプッフヤイ（地元様式の闘牛競技）の存続をめぐって、新任の知事（コスタ出身で西洋文化の権化）と町長以下（地元様式の闘牛を容認）とのせめぎあいが展開される。

このプキオの町には、ミスティと呼ばれる有力者（たいがい白人）と非ミスティとの対照があり、カヤウ、ピスカチュリ、チャウピ、コリャーナという４つのアイユ（インディオの共同体）も、闘牛競技への関わり方、道路建設、教会建築などをめぐってそれぞれ対抗心を露わにしている。

小説の「Ｉインディオの町」では、プキオの地理的説明が、「II略奪」では、その歴史的解説が述べられている。「すべてインディオの町だった」プキオが、両章では、判事や書記や書類を擁して、どのようにミスティたちの手に落ちていったのかが概略される。

しかしながら作者のリアリズムによれば、「プキオのインディオは訴訟のやり方をおぼえて神父・判事・公証人を買収した」強かさをもちあわせているのであり、それまでのインディオ小説によくある白人＝悪、インディオ＝善の単純な構図にはもはや止まっていないのだ。IIではI同様、土地所有をめぐるミスティによる〝合法的獲得〟の手順が克明に描述されている。ここではやはり、両者の間で緩衝的役割を効果的に果たしているのが助任司祭であり、判事も知事を補完するキャラクターとして登場している。

そしていよいよ「III角笛、土地のラッパ」からは、ストーリーが進行する。〝伝説〟の荒牛ミシトゥを生け捕りにし、闘牛祭に送り込もうとするカヤウのインディオの熱意に、地主ドン・フリアンもいつしか協力を意思表示することで、がぜん町中が活気づく。逞しい闘牛士を揃えるカヤウ、ピスカチュリ、そして、ダンサック（踊り手）で魅せるチャウピ、コリャーナ。これら4つの村の概要については、アルゲダスの人類学者としての業績「プキオ、変容する文化」（『インドアメリカ域内文化の形成』所収）に詳しく、小説での有り様はほぼこれと一致していると言えよう。

「V．通達」では、リマ中央政府からの闘牛禁止「通達」が、地元を大きく動揺させることになる。このままでは内務省の権力を利してプキオを〝文明化〟しようとする知事のグループと、年来の闘牛を切望す地元派とが直接衝突しかねない情勢だが、そこは、町長とも近く時には議員然とした特別待遇を受ける助任司祭が、町の有力者ドン・フリアンの封じ込めに成功する。加えて「IX前夜祭」で、カヤウ、ピスカチュリの村人に独立祭用の小さな囲い場（闘牛場）を作らせる一計を案じたのも、助任司祭とされる。ここでは有力者側にも、インディオ側にも「声」をもつ神父の微妙な立場が重要視されている。「VIIアンデスの人々」でも、１９２＊年プキオのインディオたちがナスカへの道路建設に励んだとき、その取り纏め役を務めたのが、やはり助任司祭であったことを思い起こすとき、『深い川』（１９５８）のリナーレス神父ほどの威厳は感じられないまでも、有効な緩衝装置（権力者側にとっては安全装置）としての機能をみごとに果たしていることは否めない。ちなみに、神父がインディオの道路建設に関係する挿話は、ホルヘ・イカサの『ワシプンゴ』（エクアドル）やロペス・イ・フエンテスの『インディオ』（メキシコ）などにも広く眺められる。

さて小説世界の大団円は、標題の「XIヤワル・フィエスタ」であり、文字どおり、血の祭＝闘牛祭の開催である。正式の闘牛を披露すべく首都リマからスペイン人闘牛士イバリト２世が招待され、知事派やルカナス連合会の期待を一身に集める。しかし、手もなくケーブ捌きに失敗し、地元闘牛士の面々が連係して、最後にはダイナマイトで野牛ミシトゥを爆殺する。終局の町長の言葉「これがわしらの闘牛なんです」は、ドン・フリアンや〝プキオを守るべく〟発言し投獄されたドン・パンチョ他、プキオ民衆の声でもある。つまり、トゥルプッフヤイは、社会階層を超えて、住人の多くに支持される、風土として「昇華」されたものであり、地主アラングエナにとっても、町長アンテノルにとっても、

ヘスス・グティエレスやグレゴリオ・パロミノといった有力者にとっても、ボリバル通りの店主パンチョにとっても、もちろんインディオ大衆にとっても、これはプキオという土地柄のアイデンティティなのである。

当該小説は、支配者＝白人文化VS被支配者＝インディオ文化という簡単な二分法では理解できない。むしろインディオ大衆の集産的なエネルギーが積極的に評価されているのだ。インディオが「個」としてよりも「集団」として意識されていることは、一般に固有名詞をもたず、役職名（たとえば村長、踊り手など）で表現されることでも明らかである。この手法は、メキシコ革命（インディオ）小説でロペス・イ・フエンテスが好んで用いた匿名法（アノニマト）と符合するものである。

『深い川』に登場するアバンカイのインディオがどこか抑制的なコロノス（アシエンダに従属する小作人）であったのに比して、このプキオのインディオに活気が漲っているのは、訳者の「あとがき」にもあるとおり、「これらの村こそが作品の主人公である」証左でもある。とかくシリアスでドキュメンタリー風の社会告発に傾きやすい同ジャンルにあって、エンターテイメントを思わせるまでの明るさは、読みやすい訳文もさることながら、より広い読者の共感をえられることだろう。本書は、文学（小説）をとおして（ペルー）社会を読み解く醍醐味を与えてくれる一冊であり、『すべての血』（１９６４）や『上の狐と下の狐』（１９７１）の翻訳がますます待望される。

ペルーのスペイン語

ジョン　M. リプスキ著
岡　本　信　照（訳）

歴史概観

スペインによるアメリカ大陸征服の初期段階から、ペルーはスペインの予想を遥かに上回る膨大な鉱脈資源を有していたために特権的地位を獲得した。スペインの才知と派遣人員のそれこそ選り抜きがペルーに送られ、要塞が建設され、ペルー交易ルートの必要に応じて軍事戦略が発達した。そこで、恩恵の少ない植民領にいたスペイン人入植者は常々、努めてペルーへ移住しようとした。土着アメリカ最大の文明の発祥地であるペルーは、スペイン領アメリカのどの地域よりも時間的・空間的広がりを越えて長期化し拡大した緊密な言語接触の場でもあった。スペインとの密接な言語接触は先住民の言語と文化の根強い存在によって均衡を保つことができた。最も富み栄えた副王領の本拠地リマが沿岸都市でもあったことにより（エルカヤオ港はリマから僅か数マイルだった）、結果的にペルーは中南米スペイン語の史的再建において独自の様相を呈している。「高地」の言語を行政上の首都、すなわちスペイン北部方言と同一視し、「低地」の言語を航海上の接点、すなわちアンダルシア方言と同一視する学説は、リマ-エルカヤオの場合にとりわけ集中しているのだ。

スペインの植民化事業の歴史において、ペルーは優位を占めていたにもかかわらず、ペルー・スペイン語の研究は他のラテンアメリカ地域よりも遅れをとっていた。ペルー方言地図はまだ未完成で（Caravedo 1987）、これまでに為されたある程度詳細な記述といえば、リマとクスコの話し言葉くらいのものだった。しかも、民族言語学的変異の微細なパターンについては、ペルー・スペイン語を国家規模の現象として包括的に記述して纏めるというよりも、むしろ従来は言語干渉の観点からしか扱われていなかった。概説的な紹介の中に現われるペルー・スペイン語に関する多くの「事実」は不明であったり、この国の一部にしか適用しなかったり、そうかと思えばまさしくペルーにしか見られない別の特徴がしばしば見過ごされていた。

スペイン人到来以前、ペルーはクスコを中心に統治されていて、時にはコロンビア南部からチリ中央部またはアルゼンチン北部まで拡張したこともあるイ

ンカ帝国の中心地だった。16世紀初期、インカ帝国は皇帝の王位継承を巡る権力抗争によって分裂していた。皇帝の嫡子ワスカルはクスコのインカ人貴族に支持され、一方、側妻の母を持つアタワルパはキトの統制を任されていた。強力な軍隊に支えられたアタワルパは全インカ皇帝の位を切望し、ついにワスカルを打ち負かした。しかし、1532年まさにインカ帝国が内紛後の平穏を回復した頃、ピサロと彼の従者たちがカハマルカに到来したのである。ピサロの配下は百人余りしかいなかったが、彼らは大砲、馬、(金属製の)剣、訓練された犬を所有していたので、数千人を上回るインカ軍を瞬く間に滅ぼしてしまった。アタワルパは捕らえられ、身柄の釈放と引き替えにスペイン人の要求を受け入れたにもかかわらず、裏切られて火刑に処せられた。この時点でインカの抵抗が崩れ去ったのである。翌年エルナンド・デ・ソトがクスコを占領し、1535年ピサロがリマを建設した。スペインは即座にエンコミエンダ制を採用し、全土に広がる法外な鉱脈資源が現実のものとなるや、何千人もの先住民が強制的に奴隷にされ、スペインのガレオン船を金銀で埋め尽くした。元々遥か遠方の領土であったのが一瞬にしてメキシコ以上に重要な副王領へと昇進したのである。その後一世紀以上にわたって、南米におけるスペインの植民化・軍事化事業はペルーからの財宝船を巡って行なわれた。こうした状況がペルーのそれこそ不釣り合いな社会経済的・言語学的環境をもたらしたのである。リマは副王領内のあらゆる文化活動や経済活動の中心地になった。スペインの行政官がこの都市を去ることは滅多になく、それどころか裕福なヨーロッパ式生活様式を好んで移植した。ペルーの他の地域は社会的にも経済的にも停滞したままだった。農業は大部分が先住民に委ねられ、スペインの土地所有の下での発展は極めて緩慢だった。沿岸地域では熱帯式農業が定着し、アフリカ人奴隷の労働力が大いにに活用された。しかし、このような地域でさえリマとの接触がほとんどなかった。結果として、まさしく当初からペルーの大部分が言語学的に周縁的な存在になっていた。それ故、リマの(上層階級の)話し言葉は、古風化し孤立化した方言地帯の真っ只中にある言語島と化したのである。

ペルーに関して言えば、特定の言語慣用を地域別に位置づけるだけでなく、民族言語学的見地からの考察もまた重要である。土着語のみを用いているか二言語併用かの度合いが高地とアマゾン地方での重要な分岐線になる。しかも、単一の共同体内部でスペイン語一言語話者と二言語話者との格差が顕著な場合もある。二言語併用よりも言語変項の方が重要な意味をもつ沿岸部では、<社会文化的統合 vs 周縁性>の度合いが方言区分に比例して上昇する。もっと広

い意味で民族言語学的変項と地理的変項とを関連づけて考えれば、ペルーは沿岸部方言、高地方言、アマゾン流域方言に区分できる。さらに沿岸部は北部(エクアドル国境付近)、中部(リマ-カヤオ地方)、南端部(チリ国境付近)に下位区分される。高地とアマゾン地方は、地域境界線に沿った適切な下位区分が不可能である。Benvenutto Murrieta(1936)はペルーを四地方、すなわち北部沿岸、中・南部沿岸、南端部高地-沿岸、 高地山間部に区分した。Escobar(1978a)はペルー・スペイン語をアンデス方言(アンデス地方自体、アルティプラノ、南西部沿岸に下位区分される)と低地、つまり非アンデス方言に区分し、さらに北・中部沿岸とアマゾン地方に下位区分した。基本的に、これらの区分法は全て音韻的基準に拠っている。統語的基準に基づいた区分であれば、おそらくアンデス方言(二言語併用も含む)と非アンデス方言とを区別するだけに留まるだろう。一方、語彙的基準に基づいた分類であれば、さらに細かく分割されるであろう。

スペイン語以外の言語的影響

ペルーはスペインの植民下に置かれていたため、当然、この地域はスペイン語と先住民語、とりわけケチュア語との緊密で永続的な接触が目立った(Mannheim 1991参照)。チチカカ湖岸にはアイマラ語話者が定住し、この言語の歴史はケチュア語の歴史と平行する。多種の少数民族がペルー・アマゾンに住んでいて、多くはスペイン語を多少話せる程度でしかない(Wise 1985参照)。

このインカ帝国の子孫たちは早期にスペイン化を被ったのだが、クスコのような高原都市の周辺では大多数が先住民語を保持しいる。スペイン語能力は実に様々で、二言語併用のペルー人が流暢に話すスペイン語でさえスペイン語一言語話者の規範からかなり乖離している。スペイン語とケチュア語との四世紀以上にも及ぶ接触が、ペルー・スペイン語のみならず汎中南米スペイン語に多数の語彙をもたらした。そして、高地ペルーの発音特徴(例えば、/r/の歯擦音化と非強勢母音の弱化)はペルーの土着語から影響を受けた可能性さえある。形態統語論の分野では、スペイン語劣性の二言語話者にケチュア語または他の土着語に基づいた言い回しが確認される。ヨーロッパ系子孫の一言語話者が話すスペイン語に、果して先住民語が絶えず影響を与えてきたのか否かについてはまだ分かっていない。二言語話者間では安定した中間言語が発達していて、本来スペイン系のものではないはずの構文でも大多数のペルー人に一貫して認

められるのであれば、ペルー・スペイン語では正当な用法だと見做してよいだろう。

スペインがペルー植民地化事業を進める上で、アフリカ人奴隷は不可欠な要素だった(Bowser 1974; Cuche 1981; Harth-Terré 1971; Millones Santagadea 1973参照)。最初期の奴隷は、クスコから高地ペルー(現在のボリビア)にまで広がる鉱山で働かされていた。この初期アフリカ人の言語特徴はほとんど残存していない。17世紀から伝わるアフロ・ヒスパニック系ピジンの典型と思われる数少ない歌謡に見られる程度である(Stevenson 1969 参照)。アフリカ人は代々都市部で働いていたので黒人人口は着実に増加した。このような共同体が19世紀の終わりまで独自の民族帰属意識、習慣、文化を維持した。ペルー生まれの黒人はごく普通のスペイン語を話していたのに対し、アフリカ生まれの黒人奴隷(=ボサル)の話し言葉はスペイン語から乖離したものだった。後者の言語は16世紀から20世紀にかけて行なわれた文字転写の中に現われ、20世紀後半まで最長老の黒人奴隷系ペルー人がその種の言語を用いていた。アフリカ人の多くは、特に奴隷解放後、街頭の物売りとして働いた。そして、その呼び声(pregones)の言語がまるで戦争のように飛び交い、リマの文化遺産の一部になった。ペルー沿岸部では、アフリカ人奴隷と自由労働者が農業、特に砂糖プランテーションで働いていた。今日までアフリカ系ペルー人共同体が沿岸部に散在していて、初期アフロ・ヒスパニック系の文化的名残が見られる。

Romero(1987, 1988)は初期アフリカ系ペルー人の言語を研究した数少ない研究者の一人だ。過去の名残を留めるアフリカ系ペルー人の言語が存在したことは十分に文証されているにもかかわらず、ペルー内の同時代のアフロ・ヒスパニック系言語についてはほとんど知られていない。大抵の場合、アフリカ系ペルー人は民衆スペイン語に見られる音声弱化のような傾向を単に広めたにすぎない。アフロ・ヒスパニックに特有の発音は、 Gálvez Ronceros(1975)が記述したチンチャ共同体のような周辺地域に残存しやすいという指摘がある。おそらくアフリカの影響と見られるこの共同体の発音特徴は、音節初めの子音群の弱化(trabajo「仕事」>tabajo; hombre「男」>hombe)、母音間/r/の[d]への変化(quiero「愛する(直・現・一単)」>quiedo)、あるいはその逆に母音間/d/の[r]への変化(adentro「中へ」>arento)、そして母音間/r/の[l]への子音取り替え(ahora「今」>ahola)等がある。

アフリカ人奴隷制廃止にともなって、ペルーは中国との接触を試みた(Rodríguez Pastor 1989; Stewart 1951参照)。1854年から1874年の間に、およそ十

万人の中国人がペルーに連れて来られたと推計される。このクーリー(苦力)は五・六年契約で雇われいたが、奴隷状態で拘束されたり、奴隷のような環境下で働かされるのが常だった。彼らの大半は黒人とごく稀に他のペルー人と相互に関わり合いながら、沿岸部の砂糖プランテーションや綿花プランテーションで働いていた。ごく少数の中国人だけが都市部に引きつけられ、そこで彼らは行商に携わった。この中国人の言語が文学の中に時折描写されているのだ(Rodríguez Pastor 1989参照)。しかし、彼らはそれ以外の言語特徴を何も残していない。アフリカ人と中国人との沿岸部プランテーションでの接触から言語特性にいかなる結果が生じたかに関しては、今後明かされることになるだろう。

音声と音韻

ペルーの発音に関する明確な研究はほとんどない。Benvenutto Murrieta(1936)、Escobar(1978a)、Mendoza(1983, 1990)等が地域変異を実地調査している。Caravedo(1983, 1990)とHundley(1983, 1986)はリマとクスコの発音の様々な様相を網羅している。また、Godenzzi(1991)はプーノにおける社会言語学的変異を概観している。次に掲げる諸特徴がペルーの発音に典型的で、おおよそ主要な分岐線と見られる<高地/沿岸地>軸に沿って区分される(Boynton 1981; Gordon 1980; Sanabria 1975)。

[アンデス高地]

1) ペルー・アンデス方言のほとんどが/y/と対立する硬口蓋側音/ʎ/を保持している。通 常/ʎ/は側音で発音され、/y/は弱い摩擦音で発音される。しかし、/ʎ/の溝型摩擦音が二言語併用のケチュア語話者間で聞かれることがある。/ʎ/の保持は高原地帯南部(クスコとプーノ)に顕著だが、一方で/y/との競合は高地北部、特に教養の高い都市部の話者間で目立つ(De la Puente-Schubeck 1989)。
2) /n/の軟口蓋音化は高原地帯全域に一般的で、規則的に完全消失する場合もあり得る。
3) 破擦音の/č/は度々摩擦音で現われる(Escobar 1978)。
4) 音節末、特に休止の前で/r/は無声歯擦音になりやすい。
5) 多顫動音の/rr/は通常、震え音よりむしろ摩擦音になり、調音が[ž]に近い。この摩擦音化への傾向はクスコからプーノにかけてペルー南部に集中し

ていて、ボリビア国内の隣接地域にまで及んでいる。ペルーの北部アンデス地方では震え音の/rr/が摩擦音になるが、これはエクアドル南端部で聞かれる発音と一続きになっている。

6) 子音群/tr//pr//kr/の発音は民族言語学的背景によって多少異なる。二言語話者間では、これらの二重子音中の/r/が摩擦音かそり舌音になり、/tr/の場合、準破擦音を生み出す先行子音に融合すると考えられる。スペイン語一言語話者は常に/r/を単顫動音で発音する。

7) 音節末か語末の/s/は[s]のまま保持される(Hundley 1983, 1986参照)。これは語末/s/が母音の前で度々有声音化することと関連づけられるが、エクアドル中部で見られるほどの頻度ではない(Lipski 1989b)。高原地方の中には、特にクスコとプーノでこの/s/が舌尖音化しやすい。日常語レベルでは/s/が気息音になることはないが、語末に来ると確かに完全消失が起こる。これは"entonces「その時」"を"entonce"と発音されることがよくあることから、ある面では語彙化しているわけである(Mendoza 1976)。しかし、原則的にはどこの地域であれ起こり得ることだ。クスコでは多くの話者が若干数の語彙、特に数詞の"once「11」、doce「12」、trece「13」"において歯間音の[θ]を/s/に代えて導入している(Benvenutto Murrieta 1936)。この発音は他の語彙にまで伝播していないが、住民はこの発音を意識していて、クスコ方言の際立った特徴と見做している。この[θ]の場合は語源的にスペイン北部の[θ]の使用と一致するが、一音素としての[θ]が過去にクスコ・スペイン語の音素体系に組み込まれたという証拠は全くない。

8) 有声阻害音はそれぞれ高地ペルーで消失しないまま残る。二言語話者、特にスペイン語劣性の人々の間では/b//d//g/が閉鎖音のまま保持されている(Escobar 1978; Mendoza 1976)。

9) 後部摩擦音の/x/は摩擦要素が聞き取りやすく、前舌母音の前で明らかに硬口蓋音になる。

10) ペルー・アンデス地方での無強勢母音の弱化は極端で、とりわけ南部地方に見られる(Hundley 1983, 1986)。母音は主に/s/と接触した時や韻律構造の中で最も弱い位置に来た時に消失するまでに至る(Lipski 1990b)。

11) 高地の二言語話者は/f/を気息音[h]で発音しがちである。例えば、"enfermo[enh^{w}ermo]「病気の」"のように非円唇母音の前で円唇化した[h^{w}]になることもある(Mendoza 1976)。

12) ケチュア語優性の二言語話者はスペイン語語彙の強勢をしばしば最後から

二音節目に移動させる。例、corazón>corázon「心」、 plátano>platáno「バナナ」(Escobar 1976)。

13) 高地におけるスペイン語劣性の二言語話者はスペイン語の五母音体系をケチュア語(またはアイマラ語)の影響下で/o/-/u/と/e/-/i/の対立を融合させ、三母音体系に還元させる傾向がある。ボリビアの場合のように、この発音は「たどたどしさ(motosidad)」と見做され、社会言語学的に酷しい汚辱が付与されている(Cerrón-Palomino 1988)。

[リマ/中部沿岸]

リマ-カヤオ地域は副王領時代の首都として、また植民地時代の主要商港として二重の意味で地位を獲得し、この地域の音声は社会階層差の見地からこの二重性を反映している。ここ数十年間で国内の地方からリマへの移住が急増したため、「リマ・スペイン語」の継続的存在が疑問視されているほどだ(Escobar 1977)。

1) リマのみならず他のペルー沿岸部はY音法地帯、すなわち硬口蓋側音/ʎ/が保持されていない地域である。/y/は弱めで、一般に摩擦要素を欠いている。それから、特に日常語レベルでは/e/か/i/と接触した時に消失にまで至ることがある(Escobar 1978)。
2) 後部摩擦音の/x/は弱い気息音で、軟口蓋音や後部硬口蓋音になることは滅多にない。
3) 母音間の/d/は消失するのが日常的で、改まったスタイルの時でさえ消失する(Caravedo 1986)。また、母音間の/b/も脱落しがちである。
4) 破擦音の/č/が閉鎖要素を失うことはまずない(Escobar 1976)。
5) リマでは音節末の/r/が単顫動音か歯茎摩擦音で、高地に見られる溝型摩擦音や歯擦音は発生しない。社会文化的最下層間で/r/は句末、とりわけ動詞不定詞で脱落しやすい。
6) 「低地」と「高地」双方の歴史的・言語学的素性を併せ持つ都市に相応しく、リマでは音節末や語末の/s/が主要な社会言語学的変項の一つになっている。中層階級のリマ・スペイン語では/s/が子音の前でしばしば気息音化して[h]になるが、歯擦音の[s]は休止の前か母音で始まる語の前で保持される。若年層の間で語末の/s/が母音の前でも弱化する傾向が頻繁になっている(Caravedo 1983, 1987b; Hundley 1983)。社会経済的最下層間では、/s/

の気息音化や消失の割合が急上している(Escobar 1978)。

7) リマと南端部を除くペルー沿岸部のほとんどで、語末の/n/が軟口蓋音化する。

[北部沿岸]

一般的な音声様式はリマ-カヤオ地方のそれと同じである。すなわち、ある面では沿岸地域のほとんどに見られる社会文化的周縁性によって語末子音の弱化が非常に目立つ。この地域はアフロ・ヒスパニック系が大勢いるという事実、すなわち(満足のゆく実証が為された訳ではないが)、高率の子音弱化に関連する事実を提示している(Mendoza 1978; Romero 1987)。リマと比べてこの地域では/y/が特に弱い。母音間の/b//d//g/は度々消失する(Mendoza 1976, 1978)。

[南部沿岸/アンデス地方南西部]

Benvenutto Murrieta(1936)は、沿岸地方南端部で硬口蓋側音/ʎ/が自律的音素としてまだ保持されていることを研究した。Escobar(1978)は、/ʎ/と/y/の中和がこの地域で頻繁であり、1925年より前に生まれた話者だけが区別を保っていることに着目した。筆者の研究では、この地方における/ʎ/の急激な消滅が確認されている。一方、その結果生じた/y/は北部沿岸地方よりも強く、脱落することは滅多にない。/n/の軟口蓋音化は南部地方で徐々に減っている(Escobar 1978)。

[アマゾン低地]

アマゾン地方はスペイン語を母語としない人々の割合が大きく、ペルー他地方からの移民の場でもある。この地方には次の特徴がよく現われる。

1) 母音間の/y/は一貫して破擦音で(Escobar 1978)、特に先住民語話者の間で無声音化することもある。
2) 後部摩擦音の/x/は弱い咽頭音の[h]で、アマゾンの話者の多くは/f/にも同じ発音を充てる(Escobar 1978)。
3) 破擦音の/ʧ/は度々摩擦音で発音される。
4) 音節末と語末の/s/は弱化し、時には気息音化の過程を経ないまま消失することがよくある。
5) /rr/と/r/の歯擦音化は存在しない。

6) 母音間の/b//d//g/は摩擦音というよりむしろ閉鎖音になりやすい(Mendoza 1976)。
7) /f/は非円唇母音の前でさえ、常に[h]か時には[hʷ]になる(Erickson 1986; Mendoza 1976)。

形態的特徴

1) ペルー方言学の重要な問題点は vos 法の存在とその使用範囲である。都市出身の教養あるペルー人は一度も vos を耳にしたことがないし、たいていその存在を否定する。しかしながら、先住民話者の間に vos の孤立地帯が残っているのは確かだ(Páez Urdaneta 1981)。Benvenutto Murrieta(1936)は、スペイン語一言語話者をも含め、vos が日常化しているペルー国内の地域をいくつか報告している。しかし、今日、vos 法は南部高地に限られ、アルティプラーノ(プーノ)、アレキーパの一部、北部沿岸地域では社会的最下層の人々に常時用いられている。先住民の中では -ís 形が第二活用(comís)にまで広まっていて、沿岸部では -és 形が第二活用を表す。
2) スペイン語運用力が限られた二言語話者間では、接辞人称代名詞の選択が一言語話者によるスペイン語規範と必ずしも一致しない(Klee 1989, 1990参照)。間接目的格人称代名詞が要求される文脈で直接目的格の lo や la が使用されるのも珍しくない(Escobar 1978)。

El *los*[les] dio algunas instrucciones.「彼は彼らに指示を与えた。」

同様に、接辞代名詞と直接目的語または間接目的語との性数不一致が二言語併用のアンデス・スペイン語に日常的である(Escobar 1978; Minaya Portella 1976; Pozzi-Escot 1972)。一般的に、lo は性数に関係なく直接目的語にも間接目的語にも用いられるが、相当数の変異体も見られる。

No *lo*[los] vi a sus hermanitos.「私は彼の兄弟に会わなかった。」
A María nosotros *lo*[la] adoramos.「私たちはマリアを愛している。」

スペイン語劣性の二言語話者レベルでは、主語-動詞の不一致さえ目立ち、三人称単数の総称的用法に多い。

Los informes fueron *excelente*[excelentes].「情報は優れていた。」
Las otras chacras no *tiene*[tienen] riego.「よその農場には灌漑がない。」

3) アンデス高地に時折見られるのが強調の副詞“muy”と形容詞絶対最上級接尾辞 -isimo との組合せだ(Pozzi-Escot 1972)。例、El niño juega muy poquísimo.「その子はほんの少ししか遊ばない。」

統語的特徴

1) ペルー・スペイン語では最も改まったスタイルでさえ過去時制の主動詞が接続法現在を従えることがある。例、El quería que lo *hagamos*.「彼は私たちにそうして欲しかった。」
2) アンデス地方の二言語併用ペルー人の間では、汎スペイン語的様式から著しく乖離した多くの統語法が見られる。中にはスペイン語に堪能でない話者だけに限られるものもあれば、中間言語の現象として専門的に扱われるものもある(Ana María Escobar 1988; Minaya Portella 1976)。他にも、アンデス地方にだけ特有の意味を含む構文が再三聞かれる。スペイン語に堪能でない話者の間に見られるアンデス特有の統語現象の多くはケチュア語起源か、アルティプラーノであればアイマラ語起源である。これは特に O-V 型語順(例、comida tengo)や、現在分詞と別の定動詞とを組み合わせる非標準的用法において確かなことだ。以下に例を挙げる(Cerrón Palomino 1972, 1976; A. Escobar 1978; A. M. Escobar 1988, 1990; Godenzzi 1991; Lozano 1975; Luján et al. 1981; Minaya Portella 1976, 1978; Miranda Esquerre 1978; Pozzi-Escot 1972; Soto 1978)。

De mi mamá en su casa estoy yendo.「私はこれから母の家へ行くところだ。」
¿Qué diciendo nomás te has venido?「君は一体何をしに来たのか？」
A tu chiquito oveja véndeme.「君の小羊を売ってくれ。」
Después encima con las hierbas todo tapa bien bonito.「後から草で何でもうまく被せられる。

A cortar alfalfa mi mamá está yendo.「母はアルファルファの花を摘みに行くところだ。」
La puerta sin cerrar nomás me había dormido.「私はドアを開けたまま眠ってしまった。」
Mi santo de mí lo han celebrado.「皆が私の聖人の日を祝ってくれた。」
En Ayacucho ya estábamos.「もうアヤクーチョに着いていた。」

これらの構文のうち極端に非スペイン語的な形式はケチュア語の語順をなぞったものか、ケチュア語の不定詞を翻訳借用したもので、ペルーにおける汎アンデス・スペイン語の民衆的・文学的常套句の中で度々用いられてきた。だが実際には、このような構文はスペイン語の熟練度が最も低いレベルでしか見られない。

3) ペルーのアンデス・スペイン語では目的格接辞代名詞の用法が日常的アンデス・スペイン語として確立された一般形式と一致し、スペイン語の熟練度によって異なった結果が生じる。接辞代名詞用法で最も浸透している特徴は、直接目的語が生物を示す名詞句であれ無生物を示す名詞句であれ、対格接辞代名詞を重複させることだ。熟練度が最も低いレベルでは文法的性数に関係なく lo があらゆる直接目的語として用いられる。一方、かなり堪能な話者の間では文法上の一致がかなりの高頻度で見られる。次がその典型的な例である。

No *lo* encontró a su hijo.「彼女は息子に出会わなかった。」
La ves una señora.「君はある女性を見かける。」
Yo *la* veía a mi mamá sólamente a mitad de año y a fin de año.「私は年の中頃と年末にだけ母に会っていた。」
Le pedí que me *lo* calentara la plancha.「彼女にアイロンを温めてくれるように頼んだ。」
Este es el perro que *lo* mordió a mi hermano.「これが私の弟に噛みついた犬だ。」
Se *lo* llevó una caja.「彼女は箱を持ち去った。」

この接辞重複は一個以上の接辞が現われる構文を生み出す場合が少なくなく、常に主動詞と隣接する。

Me está castigándo*me*.「私はいつも彼にお仕置きされている。」
La voy a consultar*la* con mi prima. ... como no *me* quería aumentar-*me*.「私の従姉に相談してみよう。・・・彼は私を育てたくなかったから・・・」

4) 他のスペイン語方言ではごく普通に用いられる表現法であるにも関わらず、直接目的語が動詞に先行する時に接辞重複が必ずしも起こるとは限らない。

Mi letra [*la*] conoce.「彼は私の筆跡を知っている。」
[A] Los dos haciendados [*los*] conocí.「私は二人の農場主と知り合った。」
A mi señora [*la*] dejé allá causalmente para venir acá.「私はたまたま妻をあちらに残してここへ来た。」
Su bebito también [*lo*] tenía.「彼女にも赤ん坊がいる。」
A la chica [*la*] he visto en misa.「私はミサでその少女を見かけた。」

5) 高地ペルーでは、接辞代名詞を欠いたゼロ直接目的語が非常に頻繁である。これは沿岸部方言には見られない。

...Porque siempre nos φ traía. A vez nos traía carne, así. Nos φ traía siempre para vendernos así. O, a veces, de regalo, siempre nos traía.「彼はいつも私たちに(φを)持って来てくれた。そして時々肉を持った来てくれた。いつも私たちに売るために(φを)持って来た。また時には贈り物として持って来ることもあった。」

A veces en la noche dejo su quacker ya preparado en la mañana φ caliento y φ toman.「時々私は夜に雑炊を用意しておいて、朝に(φを)温めてみんなが(φを)食べる。」

6) 日常語レベルでアンデス地方のペルー・スペイン語は、所有形容詞弱勢形と“de”で導かれる前置詞句とを組合わせた二重所有格を用いる。ケチュア語優性の話者間では<de-句>を用いた前置詞句が最初に置かれやすい。

Lava *su* pantalón *del* niño.「彼女は子供のズボンを洗う。」
De mi perro *su* ocico「私の犬の顔」
De mi mamá en *su* casa estoy yendo.「私は母の家に行く。」
De alguna señora *sus* perros「ある女性の犬」

類似の構文はペルー・アマゾンにも見られるが、おそらくケチュア語話者の移民に持ち込まれたからであろう。

7) 熟練度の低い二言語話者間に共通の特徴は"diciendo"や"dice"の用法だ。とりわけ口頭伝承に多く、ケチュア語の"nispa"からの翻訳借用であろう。

Entonces sale una señora. Qué cosa, *diciendo*... hazme descansar *diciendo*...「その時女性が出て来た。何事なの？ゆっくり休ませて頂戴、と彼女が言った。」
No sé dónde está mi marido, *diciendo*.「主人がどこにいるのか知らないわ、と彼女が言った。」

8) 一般的にケチュア語-スペイン語中間言語も、スペイン語一言語話者が冠詞を用いる状況で冠詞を省略する(Minaya Portella 1976)。

Y cuando tocan [*la*] campana, se entran a su clase.「そして鐘が鳴るとみんなは教室に入る。」
Trabajaba en [*un*] hospital.「彼女は病院で働いていた。」

9) 二言語併用のケチュア語-スペイン語話者は場所の副詞によく "en"を添える。例、Vivo en acá.「私はここに住んでいる。」；En arriba sale agua.「上から水が漏れている。」

10) ペルー・スペイン語では、過去に明らかに完結した出来事に言及する場合でさえ、現在完了が完了過去の代わりに使用されるのが一般的だ。例、He nacido en 1950.「私は1950年に生まれた。」

11) スペイン語劣性の二言語話者間で、直説法過去完了が話し手個人によって目撃された訳ではない出来事を表すために使用される。例、Habías llegado anoche.「君は昨夜着いたそうだね。」しかし、ボリビア・スペイン語に見

られるほど頻繁ではない。

語彙的特徴

ペルー・スペイン語に地方独自化した語彙群が多いのは、民族言語学的な理由に拠る。語彙項目の中で非スペイン系起源の大半はケチュア語からである。そして、植民地時代のペルーは主要拠点だったために、これらの語彙項目の多くは中南米全域にまで使用が拡大している。その他の語彙は南米アンデスのケチュア語話者の地域だけに限定されるが、ペルー国内でしか通用しないものは少ない。ペルーの語彙目録は、Alvárez Vita(1990)、Arona(1975)、Bendezú Neyra(1975)、Castonguay(1987)、Foley Gambetta(1983)、Hildebrandt(1969)、Pino(1968)、Tovar(1966)、Vargas Ugarte(1963)等の著作に網羅されている。最も引き合いに出されるペルー語法には次の例がある。

ajiaco「ニンニクとジャガイモで作った料理」、ancheta「もうけ話」、anticucho「牛の肝臓の串焼き」、cancha [blanca]「ポップコーン」、chupe「煮込み料理」、chacra 「農園」、choclo「トウモロコシ」、chompa「セーター」、concho「コーヒーやワインなどに溜まった沈殿物」、dormilonas「イアリングの一種」、escobilla「ブラシ、歯　ブラシ」、jebe「ゴム」、jora「チチャ酒用の発酵トウモロコシ」、pisco「葡萄から作る蒸留酒」

[付記]　本翻訳は、前号の「メキシコのスペイン語」に引き続き、John M. Lipski 著、*Latin American Spanish*(Longman linguistic library, 1994)の中の第22章、“Spanish of Peru”の抄訳である。前回と同様、スペイン語版 *El español de América*(Cátedra, 1996)を大いに参考にした。

スペイン関係文献目録

坂 東 省 次

歴史

[479] 川成 洋 「闘牛との「格闘」を集大成―伝説的英『闘牛はなぜ殺されるか』新潮選書」波 9月号 1998

[480] 関 哲行 「中世スペイン都市の女性労働」歴史学研究 5. 1997.

[481] 立石博高/ 関 哲行/ 中川 功/ 中塚次郎編『スペインの歴史』昭和堂 1998.

[482] 五十嵐一成 「18世紀中央カスティーリャ西部地域における織物業の展開―ベハルとカセレス県地方の場合を中心に―」札幌大学「経済と経営」28(3). 1997.

[483] K. B. ウルフ(林 邦夫訳) 『コルドバの殉教者たち―イスラム・スペインのキリスト教』刀水書房 1998.

[484] 林 邦夫 「D. W. ローマックスの生涯と著作―あるスペイン中世史家の軌跡」東京学芸大学紀要第3 部門社会科学 48. 1997.

[485] 瀧本佳容子 「スペイン1640年の危機におけるカトリック両王像の復活―ある未完の史書をめぐって」上智史学 41. 1997.

[486] 中川和彦 「カスティーリャの興隆とその法」(2・完) 成城法学 55. 1998.

[487] 長岡 顕 「スペイン―EUメンバーとしての確立過程」地理 41(11臨増) 1996.

[488] 飯塚 深 「ファシズム体制の崩壊と民主化過程―スペイン、ポルトガル両国を事例として」北海法学 5(4). 1998.

[489] 山内昌之 「モロッコとスペインの横断―依存と反発」外交フォーラム 11(2). 1998.

[490] 山道佳子 「「自由主義の3年間」のスペインにおける自由主義カトリシズム」スペイン史研究 11. 1997.

[491] 岸野 久 『ザビエルと日本―キリシタン開教期の研究』吉川弘文館 1998.

[492] H. チースリク編『フランシスコ・ザビエル希望の軌跡』女子パウロ会 1998.

[493] 五十嵐一成 「17世紀カスティーリャ経済・社会史研究の新たなる展望―最近の代表的諸研究論文との対照の中で―」札幌大学「経済と経営」28(4). 1998.

[494] 手塚 尚 「カサルスとピカソースペイン内戦と芸術家」歴史地理教育 576. 1998.

[495] 五十嵐一成 「１７世紀初頭に至るメセタ協議会の内部構造の変質」土地制度史学 158. 1998.
[496] 五十嵐一成 「エスパニヤ黄金世紀史像再構築のために」札幌大学総合論叢 3. 1997.
[497] 五十嵐一成 "La incorporación de los llamados ganaderos de los llanos al Honrado Concejo en el siglo XVI" 札幌大学「経済と経営」29(1). 1998.
[498] 大内 一 「中世カスティーリャにおける侮辱と社会的価値」Estudios Hispánicos 21. 1996.
[499] Takimoto Kayoko "El Mesianismo del Poder Real: Una Historia Inédita de los Reyes Católicos" LINGUA 7. 1996.
[500] Elena Gallego "El legado humano de la misión Hasekura" Cuadernos CANELA 8. 1996.
[501] 伊藤ゆかり "Reforma pedagógica española del siglo XIX-a través del museo pedagógico nacional-"Cuadernos CANELA 8. 1996.
[502] 藤田一成 「カルロス五世の仮寓生活―ハランディーリャにおける12週間―」人文研究(神奈川大学) 130. 1997.
[503] 山道佳子 「「自由主義の3年間」のスペインにおける自由主義カトリシズム―J・A・リョレンテ『宗教基本法草案』(1819)とその検閲をめぐって―」スペイン史研究 11. 1997.
[504] 飯島みどり 「世紀末スペインの憂愁」みすず 450. 1998.
[505] 中島隆子 「異端審問所と民衆―16世紀前半のトレド妖術訴審問の事例より―」スペイン史研究 11. 1997
[506] 中島隆三 「現代スペインのセファルディ」海外事情研究所報告 32. 1998.
[507] フアン・ゴイティソーロ(山道佳子訳) 「権力、商売そして流血」みすず 447. 1998.
[508] 松田知木杉 「中世イベリアの二つの社会」法政大学教養部紀要 104, 人文科学編 1998.
[509] シーザー・C・アロンスフェルド著(立石博高訳) 『1492年の亡霊―スペインにおける宗教的自由を求める苦闘とユダヤ人問題』研究報告122 所内資料、東京外国語大学海外事情研究所 1998.

[510] 芝　修身　「17世紀のスペインの経済危機と地域間格差」南山経済研究 12(3). 1998.
[511] 幸田礼雅　「素顔のスペイン」新評論 6. 1987.
[512] J. ブレナン(幸田礼雅訳) 『素顔のスペイン』新評論 1998.
[513] 染田秀藤　『ラス= カサス』清水書院 1998.
[514] 黒川知文　「スペインにおけるユダヤ人迫害」『ユダヤ人迫害史—繁栄と迫害とメシア運動』教文館 1998.
[515] 根占献一　『東西ルネサンスの邂逅—南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』東信堂 1998.
[516] 根占献一　「ザビエル宣教と霊魂不滅の問題」学習院女子短大紀要 34. 1996.
[517] 青山　玄　「ザビエル滞在期の鹿児島—外国側史料の正しい理解のために」『キリシタン研究』第十三輯、吉川弘文館、1970.
[518] 大泉光一　『支倉六右衛門常長—慶長遣欧使節を巡る学際的研究—』文眞堂 1998.

文学

[519] 川成　洋ほか編　『ドン・キホーテ讃歌』行路社 1997
[520] 川成　洋ほか編　『ガルシア・ロルカの世界』行路社 1998
[521] 小島章司　「ガルシア・ロルカ鎮魂歌—生誕100 年、アンダルシアを訪ねて」毎日新聞朝刊 1998.9.8.
[522] 野谷文昭　「いまロルカがおもしろい」アサヒグラフ 1998.10.16.
[523] 小海永二　「私のロルカ」アサヒグラフ 1998.10.16.
[524] 篠田有史　「'98 ロルカの足跡を追って」アサヒグラフ 1998.10.16.
[525] セルバンテス(会田/ 大林編訳) 『ドン・キホーテ』白水社 1998.
[526] 長南　実 (訳) 『エル・シードの歌』岩波文庫 1998.
[527] 伊藤日出夫/ 小松原清子/ 濱田滋郎/ 小海永二/ 小川英晴(司会) 「ガルシーア・ロルカの世界」(座談会) 詩と思想 5. 1998.
[528] 松永伍一　「ロルカの木(ロルカを讃える詩) 」詩と思想 5. 1998.
[529] 稲本健二　"Vergara el Bueno: ¿Luis o Juan?" HISPANICA 41. 1997.
[530] 牧山裕言　"Mateo Alemán, defensor de la sociedad estamental" HISPANICA 41. 1997.

[531] Ceferino Puebla Pedrosa "Claves autobiográficas y metafóricas de <<El sitio de los sitios>>" HISPANICA 41. 1997.
[532] 小海永二ほか編『フラメンコとロルカ』彩流社 1998.
[533] 辻井 喬 「シャツに咲く薔薇(ロルカを讃える詩)」詩と思想 5. 1998.
[534] 田村さと子 「白い村の記憶 1936 年8 月10日(ロルカを讃える詩)」詩と思想 5. 1998.
[535] 小海永二 「ロルカの詩」詩と思想 5. 1998.
[536] 荻内勝之 「ロルカと同時代の詩人の動向」詩と思想 5. 1998.
[537] 平山一夫 「ロルカ讃―「血の婚礼」を語る」詩と思想 5. 1998.
[538] 濱田滋郎 「ロルカと音楽」詩と思想 5. 1998.
[539] 小川英晴 「ロルカの絵」詩と思想 5. 1998.
[540] 川成 洋 「ガルシーア・ロルカとアントニオ・マチャード」詩と思想 5. 1998.
[541] 佐伯泰英 「ロルカと闘牛―闘牛は午後の五時に始まるか」詩と思想 5. 1998.
[542] 若松 隆 「ガルシア・ロルカとスペイン内戦」詩と思想 5. 1998.
[543] 中丸 明 『丸かじりドン・キホーテ』NHK出版 1998.
[544] 本田誠二 「スペイン牧歌文学における異教的伝統(その2)―モンテマヨール『ディアナ』における異教的要素について―」「スペイン牧歌文学における異教的伝統(その3)―『ディアナ』続篇における異教的要素について」ルネサンス研究 III, 1996; IV. 1997.
[545] 佐竹謙一 「スペイン黄金世紀の文学にみる「アメリカ」(新大陸)のイメージ」アカデミア文学・語学編 62. 1997.
[546] ルイス・セプルベダ(河野万理子訳) 『カモメに飛ぶことを教えた猫』白水社 1998.
[547] 本田誠二 「レオン・エブレオにおける自然とスペイン牧歌小説」『ルネサンスの知の饗宴』東信堂 1995.
[548] 本田誠二 「スペイン牧歌文学における異教的伝統」平成6 年度科学研究費補助金[総合研究(A)]研究成果報告書、『ルネサンスおける異教的伝統の再検討」168-82.
[549] 蔵本邦夫 「小山内薫とスペイン文学」関西外国語大学研究論集 65. 1997.
[550] 小海永二 『ロルカ『ジプシー歌集』注釈』行路社 1998.

[551] 古家久世 「ドン・キホーテの冒険パターン I-II 」京都外国語大学研究論叢 XLIX 1997, LI 1998.

語学

[552] 高橋覚二 「スペイン語の前置詞 その14」アカデミア文学・語学編 62. 1997.

[553] 高松明子 "Teoría sobre el estudio lingüístico de Amado Alonso", 言語と文化(獨協大学外国語学部共通自由科目紀要) 1. 1994, "Amado Alonso Teoría sobre la base del español de América-base lingüística: nivelación del idioma", 言語と文化 2, 1996, "Amado Alonso La evolución lingüística en América en sí misma" 言語と文化 3, 1997. 『Amado Alonso y su teoría sobre el español de América アマド・アロンソと南米スペイン語についての理論』

[554] 麦里順平 「共通テキストースペイン語科目の場合」人文論集(早稲田法学会) 35. 1997.

[555] 児玉悦子 「江戸末期漂流民のスペイン語学習」国際学レヴュー 8. 1996.

[556] 菊田和佳子 「スペイン語における不定詞と無強勢代名詞の融合ー通時音韻論的一考察」言語・文化研究(東京外国語大学大学院地域文化研究科)13. 1995.

[557] 栗林ゆき江 「スペイン語の時間を表す語のカテゴリー的特性について」スペイン語学研究 11. 1996.

[558] 佐藤邦彦 「スペイン語の他動詞自動詞両用動詞について一問題提起について」スペイン語学研究 11. 1996.

[559] 三木一郎 "Condiciones pragmáticas de la coordinación copulativa" 京都外国語大学研究論叢 LI 1998.

[560] 石井久生 「スペイン諸地域のナショナリズムにおける言語ーカタルーニャとバスクの比較研究」言語文化論集(筑波大学現代語・現代文化系)43. 1996.

[561] 栗林ゆき江 「スペイン語の時間表現における前置詞の現れ方に関する考察」スペイン語学研究 12. 1997.

[562] 木村琢也 「スペイン語プロソディーの基底音韻表示」スペイン語学研究 12. 1997

[563] 上田博人 「都市のスペイン語の語彙バリエーション一分析の技術(3) クラスター分析」スペイン語学研究 12. 1997.

[564] 大倉美和子 「日本語とスペイン語」玉村文郎編『新しい日本語研究を学ぶ人のた

めに』世界思想社 1998.

[565] 中岡省治 「補文としての「DE+ 不定詞」ードン・キホーテ「正篇」の場合ー」 Estudios Hispánicos 22. 1997.

[566] 長谷川信弥 「カタロニア語の関係詞について(1-2)」 Estudios Hispánicos 21. 1996, 22. 1997.

[567] 出口厚実 「スペイン語教育・研究におけるwww サーバの役割」 Estudios Hispánicos 21. 1996.

[568] 辻井宗明 「Hube cantadoは述言形式か時制形式かー中世スペイン語における分析ー」 関西外国語大学論集 68. 1998.

[569] 布施温 「スペイン語の音節の数と分布についてー音節の分布を中心にー」 愛知県立大学紀要言語・文学編 29. 1997.

[570] 堀田英夫 「スペイン語文に使われている語の品詞の認定と原形形成」 愛知県立大学紀要言語・文学編 29. 1997.

[571] 青木文夫 "Un aspecto de morfosintaxis de pronombres personales tónicos en el español actual" Sophia Linguistica 41. 1997.

[572] 宮島敦子 「イスパニア語心理動詞の補語における格形式の交替」 Sophia Linguistica 41. 1997.

[573] 荻野雅司 「産業スペイン語における英語の影響」 駒沢大学外国語部論集 47. 1998

[574] 高橋覚二 「一斉授業で個別指導を狙うスペイン語作文」 アカデミア文学・語学編 64. 1998.

[575] 大岩 勉 「ビジネススペイン語の授業レベルと目標設定上の問題点」 アカデミア文学・語学編 64. 1998.

[576] Hisao Ishii "Proceso de normalización lingüística del catalán en el sistema educativo y sus factores impulsivos"外国語教育論集(筑波大学外国語センター) 19. 1997.

[577] 寿里順平 『スペイン語とつきあう本』 東洋書店 1998.

[578] 興津憲作 『すぐ使える実用スペイン語会話』 南雲堂フェニックス 1998.

[579] 坂東省次・岡本信照 『スペイン語会話のための文法入門』 南雲堂フェニックス 1998.

[580] 立石博高 「カタルーニャ・ナショナリズムと「言語」」 中嶋謙雄編『変貌する現

代世界を読み解く言葉』国際書院 1997
[581] 大森洋子 「スペイン語における認知的研究の可能性」専修大学外国語教育論集（専修大学ＬＬ教室）25. 1997.
[582] 寺崎英樹 「スペイン語」『世界の言語ガイドブック 1 ヨーロッパ・アメリカ地域』三省堂 1998.
[583] 近藤 豊 「セルバンテスの語彙について―動詞quedarseの史的位置付け」外国語教育―理論と実践―」（天理大学語学教育センター）23. 1997.
[584] 角川雅樹 「スペイン語に関わる近年の状況」―日本とアメリカの例から―」外国語教育センター所報（東海大学）別冊 第二類 1996.
[585] 秋山紀一 「多言語・多民族国家としてのスペイン」全人教育（玉川大学出版部）71(7). 1997.
[586] 石井久生 「スペイン諸地域のナショナリズムにおける言語―カタルーニャとバスクの比較研究―」言語文化論集（筑波大学現代語・現代文化学系）43. 1996.
[587] 上田博人『パソコンによる外国語研究への招待―研究・教育・生活・空間・時間』くろしお出版 1998.
[588] 上田博人 『スペイン語ジェスチャー小辞典』白水社 1998.
[589] 寿里順平 『スペイン語とつきあう本』東洋書店 1998.
[590] 野々山真輝帆 『「アミーゴ」とつき合う法」晶文社 1998.
[591] 江澤照美「スペイン語の中で使用される外来語―その位置づけと性状定について」摂大人文科学（摂南大学国際言語文化部）第5号別冊 1998.
[592] 萩尾 生 「ポスト・フランコにおけるバスク語の社会的位相―バスク自治共同体の言語政策と言語運動を中心に」宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論―統合のなかの変容と葛藤』人文書院 1998.
[593] 江澤照美 "El tratamiento hacia los miembros de la familia real de España y la Imperial de Japón" Lingüística Hispánica 19. 1996.
[594] Cristina Blanco Santos "Comunicación verbal" Lingüística Hispánica, 20. 1997.
[595] Noritaka Fukushima "<<Jabón>> y <<sabón>>" Lingüística Hispánica 20. 1997.
[596] Yukie Kuribayashi "Sobre la aparición de las preposiciones en las expresiones temporales" Lingüística Hispánica, 20. 1997.

[597] Yoko Murakami "Anákisis textolingüístico de un informe oral hispanoamericano"Lingüística Hispánica 20. 1997.

[598] Kimiyo Nishimura "Sobre la sufijación diminutiva. Tipos y funciones" Lingüística Hispánica 20. 1997.

[599] Hiroko Omori "La interpretación de la construcción con para + infinitivo" Lingüística Hispánica 20. 1997.

[600] Kinihiko Sato "Notas sobre la metáfora y la metonimia" Lingüística Hispánica 20. 1997.

[601] Toshihiro Takagaki "El participio adjetivo en español" Lingüística Hispánica 20. 1997.

[602] Hiroto Ueda "Semántica de los gestos españoles" Lingüística Hispánica 20. 1997.

[603] Atsumi Degichi "Sobre el lenguaje de programación ICON" Lingüística Hispánica 19. 1996.

[604] Yukie Kuribayashi "Sobre lass categorías gramaticales de las palabras" Lingüística Hispánica 19. 1996.

[605] Junnosuke Miyoshi "Los comcarativos de Madrid y de Caracas" Lingüística Hispánica 19. 1996.

[606] 木村琢也 「スペイン語プロソディーの基底音韻表示」HISPANICA 1997.

[607] 糸魚川美樹 「スペイン語における女性形職業名詞ー女性形名詞形成の背景と女性形が持つ意味合い」HISPANICA 41. 1997

[608] 高橋覚二 「時間帯名詞と前置詞」HISPANICA 41. 1997.

[609] 高橋節子 「「対話」と「語り」のテキストにおける「過去未来」の機能」HISPANICA 41. 1997.

[610] 山村ひろみ 「canté 形、cantaba 形と時間的限定性」HISPANICA 41. 1997.

[611] ダニエル・カサニ（政田利奈訳） 「外国語としてのスペイン語学習法における作文」スペイン文化シリーズ（上智大学イスパニア研究センター）5 号. 1997.

[612] ダニエル・カサニ（政田利奈訳）「生徒間での書記文口述訂正における語用論的・談話論的能力」スペイン文化シリーズ 5号 1997.

政治

[613] 川成　洋・奥島孝康編『スペインの政治』早稲田大学出版 1998.

[614] 黒田清彦　「立憲君主制のあり方ースペインと日本ー」南山大学ヨーロッパ研究センター報 4. 1998.

[615] Salvador Rodríguez-Artacho "La monarquía española y la U.E."南山大学ヨーロッパ研究センター報 4. 1998.

[616] フランシス・ムニョス・コンデ　「スペイン刑法の改正」(講演) 比較法雑誌(中央大学日本比較法研究所) 30(2). 1996.

[617] 楠津和郎　「国民連合政権の比較研究ースペインとイタリア」名古屋学院大学外国語学部論集 8(2). 1997.

経済

[618] 戸門一衛・原　輝史編　『スペインの経済』早稲田大学出版部 1998.

[619] 楠貞義　「スペイン経済の「ヨーロッパ化」対「自由化」プロセスと貿易パターンの変化を中心に」経済論集(関西大学) 45(6). 1996.

[620] 大内望/ 八巻邦次(他)　「スペインめん羊品種(1-2)」畜産の研究 52(5), 52(6). 1998.

[621] 中川　功　「EUの野菜主産地へと成長するスペイン南部の施設農業ーアンダルシア自治州沿岸部への園芸生産と流通の集中」日本農業経済学会論文集 1997.

[622] 石塚秀雄　「スペイン・エロスキ生協の挑戦」生活協同組合研究 258, 1997.

[623] 岩垂　弘　「モンドラゴン協組の最新事情」生活協同組合研究 255, 1998.

[624] 伊藤昭男　「スペインの経済発展構造ースカイライン分析を中心とした2時点比較分析」北見大学論集 34. 1995.

[625] 浜田弘作　「欧州における複式簿記の伝播過程再考」千葉商大論叢 34(3). 1996.

思想

[626] 佐藤　光　「オルテガ哲学から見たヨーロッパ通貨統合」」発言者 8月号 1998.

[627] Vicente Arribas "Elementos filosóficos en la teología de E. Schillebeeckx" サピエンチア 32, 1998.

[628] 木下　登　「現代スペインの歴史的状況ーハビエル・スビリの「感覚的知性」を中

心として」アカデミア文学・語学編 64. 1998.

[629] 木下 登 「ルイス・ビーベスとヨーロッパ平和思想をめぐる一考察」南山大学ヨーロッパ研究センター報 3号 1997.

[630] 角田哲康 「スペインとヨーロッパーミゲル・デ・ウナムーノの思想を中心に」南山大学ヨーロッパ研究センター報 3号 1997.

[631] アグスティン・サンチェス・ピダル(野谷文昭/ 網野真木子訳) 『ブニュエル、ダリ、ロルカ一果てしなき謎』白水社 1998.

[632] メレディス・イスリントン・スミス (野中邦子訳) 『ダリ』文芸春秋 1998.

[633] 横尾忠則/野中邦子 「対談 ダリは偉大な芸術家か?」本の話 9 月号 1998.

[634] 益子政史 「ピカソは語るーパリ開放直後のインタビュー」埼玉短期大学研究紀要 5. 1996.

[635] 安藤真次郎 "El alma humana en Juan Luis Vives" HISPANICA 41. 1997.

芸術

[636] 岡田裕成 「エル・グレコとスペインー「ティツィアーノの弟子」の市場戦略」福井大学教育学部紀要第6 部 芸術・体育学 美術編 15. 1997.

[637] 木下 亮 「ゴヤの版画作品と18世紀後半のスペイン版画一『気まぐれ』とアクワティントの導入との接点」鹿島美術財団年報 1997.

[638] 入江正之 『アントニオ・ガウディ論』早稲田大学出版部 1997.

社会・文化

[639] 竹中克行 「スペイン・カタルーニャにおける人口流入と社会変容」宮島 喬編『現代ヨーロッパ社会論』人文書院 1998.

[640] 壽里順平・原 輝史編『スペインの社会』早稲田大学出版部 1998.

[641] 山崎 侑 『スペイン巡礼の道』京都書院アートコレクション 1998.

[642] 小野華優 「太陽と情熱の国スペイン俳画紀行」婦人公論 3 月号 1998.

[643] 野谷文昭 「マドリード古本探しの旅」 『世界の古本探しの旅』朝日新聞社 1998.

[644] 中丸 明 『スペインひるね暮らし』文藝春秋 1997.

[645] 中丸 明 『スペイン ゴヤへの旅』文芸春秋 1998.

[646] 伊勢英子／柳田邦男　「対話　カザルスをめぐって」『見えないものを見る　絵描きの眼　作家の眼』理論社 1997.
[647] 竹中克行　「スペインにおける出生力の地域差」地理学評論 70(7). 1997.
[648] 林屋永吉「ガリシアで出会った大学教授」学鐙 2月号 1998.
[649] 高森敏明　『スペインおいしい紀行』NTT 出版 1998.
[650] 矢野純一　『スペイン巡礼の旅』NTT 出版 1998.
[651] 堀越千秋　『スペインうやむや日記』集英社 1998.
[652] 山崎　侑　『スペイン巡礼星の道』京都書院アートコレクション 1998.
[653] 高森敏明　『スペインおいしい紀行』NTT 出版 1998.
[654] 矢野純一　『スペイン巡礼の旅』NTT 出版 1998.
[655] 佐伯泰英　『闘牛はなぜ殺されるか』新潮選書 1998.
[656] パウロ・コエーリョ（山川紘矢／亜希子訳）『星の巡礼』地湧社 1995.
[657] 金谷重朗（他）「スペイン映画の魅力」キネマ旬報 1258. 1998.
[658] 浜田滋郎　「カントゥスースペインにおける古楽への関心と愛好熱のたかまりを示すこのレベルの魅力あふれる新譜をきく」レコード芸術 47(4). 1998.
[659] 横井弘海　「大使の食卓拝見　スペイン　「画一的」と言われても・・・」世界週報 79(11). 1998.
[660] 榎本和彦智　『日本人には分からないスペイン人の生活』南雲堂フェニックス 1998.

編 集 後 記

ＲＥＨＫ第６号が刊行の運びとなりました。今回より従来おこなっていたフロッピー変換から、執筆者の完成原稿をそのまま製本する方式へ改めることになり、体裁の面で多少の難があることは否めませんが、取り合えずこの形でお届けいたしますのでご高覧下さい。本誌刊行に当たり、会員はもとより多くの方々のお世話になりました。この場を借りお礼を申し上げます。

昨秋１１月第６回修士会研究会が本学で開催され、会員では大学院修了予定の伊藤亜矢氏（現本学非常勤講師）、高林則明氏（本学教授）、山崎信三氏（立命館大学教授）の３名が研究発表をされました。伊藤氏、高林氏の発表は論文として本誌に掲載することができました。

第２回の研究会から他大学の先生を講師にお招きして講演をお願いしておりますが、今回は常葉学園大学助教授の角田哲康先生にお願いして「ミゲル・ウナムーノをめぐって」と題する講演を約１時間にわたってして頂きました。ウナムーノの哲学をシェリングの積極哲学と比較させながらお話を頂き、発表後も活発な質疑応答が行われ、大変有意義なひと時を過ごすことができました。本講演の内容も併せて本誌に掲載しておりますので、ご高覧下さい。

この他、木下まりあ氏（聖霊短大非常勤講師）、山本匡史氏（天理大学専任講師）、米田富彦氏（同志社大学非常勤講師）からはそれぞれ文学、文化、語学に関する論文を執筆いただき、梅田美代子氏（本学非常勤講師）、片倉充造氏（天理大学助教授）にはそれぞれ今年出版された歴史と文学に関する本（翻訳版）の書評をご投稿いただきました。また、今年４月に天理大学専任講師に就任されご活躍の岡本信照氏は昨年もＪ．リプスキ著“El español de América”の「メキシコのスペイン語」の章を翻訳されましたが、今回は「ペルーのスペイン語」の章を担当されました。そして資料としては坂東省次先生（本学教授）が長年携わっておられるスペイン語圏に関する分野別の文献目録を掲載させて頂きました。

本誌は会員の研究発表の場として出発しましたが、現在では会員以外の方々の原稿も掲載しております。今後も内外の研究者に執筆を依頼し、講演、論文、翻訳、書評、資料等の多彩な研究項目を通してスペイン語圏の研究活動を続けて行きたいと願っております。

（三木一郎）

REHK (Revista de Estudios Hispánicos de Kioto)
1998年11月23日　印刷
1998年11月23日　発行
発　行　所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
発行責任者　三　木　一　郎
印　刷　所　都　印　刷
〒600-8318 京都市下京区北小路新町西入る

REVISTA DE ESTUDIOS HISPANICOS DE KIOTO

No. 5

Conferencia:

La filosofía unamuniana como filosofía positiva
– Una comparación con la filosofía de Schelling –
……Tetsuyasu SUMITA (1)

Artículos:

Oración seudo-hendida y oración hendida en español ……Aya ITO (15)
"Cantares de Ise", vistos desde la literatura hispánica
…… Maria KINOSHITA (31)
Abraham Valdelomar y Escenas Pisqueñas en Sus Memorias
……Noriaki TAKABAYASHI (43)
El concepto mágico de los mexicas en sus agüeros y
abusiones: basado en el libro quinto del *Códice Florentino*
……Tadashi YAMAMOTO (61)
Una observación sobre la expresión del verbo copulativo y el
estático – Sobre todo en la proposición A=B –
……Toshihiko YONEDA (79)

Reseñas:

Jaime Eyzaguirre, *Historia de Chile* por Masatoshi
Yamamoto (Shin Hyouron, 1998) ……Miyoko UMEDA (95)
José María Arguedas: *Yawar Fiesta*, por Akira
Sugiura (Gendai kikaku, 1998) ……Jyuzo KATAKURA (99)

Traducción:

John M. Lipski: El español de Perú……Shinsyo OKAMOTO (103)

Datos:

Bibliogtafía sobre los estudios españoles …… Shoji BANDO (117)

1998

Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto